会報
特攻
平成23年2月

第86号

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
〒105-0014　東京都港区芝 2-5-19TAビル
電　話　03（5730）1016
ＦＡＸ　03（5730）1017
http://www.tokkotai.or.jp
振替口座　00140-6-59580

編集人　飯田正能
発行人　羽渕徹也
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

新公益法人『公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会』発足

平成23年元旦午前零時の靖國神社社頭

世田谷山観音寺の特攻観音堂

平成20年12月に施行された公益法人認定法等の規定により、施行後5年以内に新公益法人への移行申請を行わなければならないこととなった。旧財団法人（特例財団法人）特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会では、約2年間の準備期間を経て、平成22年9月29日、理事会及び評議員会において新公益法人への移行申請を行うことが決議され、同年10月中旬、内閣府公益法人等認定委員会に公益法人への移行認定申請書を提出した。申請書の提出後約2カ月で公益法人移行認定の内定を、続いて同年12月22日、正式認定を受け、新公益法人移行登記と旧財団法人の解散登記が可能となり、年明け早々の平成23年1月4日、それぞれ登記を行った。

新公益法人の名称は『公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会』である。

なお、略称は「（公財）特攻慰霊顕彰会」である。

目次

新公益財団法人発足 …… 1
平成23年　年頭のご挨拶 …… 3
靖國神社年越し詣で …… 3
皇居参賀二題 …… 6
新「公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会」発足に際しての抱負 …… 9
第43回豫科練戦没者慰霊祭 …… 11
川南護国神社の例祭 …… 12
原町飛行場関係戦没者慰霊祭 …… 13
この人達にまつわる当時の状況 …… 20
平成22年度フィリピン慰霊巡拝旅行に参加して …… 21
年頭の決意「日々之新たなり」 29
広告「ＭＯＴＨＥＲ特攻の母」 29
鳥濱トメ物語」公演 …… 29
宇宙大航海時代の幕開け―「はやぶさ」の地球帰還― …… 30
平成22年度旧海軍串良基地出撃戦没者追悼式 …… 35
特集・特攻インタビュー（第3回）海軍航空特攻　江名武彦氏 …… 36
私の好きな「言葉」 …… 53
平成22年度第2回評議員会・理事会等報告 …… 53
事務局からの報告等 …… 56

靖國神社・奉納大絵馬

『公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会・定款（抄）』

（平成23年１月４日施行）

第１章　総　則

（名称）

第１条　この法人は、公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会と称する。

（事務所）

第２条　この法人は、主たる事務所を東京都港区内に置く。

第２章　目的及び事業

（目的）

第３条　この法人は、特攻隊戦没者の慰霊顕彰を行うとともに、特攻隊の史実等を広く国民に伝える事業を通して、国の恒久平和と発展に寄与することを目的とする。

（事業）

第４条　この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

(1)　特攻隊戦没者の慰霊祭実施及び他慰霊関連団体の慰霊祭等への参列、協力

(2)　広報誌・会報「特攻」の発行による特攻隊戦没者の伝承等及び事業活動の普及、広報

(3)　特攻隊、特攻隊戦没者等に関する資料の収集及び調査並びに関連出版物の発行

(4)　特攻勇士の像及び特攻隊戦没者に関する慰霊碑等の建立、奉納

(5)　その他前項の目的を達成するために必要な事業

２　前項に定める事業は、本邦及び海外において行うものとする。

（以下省略）

理事・監事・事務局

代表理事　山本　卓眞
専務理事　藤田　幸生
理事　菅原　道熙
理事　深山　明敏
理事　杉山　蕃
理事　大久保　隆
理事　廣嶋　文武
理事　臼田　智子
理事　栗原　宏
理事　笹　幸恵
監事　伊集院　雅英
監事　志賀　昭夫
事務局長　羽渕　徹也
事務局員　大澤　清

評議員

秋山　政隆
穴山　正司
飯田　正能
石井　光政
石井　千春
及川　昌彦
大穂　孝子
小倉　利之
衣笠　陽雄
倉形　桃代
田村　力
中江　仁
中村　家久
新垣　敬輝
根木　東洋
水町　博勝

平成23年　年頭のご挨拶

会長　山本　卓眞

皆様、よい正月をお迎えのこととお慶び申し上げます。

今年も国内平安のうちに正月を迎えることができました。有り難いことではありますが、日本を取り巻く国際環境は年々厳しさを増し、昨年は更に悪化しました。

まずロシアはソ連時代に逆行したかのように高姿勢を取り、さすがに「対日戦戦勝記念日」は取り止めて「第二次大戦戦勝記念日」としましたが、数々の国際法違反の罪業には反省の色もない。本来なら国恥記念日として深く反省し、罪科を償うべきでしょう。剰えメドベージェフ大統領は、臆面もなく不法占拠を無視して日本の北方領土を訪問しました。産経新聞によれば、欧州議会の英国選出議員グレアム・ワトソン氏は、「北方領土は第二次大戦でソ連に武力で奪われたが、現在も間違いなく日本の領土だ。問題を平和的に解決するようロシアに圧力をかける必要がある」と、欧州と日本の連携を呼び掛けた、とのことですが、残念ながら日本側にこれに呼応する動きはまだ見られません。

北朝鮮の異様さは世界の知るところで、特に日本にとって拉致、核、ミサイルのいずれも年々深刻化しつつあるにもかかわらず、中国の現在の朝鮮政策を変えさせない限り、効果的な手段が見当たらない状況です。

韓国も竹島の不法占拠を止めず、歴史観なども日本相手になると理性を失うかに見えます。

中国の軍事力増強を座視し続けた結果は、昨年の尖閣諸島における巡視船への故意の衝突事件、その後の中国は居丈高な姿勢を見せるに至りました。以前からの海底資源争奪、領海侵犯、国際法無視の尖閣諸島領有主張に加え、情報活動、軍事力とあいまって中国は覇権主義、領土拡張主義を露骨に現してきました。

かくて憲法前文にある「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼してわれわれの安全と生存を保持しようと決意」するなど到底できないことを日本国民も痛感しているはずです。

しかし問題は、自主独立、一朝事あるときは立って戦う気概が国民にあるか、愛国心があるかです。この気概と愛国心が外敵に対する抑止力の基礎であり、これに相応の軍事的抑止力を必要とします。孫子の「戦わずして人の兵を屈するは善の善なるものなり」を実現するには、相手の兵を屈服させ得る抑止力を持つ必要があります。米国との同盟も重要ですが、日本自身の防衛費増額、防衛諸法規の見直し、そして憲法改正も急がねばなりません。前大戦において特別攻撃隊の方々が、正に命を懸けて出撃し護って頂いた日本を引き継ぎ、道義の国、美しい国として存続し続けたいと念願します。一方受け身ばかりを脱して、価値観外交、宣伝戦など中国の変革を促す戦略も強力に実行したいものです。

さて、昨年は慰霊顕彰諸団体と共に首相以下の靖國神社参拝を要請し、新たな国立追悼施設を拒否する公開質問状を発しました。国立追悼施設は現在阻止できていますが、首相の靖國神社参拝は残念ながら実現の気配もありませんでした。今年も何らかの行動をするべきかと考慮していますが、会員の皆様の建設的なご提案をお願いいたします。

当協会も会員の高齢化と共に会員数が減少しています。若い方々に加入頂くため協会も努力をいたしますが、会員の皆様にも若い方々の入会促進に従来以上のご協力をお願いして新年のご挨拶といたします。

靖國神社年越し詣で

靖國神社年越し詣でも、回を重ねて今年連続6回目となる。筆者が喜寿の年の大晦日に思い立って始めたのだから、満82歳、年が明ければ83歳を迎える。八十路を越えても、靖國神社への思いは年毎になお更高まる。そして、年越し詣での人波も回を重ねる毎に増してきたように思われる。若者が圧倒的に多く、外国人の姿も実に多い。

例年のことながら、靖國神社ほど参詣者を手厚く遇してくださる神社は少ないのではないか。特に年越し詣でに当たっては、寒さを凌ぐための種々の配慮がなされている。境内各所での、

ボーイスカウト東京連盟に所属する大勢の少年・少女達による庭燎（かがり火）奉仕、遊就館前における熱い甘酒の接待、終夜開館されている遊就館、参集殿内でのお茶の接待等々。勿論、外苑参道の両側には沢山の屋台が立ち並び、参詣者が一時の暖を採り腹拵えをするには事欠かない。若者や家族連れにとつては、楽しい年越し詣でもある。日本人の古里がそこにはある。そして、内苑に進み身を清めて神前に頭を垂れれば、我々の先祖や先輩、同僚の御霊が手厚く祀られている。国のため命を捧げた人々の英魂が、身分の如何を問わず鄭重に祀られているのである。

開扉直後の神門・大凧と大羽子板

例年のとおり我が家では、大晦日の年越しそばは、自家製の手打ちと決めている。自家製といっても、我が陸士61期の仲間が、西多摩の山麓、檜原村の山林を開墾して栽培した、純粋の信州そばである。何と言っても流した汗の量だけ美味しさもまた格別である。大晦日の夜食は、家族一同揃って今年一年の無病息災を感謝し、そば焼酎で乾杯、香り立つそばの味を堪能し、身も心も程よく暖まったところでいよいよ出発。外はさすがに冷気深々として身に沁みる。

地下鉄九段下駅を出て坂を登れば、やがて大鳥居が漆黒の空に、ライトを受けて巨人の如く聳え立つ。これより

庭燎奉仕のボーイスカウトの少年達

第二鳥居までの参道両側には、沢山の屋台が並び、食べ物の臭いや参詣者のさんざめきに包まれ、いずこも同じ年越し詣での景観である。だが、ここまでは外苑、下乗札の立つ内苑神域に入れば、凛とした空気に包まれ、数百の参詣者が静かに開門を待つ。圧倒的に若者が多く、筆者のような高齢者の姿はほとんど見当たらない。外国人の姿もかなり多い。歴史と伝統のある日本人の風習が、そして日本人の美しい心が、外国人の目にはどのように映っているのであろうか。

閉ざされた神門中央扉の十六重弁菊の大御紋章がライトを受けて金色に輝き、大凧と大羽子板が左右の柱に飾られて、新しい年への門出を祝福するかのようである。神門左脇の大手水舎の銅板屋根もライトを受けて輝き、その前で庭燎（かがり火）奉仕をするボーイスカウトの少年達の姿も凛々しく映える。

全国神社奉納絵馬展

やがて零時30分前、一斉に開扉されると、ライトアップされた正面の拝殿が神々しく目に飛び込んでくる。一同粛々と拝殿前の鳥居付近まで進む。この日、大晦日の夜は風も凪いで絶好の日和、漆黒の空を背景に拝殿の甍が聳え立ち、金色の御紋章がライトに映えて輝き、見事なコントラストをなしている。今日の拝殿は特別に紫の幔幕を廻らし、白く染め抜かれた十六重弁菊の大御紋章が目に鮮やかである。

正零時、暗夜の静寂を破って拝殿の大太鼓が鳴り響くと、一斉に「明けましておめでとうございます」と互いに挨拶を交わして拝殿に進み、柏手を打ち、深く低頭して御霊に感謝の誠を捧げる。若者達が中心ではあるが、真摯な参詣者の姿がそこにはある。

新年拝殿掲示の明治天皇御製は、

「朝づく日　とよさかのぼる大空に
　のどかなる世の　年たちにけり」

（明治三十七年）である。真に清々しく心温まる御製である

拝殿の右横には、例年の如く伊勢絵

馬協賛会（代表安田織人氏）から献上された大絵馬が掲げられている。今年は辛卯年、干支の卯「うさぎ」に因んで二羽の黒兎の絵が描かれている。

また、参集殿の前には、全国約三百三十社から奉納された絵馬が美しく飾られており、その中に懐かしい郷里の氏神様の絵馬を発見して感無量。靖國神社に寄せる、護国神社を始めとする全国の神社及び善良な国民の崇敬心の篤さを思わせる。

更に、境内各所で庭燎奉仕をする大勢のボーイスカウトの少年少女達や受付案内の事務奉仕をする崇敬奉賛会青年部「あさなぎ」の若者達の健気な姿に感動。

このような日本人の心を受け継ぐ青少年のいる限り、未来への展望が開けるような気がする。参拝を終え、神社心尽くしの甘酒で一息ついた後、夜通し開館されている遊就館内を拝観して帰路に就いた。

なお、ここで、昨年12月21日、大阪高裁で判決言渡しのあった、いわゆる靖國霊璽簿等訴訟問題に触れておきたい。先の大戦で戦没した軍人・軍属の遺族が、靖國神社と国を相手に、同神社が遺族の意思に反して親族を合祀したことは、遺族の親族に対する「敬愛追慕する人格権」や「追悼・慰霊に関する自己決定権」などの、言わば「偲ぶ権利」を侵害されたなどとして、同神社霊璽簿、祭神簿及び祭神名票から当該戦没者氏名の抹消や国家賠償を求めた訴訟の控訴審判決が大阪高裁（前坂光雄裁判長）で言い渡されたが、同控訴審判決では、遺族側の請求を斥けた一審の大阪地裁判決を支持して遺族側の控訴を全面的に棄却した。「偲ぶ権利」については、昭和63年の「殉職自衛官合祀訴訟」で提起された「宗教的人格権」に内包されるものに過ぎないとし、「法的な保護に値する権利、利益とまで言うことはできない」として権利自体の存在を認めなかった。

一方、国の「合祀事務」について、判決では「国は、靖國神社の行う合祀という宗教行為そのものを援助、助長し、これに影響を与える行為を行っていたということができる」としたうえで、国に政教分離原則に違反する行為があったとしても、合祀自体は「靖國神社の自律的な宗教行為であり、被控訴人たる国の関与によっても、その自律性は失われていなかったと言うべきである」と判示し、政教分離原則に関しては、「不法行為ないし国家賠償法上、控訴人らの法的利益が侵害されたと認めることはできない」と指摘して控訴人（原告）の請求を斥けた。

控訴人（原告）側弁護団らは、判決の前段部分のみを殊更に強調して「国の合祀協力を違憲とした初の判断」と評価し、マスコミ各社もこぞって「国による合祀への積極的な関与を認めた初の司法判断」などと報道した。

しかし、政教分離原則については、昭和52年の津地鎮祭訴訟の最高裁判決が、我が国の裁判所として初の判断基準である目的効果論を判示し、被占領以来、法学者の間で一般論とされてきた「神道指令の精神に基づく解釈」、つまり、国家と宗教との「完全分離主義」を斥けた。今回の判決でも「憲法上、政教分離を定めた規定は、いわゆる制度的保障」として、基本的にこの判断基準を踏襲する形を取ってはいるが、司法における「政教分離」認識は未だに混乱を続けていると言えよう。

この判決に対し、靖國神社、厚生労働省とも、これまでの主張が認められたとコメントしているが、控訴人（原告）らは上告し、争いの場は、最高裁に移された。

戦後における靖國神社の祭神合祀手続は、サンフランシスコ講和条約が発効した昭和27年4月28日以降、戦没者遺族の要望に応えて迅速な対応をとるため、遺族援護行政を所管していた旧厚生省との共同作業によって進められた。厚生省と靖國神社は、合祀事務は概ね終戦前のものに準じて行うとの申し合わせの後、昭和31年4月19日に、「靖國神社合祀事務に関する協力について」という通知を発し、都道府県に対して合祀事務に協力するよう指示した。祭神は国や自治体が選考し、靖國神社が合祀の祭典を行った。つまり、戦後の合祀に当たっては、靖國神社は資格者の身上に関して旧厚生省に照会し、その回答を基礎に合祀者を決定してきたものであり、戦前からの国と靖國神社との深い関係の歴史は、これによって貫かれたのである。本件訴訟において、国は、一連の合祀事務について、特定の団体への特別な情報提供ではなく、あくまでも行政サービスの一環としての行為であると主張しており、今日における行政の情報公開の考え方からも十分に理解され得る行為である。戦後靖國神社は、たとえ一宗教法人となったとしても、この歴史の連続性こそ、我々の共通の認識であることに変わりはないのである。

なお、霊璽簿等から戦没者氏名の抹消などを求める同様の訴訟は、他に東京、沖縄でも提訴されており、今後の推移を注視する必要がある。

（平成23年1月17日付け「神社新報」参照。飯田正能記）

皇居参賀二題

例年のとおり、暮れと正月、二度の参賀に皇居を訪れた。12月23日の天皇誕生日と1月2日の一般参賀である。いずれも好天に恵まれて多くの人々が訪れた。

天皇陛下は昨年の12月23日、御年77歳、喜寿の御誕生日を迎えられた。誠に慶賀に堪えないところであり、心より聖寿万歳を祈念申し上げる。

一昨年は、御即位20周年記念行事や御成婚50周年の金婚式を迎えられ、祝賀行事が盛大に催されたところであるが、昨年は厳しい政治、社会、経済情勢を反映してか、特別の祝賀行事などもなく、落ち着いた雰囲気の中で御誕生日を迎えられた。それに先立って行われた記者会見で、1年を振り返られてまず、高齢者の所在不明問題について、「思いも掛けないことで驚きました」「生死が分からない人々がいることは、非常に残念なことでした。人々の老後が安らかに送れるようになっていくことを切に願っています」と述べられ、更に、多くの高齢者が熱中症で亡くなったことや、宮崎県で発生した口蹄疫での人々の労苦に思いを寄せられた。

一方「晴れやかなニュース」としては、日本人二人のノーベル化学賞受賞や、小惑星探査機「はやぶさ」の快挙を挙げられ、また、魚類分類学者らしく、絶滅種とされていた淡水魚クニマスが富士山麓の西湖で発見されたことを「奇跡の魚」と喜ばれ、発見者の中坊徹次京大教授や東京海洋大客員准教授でタレントの「さかなクン」の名前を挙げて、その貢献を称えられた。

また、御自身の健康に関し、最近沿道の人々から「お大事に」と声を掛けられることがあるとか、「人々が健康を気遣ってくれることに深く感謝しています」「最近は耳がやや遠くなり、周囲の人には少し大きな声で話してくれるように頼んでいます」などと、率直に語られた、ということである。

更に今年の元旦には、新年を迎えるに当たっての御感想を発表されたが、その中で、昨年は猛暑が続き、経済状況も厳しかったことに触れられ「人々の生活には様々の苦労があったことと察しています」と国民の暮らしぶりを案じられた上で、「家族や社会の絆を大切にし、国民皆が支え合ってこれからの困難を克服するとともに、世界の人々とも相携え、その安寧のために力を尽くすことを切に願っています」とメッセージを送られた。

如何なる政・官・財・学各界代表者の言よりも、陛下のお言葉は誠実味と恩愛の情に溢れ、有り難く身に沁みる思いがする。

天皇・皇后両陛下が平成22年にお詠みになられた御歌

（宮内庁発表）

天皇陛下御製（5首）

〈石尊山登山〉
長き年の後に来たりし山の上（へ）に
はくさんふうろ再び見たり

〈大山千枚田〉
刈り終へし棚田に稲葉青く茂り
あぜのなだりに彼岸花咲く

〈虫捕りに来し悠仁に会ひて〉
遠くより我妹（わぎも）の姿目にしたる
うまごの声の高く聞え来（く）

〈遷都千三百年にあたり〉
研究を重ねかさねて復原せし
大極殿（だいごくでん）いま目の前に立つ

〈奄美大島豪雨災害〉
被災せる人々を案じテレビにて
豪雨に広がる濁流を見る

皇后陛下御歌（3首）

〈明治神宮鎮座九十年〉
窓といふ窓を開きて四方（よも）の花
見さけ給ひし大御代（おほみよ）の春

〈FIFAワールドカップ南アフリカ大会〉
ブブゼラの音も懐しかの国に
笛鳴る毎（ごと）にたたかひ果てて

〈「はやぶさ」〉
その帰路に己れを焼きし
「はやぶさ」の
光輝（かがや）かに明かるかりしと

○天皇誕生日参賀

今日は12月23日、天皇誕生日の佳き日である。冬至（昨22日）の頃としては珍しく温暖な陽気に恵まれ、空には一点の雲もなく、正に天皇日和と言うべきか。毎年の嘉例により皇居一般参賀（午前中3回お出まし、午後は記帳のみ）に出掛けた。

今回は第1回のお出まし（10時10分頃）に間に合うようにと、9時30分の正門開扉時刻に合わせて、地下鉄大手町駅から皇居前広場に向かったが、既に検問所前は参賀の人波で一杯であった。御即位20年祝賀の昨年は、平成に入って最高の3万人を超えたということであったが、今年もそれに劣らず、一般参賀の人員は、2万6298人に及んだという。若い人や家族連れが多く、特に外国人の多さが目立つ。我が国の皇室に対する敬愛の念は、今や国際的である。しかも、内外を問わず、いずれの人の顔も晴れやかに見える。

日本晴れの青い空と皇居の緑、それに参賀の人々が手にする日の丸の小旗が映えて美しい。やがて天皇、皇后両

陛下を始め皇太子、同妃両殿下、秋篠宮、同妃両殿下が長和殿ベランダにお出ましになると、宮殿前を埋める参賀の人々から一斉に万歳の声が上がり、日の丸の小旗が打ち振られる。これに応えて両陛下並びに皇族方が御手を振られ、にこやかに会釈をされる。皇室と国民を結び付ける最も美しい光景である。その後天皇陛下は、短い御言葉を賜るが、決まって国民の幸せを第一に祈念される。「今年は経済情勢が厳しい中、多くの地域で猛暑が続きました。苦労の多い日々を過ごした人も多いのではないかと案じています。来る年が少しでも良い年となるよう願っています」と述べられた。国民と国家の象徴として努められる、真に真摯で崇高な御姿である。

参賀を終えて、皇居東御苑を経、北の丸公園を通って靖國神社へ向かう。途中、東御苑の道端で見かけた満開の冬桜が非常に印象的であった。この日は、今上陛下のめでたい御誕生日であると同時に、かの忌まわしい極東国際軍事裁判（いわゆる東京裁判）の判決で、いわゆるA級戦犯として絞首刑を言い渡された（昭和23年11月12日）、七士の方々（土肥原賢二、松井石根、東條英機、武藤章、板垣征四郎、廣田弘毅、木村兵太郎）が、巣鴨拘置所において処刑された日（昭和23年12月23日午前0時1分と0時20分）から62年（63回忌）の命日でもある。

皇居東御苑の冬桜

靖國神社参拝を終えて、遊就館前の「ラダ・ビノード・パール博士顕彰碑」に参拝する。この日の顕彰碑には生花が供えられ、大勢の人々、特に若者達が碑前に佇んで熱心に碑文と靖國神社前宮司故南部利昭氏が捧げた建立の「頌」に見入っていた。この碑文と「頌」は、極東国際軍事裁判の不当性と同裁判所判事としてただ一人、全員無罪を主張したインド代表判事パール博士の崇高な使命感を端的に表していると思われるので、再度掲示する。

「　碑　文（意見書の結語）

時が熱狂と偏見とを
やわらげた暁には
また理性が虚偽から
その仮面を剥ぎとった暁には
その時こそ正義の女神は
その秤を平衡に保ちながら
過去の賞罰の多くに
そのところを変えることを
要求するであろう

ラダ・ビノード・パール　」

「　頌

ラダ・ビノード・パール博士は、昭和二十一（一九四六）年五月東京に開設された「極東国際軍事裁判所」法廷のインド代表判事として着任され、昭和二十三年十一月の結審・判決に至るまで、他事一切を顧みる事なく専心この裁判に關する膨大な史料の調査と分析に没頭されました。

博士はこの裁判を擔當した連合國十一箇國の裁判官の中で唯一人の國際法専門の判事であると同時に、法の正義を守らんとの熱烈な使命感と、高度の文明史的見識の持主でありました。博士はこの通称『東京裁判』が、勝利に傲る連合國の、今や無力となった敗戦國日本に對する野蛮な復讐の儀式に過ぎない事を看破し、事實誤認に満ちた連合國の訴追には法的根據が全く缺けている事を論証し、被告團に對し無罪と判決する浩翰な意見書を公にされたのであります。

その意見書の結語にある如く、大多数連合國の復讐熱と史的偏見が漸く収まりつつある現在、博士の裁定は今や文明世界の國際法學界に於ける定説と認められたのです。

私共は茲に法の正義と歴史の道理とを守り抜いたパール博士の勇気と情熱を顕彰し、その言葉を日本國民に向けられた貴重な遺訓として銘記するためにこの碑を建立し、博士の偉業を千古に傳へんとするものであります。

平成十七年六月二十五日
靖國神社　宮司　南部利昭　」

○新年一般参賀

大晦日以来三日続きの晴天、一点の雲もない日本晴れ、正に参賀日和である。1月2日は筆者の誕生日でもあって、家族共々朝早めの祝い膳を頂いて家を出た。

新年参賀はさすがに規模が大きい、皇居外苑では、馬場先門、和田倉門、桜田門の三方向から進んできた参賀の人波を各検問所で検査をした後、警官の誘導に従い石橋を渡って正門から入り、鉄橋（二重橋）を渡って宮殿長和殿前の広場に至る。いずれも長蛇の列である。早めにと思って家を出たが、地下鉄駅から検問所まで約30分、検問所から正門石橋前まで約30分、そこから更に広場まで約30分と約1時間半を要したため、第1回の御出御に間に合わず、11時頃の第2回の御出御を待つこと約30分、辛抱の2時間であった。およそ2万人を収容できるという長和殿前の広場は、手に手に日の丸の小旗を持った参賀の人々で忽ち一杯になった。やはり若者が圧倒的に多く、華やかな雰囲気に満ちている。外国人も非常に多い。観光ツアーと思われる団体も多い。喜ばしいことである。参賀は日本の伝統文化でもあるからだ。

やがて11時、天皇・皇后両陛下を先頭に、皇太子・同妃両殿下、秋篠宮・同妃両殿下ほか皇族方が御出御になられると、一斉に日の丸の小旗が打ち振られ、天皇陛下万歳の歓声が上がり、両陛下と皇族方がお手を振ってにこやかに応えられた。この日の皇族方は、皇太子・同妃両殿下、秋篠宮・同妃両殿下のほか、常陸宮・同妃両殿下、三笠宮・同妃両殿下、高円宮妃殿下、彬子女王殿下、承子女王殿下、典子女王殿下、絢子女王殿下の11方に両陛下合わせて13方という、誠に豪華な、華やいだ感じのする御出御であり、皇族方のお健やかな御容姿を拝し、誠に喜ばしい限りであった。取り分け三笠宮崇仁親王殿下には、旧臘2日に95歳の御誕生日をお迎えになられたところであり、妃殿下共々の御長寿を心から慶賀申し上げる。

天皇陛下からは、「新しい年をともに祝うことを嬉しく思います。今年が皆さん一人ひとりにとり少しでも良い年となるよう願っています。年頭にあたり世界の平安と人々の幸せを祈ります」とのお言葉を賜った。過重な御公務の中にあって絶えず国民の上に思いを寄せられる、誠実で優しい陛下の大御心に感動させられた。

今年の一般参賀での両陛下と皇族方の御出御は、午前3回、午後2回の計5回、参賀者数は、昨年とほぼ同じく約7万7千人に達したという。身も心も清められ、晴れ晴れとした思いで宮殿前広場を去り、家族との誕生祝いのささやかな祝宴を催す浅草へと向かった。

（飯田正能記）

○平成23年「宮中歌会始」の御儀

新春恒例の「宮中歌会始」の御儀が1月14日午前、皇居正殿「松の間」において、古式に則り厳かに行われた。今年の勅題は「葉」で、天皇・皇后両陛下の御製・御歌、皇族方のお歌、特に招かれた歌を詠む召人の歌と選者の歌、2万802首の中から選ばれた選歌10首（今年の最年少は兵庫県の大西春花さん14歳、最年長は鳥取県の森本由子さん76歳）が、天皇陛下の御前で披講された。

天皇陛下御製

五十年（いそとせ）の祝ひの年に共に蒔きし
白樺の葉に暑き日の射す

皇后陛下御歌

おほかたの枯葉は枝に残りつつ
今日まんさくの花ひとつ咲く

皇太子殿下お歌

紅葉（もみじ）する深山（みやま）に入りてたたずめば
木々の葉ゆらす風の音（と）聞こゆ

皇太子妃殿下お歌

吹く風に舞ふいちやうの葉秋の日を
表に裏に浴びてかがやく

秋篠宮殿下お歌

山峡（やまかひ）に直（すぐ）に立ちたる青松の
嫋（たお）やかなる葉に清（さや）けさ覚ゆ

秋篠宮妃殿下お歌

天蚕（やままゆ）はまてばしひの葉につつまれて
うすき緑の繭をつむげり

●選歌（詠進歌10首、生年月日順）

鳥取県　森本由子
夕凪を柿の若葉に確かめて
灰七十キロ無事に撒き終ふ

兵庫県　井上正一

電源を入れよと妻に声かけて
　わさびの苗葉に液肥を放つ
　　山口県　岡本義明
草の葉の切れ端のこるシャワー室
　妻は夏日の草を刈りしか
　　カナダ国ブリティッシュ
　　コロンビア州　粟津三壽
妻の里丹波の村の山椿
　カナダに生ひて葉をひろげゆく
　　茨城県　丹波陽子
一字一字指しつつ読みぬ木簡の
　万葉仮名の「皮留久佐乃皮斯米（はるくさのはしめ）」
　　東京都　吉竹　純
背丈より百葉箱の高きころ
　四季は静かに人と巡りき
　　東京都　上田真司
ささやかな悲しみあれば水底に
　木の葉が届くまで待ちゐたり
　　京都府　桑原亮子
霜ひかる朴葉拾ひて見渡せば
　散りしものらへ陽の差す時刻
　　静岡県　中村玖見
駐輪場かごに紅葉をつけてゐる
　きみの隣に止める自転車
　　兵庫県　大西春花
「大丈夫」この言葉だけ言ふ君の
　不安を最初に気づいてあげたい

新「公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会」発足に際しての抱負

専務理事　藤田　幸生

会員の皆様、新年おめでとうございます。

最近の我が国内外の情勢は目まぐるしく変化し、皆様におかれましても、様々な想いを深くしておられることと拝察いたします。

この度、財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会は、国の方針に従い、公益法人化の手続を終わり、新名称が、公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会（以下「特攻慰霊顕彰会」という）と改称されました。また、役員の名称も変わり、かつ世代も交代し、第四世代とも言うべき戦後世代に大きく変わりつつあります。この機会に、新しい特攻慰霊顕彰会の活動を、今後どのように進めていくかについて、私の抱負を述べてみたいと思います。

まず、会を取り巻く環境についてですが、国内情勢は、戦没者の慰霊顕彰に関し、官民共に関心が薄れてきているようにうかがえます。そのような中で、特攻隊戦没者慰霊顕彰に関しては、今まで、戦友、御遺族など、特別に関係の深い方々が担ってまいりました。これからは「何をどのように受け継ぎ、伝えていけばよいか」をしっかり確認し、伝承者を募り、新しい活動の態勢を打ち立てていかなければならない状況になってきていると認識しております。

現状を分析してみますと、協会の活動は、2名の事務局員を中心に、役員の協力支援を得て推進されております。今後、これからの変化に対応して改革していかなければなりません。現状認識は以下のとおりです。

〔態勢〕

1　会員数は、戦友、御遺族等会員の高齢化が進み、急激に減少しています。一方で自衛隊ＯＢ等も含めて、若い戦後世代の入会者が少ない。

2　会の財産管理、経理には、今のところ、特に大きな問題はありませんが、今後、一般寄附、会員の寄附（会費）の減少が予測されます。

3　事務局員以外の全役員はボランティアです。戦友、御遺族等から、現職を持つ多忙な若い世代に、徐々に交代しつつあります。

4　特攻慰霊顕彰会は、世田谷山観音寺の「特攻平和観音奉賛会」との二面性を有しています。

〔慰霊活動〕

1　特攻隊戦没者に対する慰霊祭は、毎年、春（靖國神社）、秋（世田谷山観音寺）の年2回催行しております。それぞれに約４００名程度の参列者があります。

2　毎月18日には、14時から世田谷山観音寺で、「月例法要」があり、これに会員等が参列しております。毎月15～25名程度の参列者があります。

3　国内の各地で地方自治体など各種団体が主催する特攻関係慰霊祭には、①代表参列、②供花、③電報のいずれかの形で参加するように努めております。

4　海外の慰霊参拝は、フィリピン・マバラカットの慰霊祭に代表を送り、参列させています。その際、機会を得て、セブ島、レイテ島などを巡拝しています。

〔事業〕

1　『特別攻撃隊全史』を出版、頒布しております。『特別攻撃隊』の第五改訂版に相当するもので、近く修正、追補版を出す予定です。多数部作成し、販売するとともに、公立図書館等の公的機関に配布贈呈しております。頒布の促進等、残部の有効活用が必要です。

2　ＣＤ『あゝ特攻』（その1、その2）を販売しております。「日本人の心を伝える会」との共同事業で、靖國

神社、知覧や鹿屋の特攻記念施設、偕行社、水交会その他に、販売を委託しております。それにより得た資金は「特攻勇士の像」建立に還元しております。

3「特攻勇士の像」の全国護國神社等への奉納を進めております。10体目が本年5月26日(木)に「千葉縣護國神社」に奉納される予定です。千葉に続く建立については、今後、靖國神社、各護國神社等と引き続き調整して、本事業を推進していく予定です。

4　会の広報活動として、以下の事業を実施しております。

ア　会報『特攻』を発行しております。2月、5月、8月、11月の年4回発行しておりますが、その編集等の業務は、現在、飯田編集人が事務局の支援を得て、ほぼ一人で記事の収集・作成、編集、校正等を実施しています。担当者の負担を軽減し、会報の一層の充実を図るため、工夫が必要です。

イ　ホームページを公開しております。業者に委託して、事務局で管理しておりますが、一層の充実と魅力化のために工夫が必要です。

5　会員募集活動については、会報等で公募するほか、会員個別の努力により、実施しております。今後、会員を増強していくことは喫緊の課題であり、会を挙げて組織的に取り組んでいく必要があります。

以上の観点から、今後の特攻慰霊顕彰会の課題と活動の方向について、抱負を述べてみたいと思います。

今後の情勢変化の中で、会の活動を活発化させていかなければなりません。そのためには、今後解決しなければならない課題が多くあります。改めて、会の活動目的と照らし合わせ確認してみましょう。

会の活動目的は、新しい公益財団法人(以下「公益法人」という)の定款においても、基本的に継承されます。すなわち、特攻隊戦没者の慰霊顕彰を行うことにより、その史実等を国民に伝え、国の恒久平和と発展に寄与することであります。そのため、国の内外において次の事業を行うこととしています。

①　慰霊祭の実施、他の慰霊祭等への参列、協力

②　会報『特攻』の発行

③　特攻に関する資料の収集、調査、その結果の出版物の発行

④　特攻勇士の像の全国護国神社等への奉納

⑤　その他、これらの目的達成に必要なもの

これらの目的、事業に照らし合わせたとき、これからの課題と活動の方向は、次のようになるのではないかと考えます。

1　事業企画推進態勢の確立

①　慰霊顕彰活動を充実させ、推進していく。

②　「特攻勇士の像」の護国神社等への奉納を更に推進していく。

③　資料収集、調査、出版物発行に力を入れる。

・『特別攻撃隊全史』等の頒布、活用（追補版の追加送付）

・特攻慰霊碑巡拝参考資料の作成、頒布

・CD「あゝ特攻」(その1、その2)の頒布

④　会の予算減に対応した全事業の見直しをする。

2　会員募集態勢の確立

戦友、御遺族会員の高齢化による減少を見越して新規会員を募集し、会勢を維持拡充していく。

3　広報態勢の確立

会の目的達成のために、一般国民に対して会の活動を広く広報していくことは、極めて重要である。そのために、会報『特攻』及びホームページの充実を図っていく。

このような考え方の下、特攻慰霊顕彰会の活動態勢を強化するため、専務理事としては、会員の中から有志による次のようなグループを編成し、活動をしていただきたいと考えております。

ア　事業企画推進グループ

イ　会員募集グループ

ウ　広報グループ

事務局は、唯一の常駐機関であるところから、これらグループの要となって、会の目的達成のため活動していくことは言うまでもありません。

その活動の心構えとしては、英霊にきちんと正対して「史実を良く知り、英霊に感謝し、省みて日々の己の生き方を正していく」、「日本人の心を取り戻し、伝えていく」ところにあろうかと思います。

以上、現在、私が考えているところを述べてみました。次回（3月予定）の役員会で発表すべく、それまでの間に、会員の皆様の、積極的なご指導、ご意見をいただき、逐次検討の上、具体的かつ適正な絵を描いてまいりたいと考えております。

ご意見等は、直接事務局へFAX等で、また、毎月18日の月例法要の直会後、世田谷山観音寺でお伺いできればと考えております。

これからの新しい年を、英霊の意に沿うべく、皆様と共に努力してまいりましょう。

以　上

第43回豫科練戦没者慰霊祭

評議員　小倉　利之

平成22年10月3日（日）、財団法人「海原会」（藤野雅之会長）主催による第43回豫科練戦没者慰霊祭が、陸上自衛隊武器学校内の雄翔園「豫科練二人像」前に、大勢の御遺族、御来賓、同窓生各位が参集し、戦没者一万八千五百六十四柱の英霊をお迎えして、厳粛かつ盛大に挙行されました。

例年この時期は、秋雨前線の影響で雨の日が多く、一週間前の予報でも、当日の天気は、曇り時々雨とのことでしたが、予報が外れて幸いその日は、朝から薄日が差し青空も見える天気となり、気流も安定しており、会場内には、慰霊飛行への期待も高まってきたところ、やがて3機の編隊と1機単独の慰霊飛行が始まり、参加者は盛んにカメラを向けたり、歓声を上げたりしていました。

豫科練二人像前での慰霊祭（献花）

慰霊祭は先ず開式の辞を実行委員長の横溝潔海原会副会長が述べられ、全員起立の上、国歌君が代の吹奏に合わせて国旗が掲揚されました。

次いで陸上自衛隊武器学校教導隊員2名がトーチを掲げ、二人像の前で号令と共に献火をしました。

慰霊祭参列者一同

御歌奉詠は、地元阿見詩吟会の佐藤昌司師範により、次の高松宮喜久子妃殿下の御歌が詠じられましたが、その声は青空の下澄み切った静寂の中を、素晴らしく響き渡り、感涙を誘う雰囲気でした。

「うなはらに
　はた、おおぞらに　散華せし
　　君ら声なく　いく春やへし」

式辞は、海原会の藤野雅之会長が述べられましたが、先ず、これまでこの慰霊祭を執行してきた関係各位に対して敬意と感謝の誠を捧げたいと述べ、先の戦争で矛を収めてより既に65年の歳月が流れ去ったが、我々は天国における英霊に対して、粛々と慰霊式典を挙行し、堅い「豫科練の絆」を示したい、また、現在は陸上自衛隊武器学校の敷地内にある「雄翔園」に「二人の像」を建立し、慰霊式典を行うとともに、豫科練の歴史を正しく後世に伝承すべく努めておりますので、一万八千五百六十四柱の在天の英霊よ、どうぞ心安らかにお眠り下さい、と述べられました。

同窓代表として海原会の保坂俊雄理事が追悼の言葉を述べられましたが、その中で、我々生存者の使命は、犠牲者を慰霊するとともに、世界各国と友好の輪を広げ、戦争の悲劇を二度と繰り返さないことにあります。それが散華された戦没豫科練先輩各位の御霊に報いる道と確信しております、と述べられました。

次いで、各界代表、御遺族、同窓生が順次碑前に進み出て一礼し、白菊一輪を捧げて御霊安かれとお祈りした。

御来賓代表としての御挨拶の中で、若月寿一陸上自衛隊武器学校長は、「雄翔園」と「二人の像」は、若い隊員の教育の場として活用されていることを報告されました。

御遺族を代表して、故仲野修一飛曹（乙9）の実妹仲野千代様は、御挨拶の中で、優しい兄でありました。今思い出しても、寂しさが込み上げて参ります。激戦の真っ只中に敢然として飛び立って行ったことでしょう。生存隊員の皆様も既に傘寿を越えられ、亡き戦友の分まで頑張ってこられました。そして、遺族に対しても格段の配慮を頂き、感謝申し上げます。この日のために尽力下さいました海原会の皆様、そして、陸上自衛隊武器学校の校長以下多数の自衛隊員の皆様方に心より御礼申し上げます。在天の英霊の皆様もどうか安らかにお眠り下さい、と申されました。

次いで、参列者全員による「若鷲の歌」を奉唱しました。

奉納行事として、陸上自衛隊音楽隊による音楽演奏や地元婦人会有志による舞踊「若鷲の歌」が演じられた後、実行副委員長の阿保文敏海原会副会長が閉会の辞を述べて、式典は滞りなく終了いたしました。

次いで、「雄翔館」及び「豫科練平和祈念館」を見学した後、直会が開催され、主催者謝辞、御来賓挨拶と続いて乾杯となりました。

音楽隊による数々の演奏に続き、陸上自衛隊武器学校の有志による勇壮な陣太鼓が披露され、また、軍歌歌手としてお馴染みの田中ショーリ氏の軍歌メドレーが場内に流れると、拍手が鳴り響きましたが、定刻、帰路の無事を願って閉会となりました。

次に書籍『特攻』の一部を御紹介いたします。

「初期の長い戦争、激動の昭和という時代から平成へと歳月は流れて十数年。高度成長の時代、経済大国となった後期。その歩みは、まさに昭和そのものである。

責務を全うすべく歴史の渦中で、何を感じ何を決断したのか。戦史に残る特攻。

今思い出す、かすかに聞こえる若鷲の歌・・・・

生命惜しまぬ「豫科練」の意気の翼は、勝利の翼

見事撃沈した　敵艦を

母へ写真で　送りたい

と、歌を背に、父母兄弟共に遊んだ友人同級生に見送られて、若い血潮と希望に満ち（未知）あふれた大空への夢を抱きつつ、出兵された若人の光景が、つい最近のように想えてならない。時は一九四四（昭和十九）年末、戦況は急変をたどり、身を捨てて国を守るなどと考えられなかったであろう若人・・・・。

どうせ命はお国のためと覚悟し二度とない人生、尊い命。日本武士道の精神を持ち、祖国日本の安泰と平和、家族の幸せを願い、生還を期することのない、各基地を、一発必中と南海の大空へ飛び立って行かれた特攻隊員の心中を察する今日。

今後、二十一世紀を担う若人が、恒久平和な日本の礎石となることを願い、基地等の資料館が開設され、特攻隊員のご遺族の温かいご協力とご理解を賜り、国を護り、親を思い、身を投じて散華された英霊の遺影・遺書が顕彰されていることを忘れてはならない。二度と繰り返してはならない、平和な日本であることを願いつつ・・・。」

川南護国神社の例祭

田中　賢一

宮崎県児湯郡川南町の護国神社の例祭は、毎年11月23日に町を挙げて行われているが、同地は牛豚の口蹄疫で大被害を受けたので、この行事をやってもらえるかどうか危ぶんでいたが、例年どおり、町長が祭主となって11月23日に行われた。私は歩行不能なので申し訳ないことながら欠席した。

この神社の御祭神は、地元の戦死者は六百余柱なのに、かつてこの地にあった陸軍挺進部隊の全戦死者となっている。その数は定かでないが、新田原や西筑波にあった者を含めて約一万二千とされている。

川南護国神社例祭

昔の落下傘部隊の参加者は年々減少し、今年は2名というが、自衛隊空挺関係者は50名も参加してくれた。習志野近辺からは現職空挺隊員を含めて11名参加している。それらの世話は空挺同志会宮崎支部が担当している。

なお、例年、都城自衛隊からは大勢参加し、国旗掲揚やラッパ吹奏を行うのが例となっている。

この神社の境内から西の農地は、かつては広大な降下場だった。私は一昨年までは毎年参加して思い出を語り、伝統継承の一助としていたが、それもできなくなった。しかし、このように戦後の人が大勢参加してくれるようになった今、空挺の精神は完全に継承されて心配することはないと思う。

私は、次の歌を御祭神に献納してもらった。

○挺進部隊の御祭神に

からいもの酒杯にうつる君がおも
　あのひげづらに経るとしはなし
ひえつきの節おもしろく唄いたる
　君が手振りぞよみがえりくる

○地元出身の御祭神に

大陸の赤き夕日に思いしか
　尾鈴の嶺に沈みゆく陽を
涯しなく続くうなばら眺めつつ
　日向灘の香ふるさとの風

原町飛行場関係戦没者慰霊祭

平成22年10月10日、福島県南相馬市原町区神ケ崎公園墓地内「原町飛行場慰霊碑」前において、三三四柱の英霊に対する「原町飛行場関係戦没者慰霊祭」が、原町飛行場関係戦没者慰霊顕彰会の主催で行われた。昭和46年秋以来毎年執り行われて、昨年は第40回の節目の年を迎えた。関係者の逝去や高齢化の進む中、以前に比べてかなり少なくなったとはいえ、会員、御遺族、戦友、来賓、関係者等約１１０名が参列して厳粛、盛大に執り行われた。

併せて、大東亜戦争に郷土部隊として参戦し、戦没された四六五柱の英霊を祀る「大東亜戦争原町関係戦没者慰霊祭」も同時に執行されたが、こちらも昭和54年以来続けられて第32回目を迎えた。

原町飛行場慰霊碑

このように長年にわたって厳粛、盛大な慰霊祭を行うことができたのは、慰霊顕彰会事務局長八牧通泰氏を始めとする会員、御遺族、戦友、地元関係者等の並々ならぬご努力と、特攻隊を始めとする飛行場関係戦没者に対する追慕と感謝の誠の心が如何に深いかの表徴であろう（当会会報『特攻』平成22年5月発行第83号掲載、高橋圭子会員筆『鎮魂賦「わが心の花吹雪」他―特攻の語りべとして―』参照）。

山本卓眞会長・追悼の言葉

原町陸軍飛行場は、昭和14年4月に建設が始められ、翌昭和15年1月には熊谷陸軍飛行学校内に、原町分教場開設委員会が発足し、同年3月教育隊大隊編成となり、第二大隊第四中隊を原町に置き、更に昭和15年6月に熊谷陸軍飛行学校所管として、原町飛行場が開設され、正式に訓練が開始された。大東亜戦争開戦に伴い、この飛行場で戦闘特殊訓練を受けた航空士官達は、南方戦線に雄飛し、遠くはラバウルやガダルカナル島にまで派遣され、大東亜共栄圏の確立と祖国日本の繁栄のために、一命を賭して戦った。やがて米軍の本格的な反攻が始まり、その圧倒的な戦力、物量攻勢に押されて、制海・制空の両権を奪われ、戦局日に非となる状況下、昭和20年3月からは、鉾田陸軍飛行学校の分教場として、特攻隊練成基地に指定され、襲撃機の訓練を終了した航空士官や下士官の大多数は特攻隊要員に選ばれて、比島や沖縄戦線などの敵艦船に突入散華された。

この短期間における戦局の変転は、飛行場にとっても驚くべき特異なものであり、原町飛行場で訓練を受けた方々のうち忽ち三三四柱という多数の戦没者を出す結果となった。これら多くの勇士達の尊い御心を偲んで、昭和46年以降毎年慰霊祭を執行されているものである。特に、原町飛行場における訓練は極めて短期間のものではあったが、英霊の人柄、信条、業績等を知るにつれ、深い感銘を覚えると共に、その間における地元の人々との温かい交流や親睦があり、原町を第二の故郷と慕って頂いたことに心から感謝している、と慰霊顕彰会の八牧事務局長は挨拶の中で述べておられる。

特に同慰霊祭には、当会の山本卓眞会長（代表理事）も来賓として、また兄上の山本卓美中尉（戦死後少佐、陸士56期・仙幼41期、勤皇隊〈八紘部隊第八隊・二式双襲〉隊長、昭和19年12月7日レイテ島オルモック湾にて特攻戦死）の遺族として出席されて、追悼の言葉を述べられた。同慰霊祭の開催に関する地元新聞「福島民友」10月13日付けの記事の中にも、来賓として山本会長が「…戦没者に美しい思い出を残してくれた原町に心から感謝したい」と述べられた旨を報じている。

なお、同慰霊祭のプログラムの中に山本卓美中尉が遺書代わりに書かれた自筆の日記（原町出発の昭和19年10月18日から特攻出撃前日の同年12月6日まで）のコピーが掲載されており、特に貴重な資料でもあるので、縮小して後ろに転載させていただいた。

（飯田正能記）

山本卓美日記

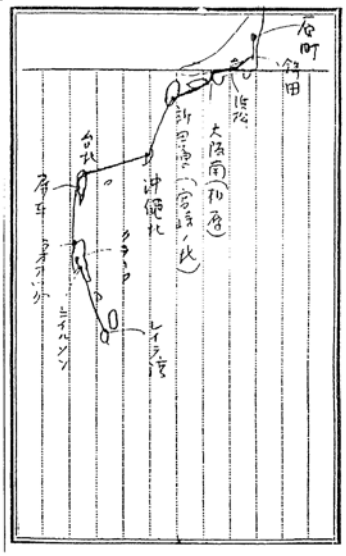
自　昭和十九年　十月十八日
至　昭和十九年十二月　六日

本日記は特攻隊員として散華されました山本卓美中尉の、遺書代わりに書かれた自筆の日記であります。
戦後六十五年の時を越え、まさに消え去らんとする特攻隊員の残像を永遠に伝え残すため、遺族の了承を得て掲載いたしました。

山本卓美中尉
於：原ノ町駅前
昭和19年10月18日

此ノ日誌ハ
戰死後　左記ヘ御送附
相成度
東京都中野区上高田一丁目四七　山本フジエ

母上ヘ
原町出發以後ノ狀況ヲ御知ラセ
レタイト思ヒ暫ク止メテ居タ日誌ヲ
書キマス　筆不精故　怠ルコトガ
アルカモ知レマセンガ　死後何モ知ル
ケ段ガ無イカモ知レヌト思ッテ努メ
テ書ク積リデス
遺書ト思ッテ讀ンデ下サイ
卓美



十月十八日
懐シキ原町ヲ去ル
早朝ノ淋シキ叛セヒ　驛頭ニテ隊長殿
以下ニ最後ノ挨拶
アー宣言ヲ裏切ルマイゾト固ク誓フ
車上ノ人
最後迄手ヲ振ッテ居ラシタ母上ノ
姿ガ眼ニ焼付イテ離レヌ
美シキ思出ー原町ーサラバ
過去ヲ捨テ、新シキ未來ヘ
予定通リ水戸着　直チニ自動車ニテ
鉾田ヘ　職員宿舎(落着ク

取訪部大尉殿ト共ニ皆川ヲ訪レ
若間アパートニ宿ス
取訪部サンニハ内親ノ如キ親シミ
ヲ感ズ
十月十九日
羅針盤修正ニテ一日ヲ暮ス
三浦ハ航空(連絡ニ
夜ハ相変ラズノ取訪部サンノ歌法螺
十月二十日
三浦還ル
我ガ隊ハ八紘部隊第八隊

嗚呼若冠二十歳ノ五十六期ニシテ
十二機ノ率キ中隊長タラントス
八紘部隊ノ中隊長ハ總テ五十六期
ナルヲ見ヨ　吾等ハ名實共ニ
皇國ノ運命ヲ擔ハン決戰兵力
ナリ
「諸子ハ航空ノ虎ノ子ナル」ト言ハ
レシ五十六期　今ヤ續々決戦場ヘ
馳セ參ジつつアリ
而シテ　我モ亦其ノ一員タルノ幸運
ヲ得タルナリ
此回航空被服、雑品等　受領ノ手若

夜　部隊長閣下ニ招カレテ三浦隊
ト共ニ將校六名　御宅ニ向フ
今西正二モ吾等ト仙幼同期ナリキ
御子息ヲ我病死ニテ失ハル閣下ノ
心中如何ハカリカ残念ナラン
逝ク命トアラバ如何ナル悲壮ナル
死ニ方ニモ甘ンズベキガ軍人ナルニ
此ノエナキ死處ヲ選ベラレテ只、有難シ
ト思フノミナリ
十月二十一日
試験飛行ヲ企図スルモ果サズ

カクテ吾等ハ安心シテ往キ得ルナリ
とこしへに　守らざらめや
うるはしき
吾が日の本の大和島根を
十月二十三日
突然出發早クナリテ明日トナル
整備未ダ不充分ナルモ止ムヲ得ズ
残リノ雷針修正試飛
午後九機ニテ編隊飛行
航空被服受領

夜、大洗ホテルニテ送別ノ宴
感激ガ大ゲサ過ギル氣モスレト或ハ
ソレガ當然ナルヤ知レズ
後ニ続ク者　雲ノ如シ
其ノ意気　其ノ熱意　其ノ誠心ヲ
信ズレバコソ……
只、有難ク嬉シク皆デ泣ク
皇國ノ無窮ヲ信シ
大東亜戦必勝ヲ信シ
後ニ続ク者ヲ信ズ

愈、出發ノ日
二機、冷却器「バンク」ニテ困却セルモ
三浦中隊ヨリ貰ッテ間ニ合ハス
飛行部隊全員整列ノ前ニテ挨拶
御隊長閣下　参謀　隊長　機隊總
代理ノ訓示アリテ、出發

訣別ノ詩

北島ノ決戦ハ皇國ノ運命ヲ決ス決戦
ノ日ハ航空戦及補給戦ニ在リ即諸士ガ
一機一艦船ヲ撃沈シ空母及輸送船ヲ撃滅スル
吾ニ依テ此決戦ノ勝敗即大日本ノ運命ハ

部下ヲ犬死サセヌ事、只ソレ丈
出發ノ際、感激ナキニハ非ズト雖モ全体ノ
的冷静ナリキ　見送ル人々ヨリモ
十二機壺々斜田上空ヲ出發
宮城ヲ仰ギテ
美シキ日本　嗚呼　吾ヨクジ日本ニ
生レタルト　勇然タル感激感動　始ラ生
涯一ツナキ好天ニ　鮮然　輝ユル雪白
ノ富士ヲ仰ギテ　行ケイヲ　ナレ
安下ル　母エ　同胞ノ住ム帝都

ヲ後ニ　大阪ヘ
大空に　拳を握りて
安しぬ
眞白に　高き富士を　仰ぎて
悠久の　日本　ゆゑ　護り抜カント　誓フ
来鬼とも　来らば　来れ
とこしへに
我が日のなはゆるぎなければ
無ヲ金機　物承　若　安心
皆谷大社殿ニ　村エテ　完全整備セント
ヲ期ス　一機氣筒　割レ
八尾　すず屋ニ宿泊　夜映画ヲ見ル

十月二十五日　雨

天候　餘リ香バシカラズ　整備
遂ニ雨降リ出シ　一日中降リ續ク
菅谷大尉殿ノ御厚意ニ甘エテ整備
ニ因ツテ存分ニ寛ガシム得タリ
氣筆交換　研磨修理
整備出来ル所ヲ徹底シテ實施セン事ヲ
期ス
藤井少佐　佐藤来ル
マーク記入　徹夜ニテ作業ノ由感謝ノ
外ナシ
新宿住ニ宿シ図ラズモ航空敵ノ宴会ニ
引張リ込マレ　大分飲マサレ　奮ル感激性
ニ富ム　親切ノ良キ人々許リナリ
五古明日高大尉殿ト十一時過迄遊ブ
十月二十四日六日　晴
始天氣ニ乗ジ出發セント朝ヨリ整備
ヲ急ギシモ　遂ニ十四時ニ間ニ合ハズ　ブロペラ
一機エ衛安一機　タンク及電線一機　尾輪一機
等早期ナザル　故障続出　出發中止ノ
止ムナキ至ル
ラジオニテ　神風特攻隊ノ戦果ヲ聞キ
未ダ内地ニ遠図ノシアル現状ヲ思ヒ
感深ク感無キ得ズ

十月二十七日　曇後雨

九時出發ヲ期シ整備ヲ急ギ
徹夜完了セルモ予期ナザル故障
續出　漸ク十二時出發準備
完了
時既ニ遅リ九州、四國共雨トナリ
逐次悪化　訓練ヲ兼ネ小編入
覚悟ニテ出發セントセルモ視界不良
ノ為遂ニ涙ヲ呑ンデ　中止
嗚呼　止ンヌル哉
慎重　慎重　大事決行迄ハ。
見送リノ人々ニ相済マザルモ　中止ヲ
宣言ス　中々上ノ要ル事ナリ
空襲警報　今数ヶ月ニ敵ヲ見ズ
樹木　行方不明　心痛ナリ
書筆　夜共　揮毫改メニ會フ　代筆
ヲ叩レテ書キ撲ル
主ヲ続ケニ教首　ヒネリ出ス　風流気
ナキ武骨男ノ　筆下手ハ困リモノ
。八紘に御稜威の光かゝやかー
われ南溟よ
雲と散らなむ
。みたみわれ　武夫たりし甲斐ぞあれ
今南溟　あよ華と散り導て
。やるきなき大和島根とこし（に
我が英魂は天翔らなむ
。身はたと（南の果ま散らむとも
守り抜かばや　大和島根は
。代ぶなき　幸かな　我等選まれて
今決戦の華たらんとは
。吾わが後に續かむ者は数多あれば
とはにやるがいすめらみくには
島津上共ニ夜遅ク迄語ル
十月二十八日　曇
今日コソハト意気込ミテ飛行場ニ
赴ク　天候　香シカラザルモ　孔子ヲ飛ブ
判断シ出発　歯ヲ噛ミ送ラレテ新田原ニ
ハ上共ニ着ク　背風ニテ大分苦労マルモ
車輪　輪帽　曲一機　作動油　モ一機ニテ済
ミシハ幸ヒナリ
飛行場ノ特別給養ニテ祝宴
若林　山岡等ニ會フ
十月二十九日　晴
新田原ノ天氣ハ良好ナラザルモ
氣象隊　密ニ機ノ報告ヨリ　孔子
ヲ飛ブト判断シテ出發ス
種子ヶ島迄　視界不良　下層
雲多ク　相当苦労ス
奄美大島以后ハ快晴
沖縄代飛行場ニテ補給後
直路台北ニ向フ
夕刻台北着　著陸ハ視界不良
ノ為大分苦労セリ
一機尾輪パンク　外
無事ニ著陸　先ヅ安心ス　北投温
泉ノ佳山（酒ト肴ト無頼ト頃ト
別ラザルナキ歓待ヲ受ケ既ニ此ノ
世ノ人ナラズ
飯島美代子サンヨリ　細菜ノ
鉢巻ヲ贈ラル　感激ニ堪ヘズ
十一月三十日　曇
ユックリ朝風呂ヲ路ビテ　御馳走ヲ
朝食　呉江國民学校ヨリ聯ラレタル仰
ニ古教ウ　寫真撮影後
九時出發　FD司令部ニ到ル　参謀ノ
好意ニテ　比島方面情報　船改要ニ関スル
資料等ノ説明ヲ受ケ　又同期生
大藤、石垣、丁野、小國等ト會フ
前ノ庭ニテ師団長閣下以下ト會食
北川閣下モ来ラレ　仲々盛會ナリ
御帰ノ煙草　御使来等ヲ戴キ感激ス
新聞記者ノ懇改要ニ會フ
飛行場到リ試運転　実施　里帰ナキヲ
惜メ　二瓶ノ叔父サン家ニ寄リタル後
宿舎ニ帰ル
佳山ノ待遇　筆舌ニ盡シ難シ　豚ヤ舌ヤ
鳥キヨノ餌　大福　更ニ麦酒ト肴ノ御
馳改ヤリテ　後ニ控フルスキ焼キ　舞台ニテハ
オ嬢サンカ舞踊　美代ナサン姉妹モ
踊ラセテ　全ク思ヒ残スノナシ
此ノスキ焼キノ材料ハ台北市長ノ贈リ物ナト
全ク感謝ニ堪ヘス
宴半バニシテ北川閣下ニ部屋　更ニ

二瓶東ト共ニ第三次食（五十之期ノ
猫級ヲ集メテ、驚キ坂ク西瓜、鳳梨等ヲ
頂きては
海女も甚著る時雨かな
是ハ川間下リ賜ラレタル言葉肝銘ス
驚き疲レテ帰レバ又モヤ、寿司、嗚呼
我が腹ノ一ツナルヲ如何ニセン
美代子サンノ心遣ヒ迄ニ誠心銘ル親切ヲ
受ケ感謝、又感謝ノミ
注　美代子サントハ此ノ宿舎ノ小娘サンノ姪ナリ名前
十二月一日　曇
早ヤ今年モ終リノ月ニ入リヌ

延長等、伍長ニ任官（即日任官）
名残リ惜キガル思ヒ出ノ佳山ヲ下リテ、
飛行場（山ノ下迄一同送リ来ル
天候不良ナルモ、師団長閣下以下ノ
見送リニ、出発スルニ決ス
同回ノ山々ハ黒雲垂レ込メテ相当不安
アリ。
申告ヲ終リ、目的地モマルコット決
定、イザ出発ヤントセシニ、6号機尾
輪ヨリ込ミ、大燃テ
予定ヨリ約二時間遅レ、盛大ナル見送リ
ノ中ヲ離陸

美レキ思出
台北ヨ、サラバ、
孤園一新所、雲高風ク、超低空ニテ
離ク飛行、台中間ヨリ雲上ニ出テ
嘉義ニテ再ビ雲下ニ降リ、視界不良
ノ中ヲ離クニシテ斗東（スベリ込ミ
一機スピンナー破落外異状ナシ安ヘ
見送リノ盛大モ考ヘノナリ、天候不良モ
成ハ用ナ、悪キ飛行機モ有無ヲ言ハセ
ズ飛ハサレル結果トナリ、飛行部隊ト
シテハ、全ク有難迷惑　台北モ半バハ
追出サレタル格幹ナリ
斗東ニテ美四特攻隊ノ遺藤以下二名フ

夜ハ婦人会ノ方々ノ接待ニ預リ
消、寝ム
十二月二日　曇
地区司令官ヨリ追ホカレントシタルモ
二機、ベラ文様、一機尾輪引込ノ修理ノ
為明日ニスル旨ク通振ル
真ニ特攻隊ノ為ヲ思フ人ナラバ、ト考ヘ
サヤウ、度重第一ガ完璧ノ目的ニ
合スルヲ待ズレバコソ、
十二機揃フ此處迄来レルニ今更一切ヲ
残シテ迄ヤセムルヲ思ヒンヤ、
一日中整備第四八紘隊ヨリ出発ヲ見送

ル
鳳山此東海ノ同期生ニ会フ
夜、舞踊マアリテ仲々ノ盛会ナリ
十二月三日　晴
午前一杯整備　早目ニ晩食シ十二時
半頃離陸　婦人会女学校等見送リ
盛大ナリ
空中集合航進　殺到セルニ一機見エズ
引返シ見ルニ、再ビ離陸ノ途中ナリ安ハ
ス　愈晴レノ此島入リナリ。
高ク二千三百　雲上一時間半ニテバシーヲ
越エ　ラオアング著　砂塵濛々トシテ

夜遅ク迄　命敢ニ手間ドリ十二時過ギ
アンレス宿舎ニ帰ル、乱雑ナル室内
思ヒ一応宿ラレス
敵機来襲、一機宿舎ニ直リ来ル
然ルモ、ヤリ時々爆撃ヲ加ヘ来リ
十二月四日　晴
午前中　連絡トレズ　アンレス宿舎ニテ
ゴロ〳〵レアリ、食事モアリ上等ナラズ
何トナク気分ダルシ　高山ニ会フモ過リ
午後　命令（ノ自動車来リテ飛行場ニ
辿ク到ル　ニルソン飛行場ニ到ルベット、
指示ヲ受ケ、直チニ出発ヤントスルモ

命敢徹底ナル為集合ノ時間掛リ、更ニ一休
メリ込ミタル為離陸遅レ、八時頃ニ離陸
セントスルヤ、入江様尾輪引込ム止ムヲ得ズ
追及ヲ命ジ急遽離陸ス。
ニルソン著ハ既ニ薄暮ナリ、著陸時烟
霧アリテ視界甚ダシク悪ク更ニ飛行場ハ中央
高ク傾斜甚ダシキニ無風ニテ皆滑走
著シク延ビ遂ニ場澤様此井様加藤様
各小林中様大熊ノ此處迄来テ飛行
様ノ憲ストハ寄ニ我会更ニ注意ヲ要ス（
遅ケハ方ナリシニ等ト悔ムモ及バズ
金島ヲ帰シ四航軍ニ連絡

美農部参謀殿ニ会ヒ、四航軍作命ニテ
四師団ニ編入サレタルヲ知ル
四師団ニ行ク、近藤少佐ニ状況ヲ問フ
レイテ方面ノ戦況ハ一刻ノ猶豫ヲモ許サス
即刻特別攻撃ヲ指向スベキ状況ナリ
之ガ為急速ニ出動準備ヲ完了セザル
ベカラズ
最初、我首ヲ改修シテ爆撃ヲ装シ、威力
ヲ増化セント希望シ居タルモ此ノ戦況ニテハ
立ヲナス暇モナカラン
特攻隊ハ隊行社ニ寄ウハ城空寮ニ泊ス。
第十三中隊ノ協力ヲ期ス。

十二月五日　晴

習慣ハ飛行場（空中勤務者ハ四時）、マニラノ街ヲ久方振リナリ。以テト大レテ喜ヒタル所ナリ自動車ノ往来繁キニ一驚ス

帝国長参謀長ノ申告

松井等ノ所ハ敵ノ所トテ、カロカソ飛行場ニ在リ陸ヲレン飛行機ヲ捕獲シ三機

本日出動スル予定ナリド

富嶽ハ慶応出動（ターゲット）シアルモ空母ヨリ逃レタ帰還シアリ　召集モ生キアル内、

第五ハ佐々木（林ミテ昨日合ロ出動ス、

軍司令官ハ此ノ軍司令官閣下ニ

帝国ノ申告　古山参謀閣下ノ御見サントナリニテ

副官振リモ仲々板ニツキナリ

中賜ノ酒　煙草ヲ戴キ乾杯

勤皇隊ト命名セラル　勤皇隊

維新ノ志ヲ思ハシムル此ノ名

佳イ哉　閣下モ「快心ノ名ナリルト

言ハレタリ　誠ニハ此ノ名ニ恥ジザラン

後勤皇ト書シタル錦旗ヲ戴ク

廣岡ニテ休憩　心地近ク語リ寄ラ

トル　古山ノ親切ニ対シ有難シ

「尾形モ居リ　一緒ニ書食ヲ助ケ合ヒナル

勝又、南出、軍司令官閣下ノ御意志

ニテ夫々進級、有難キ事哉

通信二名出張ノ名目ナリシモ、勤皇隊

ノ一員ニ加（改事ニ参加セシムルヲトナル

四飛隊ニ行キ帝国長官閣下ト乾杯

桁ハラ入江機迄及ビ、ニルソンニ著陸ヲ

知リ直ニ呼ブ　入江機ニテ申告セシメ

軍司令官閣下官舎ニ到ル

久シ振リニテ同室ニ入リ某ナリ食ヒ

ビアノヲ叩キ一同大イニ寛ロク

四航軍ノ方々ト夕食ヲ命食ス

滅多ニ食ヘザル所ノ馳走ニ舌ツヅミ

食、最合ノ夜ナリ。

出撃来夜、何ノ感動ナシ、

思ヒ出ルハ母上ノ顔ノ鮮

白比ノ美代子サンノ顔

只ヒタカン哉　任ノマニ

後マナハ海女モ意著ル時雨カナ

機者ニ悪レタル時　一〇〇時帰参謀

長殿ノ命ニテ送ニ待管ヲハジメ

出ムナキ到ル　残念

二月五日　砂ノ待管帰庭ナキ

大分メタルモ、益ニ片方ヲ待管ヲ

ツケルコトヽナル。

砂原

四航軍ノ所ニ到ル、果然

任務ヲ拝領ス

明日晴　金力ヲ以テ　レイテ動敵編

船ヲ改東スベシ

飛行場ニ出キ帝国軍常

食ヲ晴ノ出陣ノ時ハ来リ又

イサ　軍ガ戦　心ハ躍ル

三七機　二〇機敵アン爆撃準備準

二四機ト13機ノ協力ヲ以テ立ヲ

ギ　一方陽撃ハ加藤ニ徹スベシ

北ヒクラークニ飛行隊受領ニ行カシム

機首ニ百四一発ヲ増加装備ス　世

一代一発ヲ出シタリ。

急到　四航軍ニテ命令受領

三十日　此時ヨリ以下八　ニルソンニ到リ

上陸ヲ以下八　ニルソンニテ直機　十五

此時ノ司直一機沈果敵況

打合ヤ実施ス

別ニ渡国ハ支隊　今頃復帰ノ

山七　国朝　来リ　安ニ犯ケシコトヲ

恐ラク

空地　此時　レイテ島ニ　出撃ス

幸運ヨル

参謀長殿ト食事

効果ヲクトモ爆撃ノ宿実ヲネラフ

者等ハ空挺　新近陸ト異リ此ノ目

ニテ効果ヲ確認シ得ザルヲ以テ

安全　安心ン　別ル丈ノ強行安進

備ヲ整ヘ　思カザルベカラズ

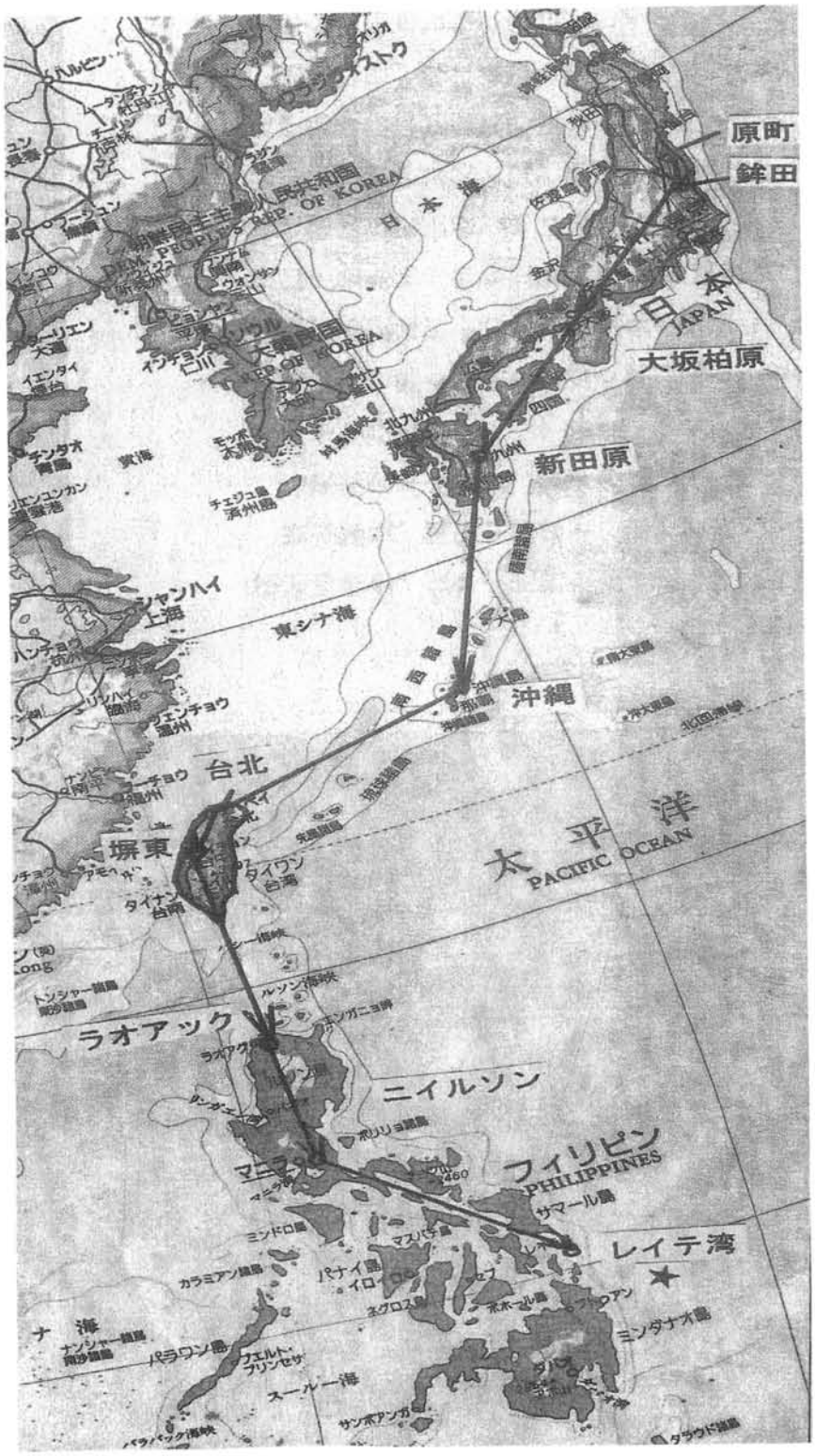
夜　遺品整理

明朝七時　離陸

イザ　レイテ湾ヘ

敵殺　送船ヘ

陸軍特別特攻隊「勤皇隊」原町出発からレイテ湾突入までの経路



この人達にまつわる当時の状況

田中　賢一

「筆者注・高野山には『空』と刻んだ墓がある。昔の空挺戦死者を祀った碑であるが、これを管理している空挺同志会の手で、その年に物故した会員で遺族の申し出により分骨を納めることになっている。平成22年9月12日の碑前祭で十四柱の分骨が納められたが、その中で三柱は昔の空挺隊員で、三人とも私の旧知の人なので、当時の戦況等を紹介する意味で、ここに掲載させてもらった。」

○熊倉順策君

義烈空挺隊で沖縄に向かい、途中不時着した4機の内の1機に乗っていた熊倉君は、落下傘隊員ではない。義烈空挺隊は初めサイパンを目標として作戦を準備した。その時潜入諜者として中野学校出の将校8名と下士官2名が配属された。その中の一人である。

潜入諜者とは、敵地に隠れていて情報を収集する諜報員を言う。大本営はその人達を空挺隊と一緒にサイパンに送り込もうとしたのである。

熊倉君からは、私は義烈空挺隊について多くのことを聞いた。サイパン攻撃が取り止めになってからは、この人達は奥山隊の純戦闘員となって、熊倉君以外は全員戦死している。熊倉君から聞いたことで最も感銘を受けたのはサイパン行きを志願したことである。昭和19年11月末、中野学校二俣分校で丙種学生（幹部候補生出身見習士官）の卒業式が行われた。この学校で諜報活動やゲリラ戦に必要なことを教えたが、技術的なこともさることながら、最も重視したのは精神の陶冶だった。

一人になっても、誰も見ていなくても最後まで戦い、名も残さずに死んでゆける国士を養成するのが、この学校の狙いだった。一緒に卒業した者の一人がルパング島で30年も頑張り通した小野田少尉であることを思えば、ここの教育がどんなものか想像できる。

さて、卒業の数日前に、サイパン行きを志願する者はないか、と言われた時に、6人が名乗り出た。その中の一人が熊倉君だった（義烈には中野学校の本校から4人が加わった）。赴任先ごとに分かれて申告した時、参謀本部付と発令された六人に、分校長の熊川中佐は「名もなく死んでくれ」と一人一人の手を握り感慨を込めて言った。熊倉君については紹介したいことがまだ沢山あるが、次に移る。

○美濃田三郎君

この人は挺進第三聯隊第三中隊の准尉だった。この中隊はレイテ空挺作戦の2回目に降下することになっていたが、ブラウエン降下作戦が打ち切りとなり、完全な状態でルソン島アンフェレスに残っていた。昭和19年12月13日に、ミンダナオ島カガヤンの対空監視哨が、洋上を西進する大船団を報告した。方面軍ではネグロス島に上陸するものと判断した。ネグロス島バゴロド地区には数個の飛行場があり、レイテ作戦最盛期には我が航空作戦の中枢をなしていた。ここに敵の航空基地を設定されては一大事と思ったので、第四航空軍は挺進団にバゴロドに増援部隊派遣を命じた。ネグロス島には装備の劣る警備旅団が配置されていた。挺進団では本村大尉を長とし重火器を主としたバゴロド派遣隊を編成し、12月17日、輸送機5機と重爆1機でバゴロドまで空輸したが、輸送機2機が敵戦闘機に撃墜されてしまった。翌日残り3機で更に人員を送り込み、これで増援は終わりとなった。

上陸すると思った敵船団はネグロス島を素通りしてルソン島に近いミンドロ島に上陸した。本村大尉以下60名が先ず行ったことは、警備部隊の兵に対する対戦車戦の教育であった。陣地構築も併せ行っていたが、3月28日、いよいよ敵が物凄い火力を背景に上陸して来た。本村隊は海岸線から後退して陣地を構えていたので、敵を引き付け一時は大損害を与えたが、その後は、戦車を先頭に優勢な火力を発揮して来攻した敵に、陣地は突破され、山地に後退した。本村大尉は戦死し、今度はゲリラ相手の戦闘となったが、糧食の欠乏甚だしく、木の根草の根を食って戦い、終戦に至った。生き残った者は30名だった。以上、戦闘状況は美濃田さんの話を纏めたものである。

○大屋稔君

この人がいつ挺進第一聯隊付になったか私は知らない。第1回に南方に出た頃には、まだ挺進部隊にいなかったと思う。昭和20年3月1日、第二中隊長の園田直大尉が本部付となり、大屋大尉が中隊長となった。

B―29の基地サイパンを義烈空挺隊が狙ったが、陸軍航空の飛行機は一挙にサイパンまでは届かないので取りやめとなったが、海軍の一式陸攻は可能なので、20年6月、海軍総隊はサイパン特攻を計画し、搭乗部隊を陸軍に求めた。そこで、挺進第一聯隊は、園田大尉を長とする2個中隊を出すことにした、その時の1個中隊が大屋隊である。この破天荒の作戦は、千歳で準備中に終戦となった。

平成22年度 フィリピン慰霊巡拝旅行に参加して

評議員　飯田　正能

昨平成22年10月24日（土）から27日（火）まで3泊4日の日程で、毎年、フィリピン・マバラカット市主催により、クラークフィールド・リリーヒルで催行されている日比合同の特攻隊戦没者等慰霊祭（現地では「世界平和祈念式典」と呼称しており、今回は第13回目である。）への参加並びに比島内戦没者慰霊碑等巡拝旅行に、羽渕事務局長と共に協会代表として参加させていただいた。図らずも、旧協会（財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会）としては、最後の巡拝旅行となった。今年からは、新公益法人（公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会）として新たに企画されることであろう。

二人とも初参加ではあったが、これまでにも多くの会員が参加し、その都度、感想文や報告記を寄せられているので、現地の関係者や日本からの参加者とも、初顔合わせながら旧知の間柄のような感じで接することができ、何らの支障なく、予定どおり無事旅行を終えることができた。今回は日程等の関係で、残念ながらレイテ、セブ等の慰霊碑の巡拝は割愛せざるを得なかったが、今回初めてルソン島南部ラグナ州カリラヤにある日本政府建立の比島全戦没者の慰霊碑に参拝することができた。また、マバラカット東・西飛行場跡地の特攻隊慰霊碑建立等の功労者ダニエル・H・ディソン氏を御自宅に訪問し、及びマニラの日本大使館に桂大使を表敬訪問することもでき、非常に充実した内容の旅行であった。

〈一日目〉我々は、10月24日（土）9時30分、成田発のフィリピン航空（PR）431便に搭乗するため、7時30分に空港第2ターミナルに集合した。早朝にも関わらず、既に沢山のフィリピン行き旅行客が並んで待っていた。日本人や中国人等の観光客も相当数混じっていたが、大部分はフィリピン人の帰省客のようであった。

後に知ったことであるが、翌25日の日曜日は、フィリピン全土で行われた地方自治体議会議員等の選挙（統一地方自治体選挙）投票日であり、その翌日の開票日も休日で、公共機関や学校なども休みとのことで、マニラ市内は派手に飾ったジープニー（ジープを改造したという乗合自動車）やトライシクル（サイドカーを改造した三輪タクシー）の選挙カーの車列など、まるでお祭り騒ぎの様相を呈していた。

マニラ行き航空便の搭乗手続にはかなりの時間を要した（荷物検査、ボディチェックも厳重で、裸足になって靴の中まで調べられた）が、無事定刻に離陸することができた。離陸して間もなく、何故か窓の覆いを全部閉めさせられた。機内は薄暗く、書物を見ることもできない。つれづれなるまま、これから向かう初めてのフィリピンのことに思いを馳せたが、やはり先の大東亜戦争末期、比島各地で繰り広げられた米・比軍との壮絶なる死闘を思い起こさずにはいられなかった。レイテ決戦に投入された陸海軍の航空特攻を始めとする、各種部隊の熾烈を極めた戦闘、ルソン島における各兵団の壮絶なる持久戦、中でも思い起こされるのは、筆者の出身校である大阪陸軍幼年学校で我等46期（陸士61期）生の生徒監であった井上恵少佐（東幼34期・陸士49期、陸士57期の予科区隊長）の鉄兵団（第10師団、姫路）集成第二大隊長として、バレテ峠攻防戦の第一線となったプンカン高地を死守しての、壮絶なる戦死であった。そのことはいずれまた文章にする機会もあろうから、紙数の関係で、ここでは省略する。

あれこれ思いを巡らせているうち、約4時間のフライト時間は忽ち過ぎて、13時20分頃、マニラのニノイ・アキノ国際空港に無事着陸することができた。

早速名ガイドのマイク鈴木こと鈴木道夫さんの出迎えを受け、翌日早朝に行われるマバラカットでの慰霊祭に備えて、専用車でマニラの北約70キロ、リリーヒルに近い、クラーク市のホテルに向かう。約2時間40分の車中で、フィリピンの歴史、民族性、植民地支配や独立運動、大東亜戦争や日本占領時代のこと、戦後の独立や経済復興、日本の賠償工事や復興支援のことなど大変参考になる内容のものであった。そして、御自身がJICA（国際協力事業団）の技術者として現地に派遣されて指導に当たられ、その後も現地に永住されて、日比交流や戦跡調査・案内等に尽力しておられることを伺った。現在はマニラ在留邦人の会「マニラ会」の事務局長を務めておられる。我々は、最適任のガイドさんの案内で旅行するという幸運に恵まれた。また、ドライバーは純朴なフィリピン人のジュン・マガラーネさんである。

途中遠望するマニラの市内は近代的なビルが建ち並び、経済的な発展の様子が伺え、戦争による惨禍の影は全く見えなかったが、筆者の頭の中では、今も大戦末期の悲惨なマニラ攻防戦を

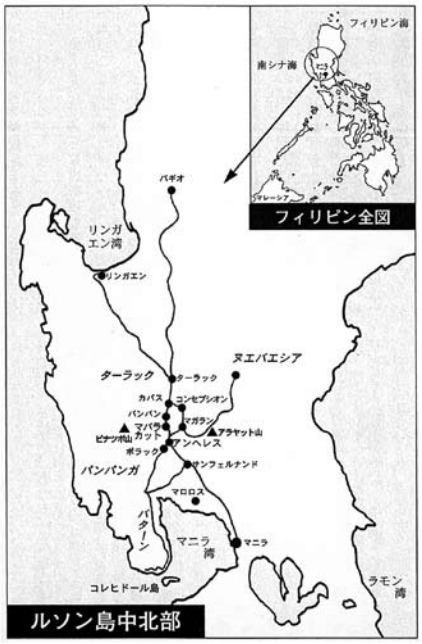
思い出さずにはいられなかった。そのことが一時期、フィリピン人の反日感情を募らせたことを我々は忘れてはならない。

マニラは死守するか、放棄して山中で戦うかの二つの意見が捷一号作戦の準備段階から対立していた。山下奉文大将の前の第14方面軍司令官であった黒田中将は「マニラを死守することは無理である。マニラは木造家屋がほとんどで、スターリングラードやレニングラードのようにコンクリートでできていない。また、地下水が高く、地下陣地は造れない。更に住民のいるところで戦闘をすべきではない、マニラは放棄すべきである」という意見であった。スターリングラードやレニングラードという例が出たのは、大本営陸軍部参謀兼聯合艦隊参謀であった島村矩康大佐がドイツ侵攻に対するソ連の防御作戦のように市街を確保すべきと言ったのに対する反論であった。一方第14方面軍司令部作戦課長の小林修治郎大佐は「ルソン島では敵が上陸してきたら兵力を機動、結集して攻勢をとり、決戦を挑む。このためにもマニラは確保、死守すべきである」という意見であった。海軍は「マニラは放棄してはならない、マニラは港湾都市であり、港湾施設や貯油所がある。海軍としてはこれを簡単に米軍に渡してはならない」と考えた。しかし、南西方面艦隊司令部の中では、マニラ死守と放棄の間で揺れ動き明確な方針は出されなかったが、リンガエンに敵が上陸すると、同司令部では山に入るという方針になり、大河内司令長官以下司令部の主力がマニラを去った。結局、第14軍の一般方針としては、マニラを戦場としないこととし、陸軍の大部分はできるだけ多くの軍需品を運んで、山中の拠点に後退し、海軍（岩淵少将の第31根拠地隊）と陸軍の一部がマニラで戦うことになった。そして、それら軍需品等の撤去作業の最中、2月3日夕刻、マニラは奇襲された。米軍のマニラ侵攻とともに、ゲリラが横行し、日本軍の通信線は寸断され、電灯は消え、住民総ゲリラ化の様相を呈した。まだ市中に分散している軍需品の搬出に当たっていた日本軍人・軍属はゲリラの襲撃を受けて惨殺される者も少なくなかった。軍需品は一斉に略奪を受け、自ら破壊、焼却を始めた。住民がゲリラ化すれば、住民の惨殺は自然の成り行きであった。岩淵少将はマニラ市の港湾施設をできる限り長く米軍の手に落ちないようにしようと決意し、徹底抗戦を行うべく各地にあった部隊を結集してマニラに最後の防御陣地を築き、コレヒドール島も死守を命じた。

かくして市民約70万を抱えるこの首都で、4週間にわたり日本軍と米軍はゲリラも交えて激烈な市街戦を展開した。マニラ海軍防衛部隊と残留した陸軍部隊は頑強に抵抗したが、米軍は圧倒的な火力で建物を一つ一つ爆破し、焼き払っていった。この米軍の攻撃によりマニラの市街と市民が犠牲となった。約4週間の攻防の末、3月3日、マニラは米軍の手に落ちた。レイテの攻防に次いで、ルソンの攻防においても、敵味方ともに多大の犠牲が払われた。リンガエン湾に上陸してからマニラ占領までに米軍が出した死傷者は、約2万5千名、マニラだけでも米軍の戦死者は1千名以上、負傷者は5千500名に達した。3月3日までのルソン島における我が方の死傷者は、12万4千名と推計されており、マニラだけでも1万6千名が戦死した。市街戦の結果、マニラは文字通り焼野が原となり、死の街と化した。10万人以上のフィリピン人が瓦礫の中に犠牲となって横たわった。このことが多数の戦犯と日比賠償（昭和31年5月賠償協定調印）の最大の根因になった、と言われている。

比島における捷号決戦では、我が陸軍だけでも約50万人が参戦し、そのうち約37万人が戦没した。そして、終戦時に生き残っていた約9万7千名の将兵のうち、復員前に約8千800名が更に死没するという惨憺たる状態となった。

結局、大東亜戦争を通じて比島における我が軍の全戦没者数は、約51万8千名と言われており、後に述べるように、マニラの東南約100キロメートル（自動車で片道約3時間40分



を要した)、比島最大の湖ラグナ湖を抱えるラグナ州の南部の山麓に、昭和48年3月、日本政府による国立戦没者慰霊碑「比島戦没者の碑」が建立され、その墓苑の周辺は日本庭園として整備されている。しかし、かくも多くの戦没者を出したことは、誠に痛恨の極みである。比島は正に悲島（かなしみの島）なのである。

夕刻ホテルに到着。早速、マニラからやって来られた日本大使館付き防衛駐在官の松崎勇樹1等空佐にお会いすることができ、式典のこと、桂大使への表敬訪問のことなど打ち合わせることができた。

〈二日目〉マバラカット市に隣接するクラーク地区は特別区となっているがかつては、広大なクラークフィールド空軍基地のあったところである。大東亜戦争緒戦において、真珠湾攻撃の僅か10時間後には、日本軍の航空隊による爆撃で、米軍航空隊は壊滅し、我が軍は早くも1日で比島の制空権を獲得した。3年後の昭和19（1944）年10月には米軍の大部隊がレイテ島攻撃を開始し、クラーク基地の飛行場を飛び立った我が陸海軍特攻隊がレイテの米軍艦船攻撃を敢行したが、翌20年1月9日、リンガエンに上陸した米軍大部隊の、圧倒的に有力な火力とM4重戦車軍団の威力に圧倒されて、我が防衛陣地は突破された。我が第一陣を席捲した米軍主力は、マニラへの途上、クラーク飛行場付近において、第二陣防衛部隊である建武集団3万の我が陸海軍と激突した。しかし、前年12月末着任したばかりの第一挺進集団長塚田理喜智中将率いるその建武集団は実に50種類に余る単位の雑多な混合部隊からなる陸軍1万5千と、海軍もまた軍艦を失った将兵始め飛行機を失った航空隊、航空廠、設営隊等の雑軍1万5千からなる混合集団で、火力、戦力の劣勢は覆うべくもなく、1月上旬から布陣して陣地構築を始め、第一線は右翼を飛行場関係部隊、中央を挺進部隊の残存部隊、左翼を戦車関係部隊を以て固め、西方丘陵地帯に海軍が洞窟陣地を築いて守っていた。しかし、米軍の攻勢の前に、1月25日の第一回の戦闘から損害続出し、30日には第一線防御陣地を捨てて複郭陣地へと後退した。その後も強烈な米軍の攻撃の前に苦戦を強いられ、山岳地帯へと後退しつつ、抗戦を続けたが、糧食は尽き、病人は続出し、軍はほとんど戦力を失い、遂に塚田司令官は4月5日、集団を解散し、各自分散、自活しながらゲリラ戦を続けることに決した。そして、栄養失調の1万数千名がサンパレス山系の奥に後退し、山下軍司令部との連絡を絶ったが、ほとんどの将兵は飢えに斃れ、生き残った者は、僅かに1千108名に過ぎなかった。建武集団3万名のうち、約2万9千名、実に97％の将兵が、このクラーク周辺の山野に命を落としたのである。

レイテ決戦に勝利した米軍によって比島の制空権と制海権は奪われたが、クラーク飛行場地区占領によってそれは確固たるものとなり、対日戦勝利へと繋がっていった。その後フィリピンが独立した後も、駐留米軍の空軍基地としてクラークフィールドは重要な役目を果たしたが、平成3年（1991年）、ピナツボ火山の大噴火によって埋没し、大規模空軍基地としての機能を喪失、米軍は撤退した。そして、今やマバラカット市とクラーク特別地区は、世界平和宣言都市として、紛争や戦争のない、平和と協調の世界を実現するために、世界に対して積極的に発言する、世界平和実現の発信基地たらんとしている。更にまた、ディソンさんの著書にもあるように、フィリピン人の民族的独立心と愛国精神のシンボルとして、「カミカゼ特攻隊」の精神を顕彰しているのである。正に、このクラークフィールドは、歴史の運命の地というべきか、誠に因縁深き所である。中でもここリリーヒルは、戦没者の霊魂逍遙の地でもある。特攻隊勇士を始め戦没者の霊魂は今なおこの地に留まり、照覧しておられるように思えてならないのである。

10月25日は、66年前の昭和19年のこの日に、関行男海軍大尉の率いる神風特別攻撃隊敷島隊が、初の特攻隊として出撃し、米機動艦隊に突入、大打撃を与えた、カミカゼ特攻隊記念の日として、時刻も東飛行場から出撃した7時25分に合わせて、式典が行われるとあって、早朝5時起床、5時30分朝食、6時ホテル出発、約30分でリリーヒルの式典会場に到着した。途中ピナツボ火山大噴火の際の土石流で埋まったという川を渡り、丘を越えたが、リリーヒルの小高い丘の周辺は緑の林に囲まれており、静かな鎮魂の場に相応しい聖地の感がした。その林の緑を背にして、聖壇が築かれ、その上に高さ数メートルの白衣の平和観音像が立ち、ふくよかな温顔を以て衆生を見守って下さっている。 式典会場到着と同時に、我々は女の先生に引率された地元小学校の男女児童四、五十名の出迎えを受け、お手製の白い花のレイを懸けてもらった。二人で相談して日本から持って行った、子供達の好みそうなキャラクター付きボールペン他の学用品40組

程のプレゼントは忽ち底をつき、若干不足した。後は、これも用意したキャンデーを配るだけとなり、学用品を貰い損ねた子供達には気の毒なことをした。子供達に直接渡すのがいいのかどうか考えさせられた。

式場には歓迎の幕が張られ、日比両国の国旗が掲げられていた。我々は直ぐにヒルベロ・マバラカット市観光局長に紹介され、その場で持参した協会からの供花料（10万円・約5万ペソ）を贈呈し、丁重な謝辞を頂き、モラレス・マバラカット市長にも紹介され、来賓として市長と並ぶ最前列の席を与えられた。

式典には、日本から我々のほか、鹿児島市最福寺の明楽宜興（めいらくぎこう）副住職とその信徒の方達、医療法人徳洲会の方々二十数名を始め、但馬人グループの方など三十数名が参列し、マバラカット市関係者十数名、比空軍軍楽隊ほか関係者二十数名、地元の子供達（先住民・アエタ族等）数十名、在比邦人二十数名ほか、全部で百数十名が参列し、盛大に執り行われた。

式典は、式次第どおり、ヒルベロ観光局長の司会の下に整斉と行われた。7時5分、空軍軍楽隊により比日両国歌が演奏され、7時10分、筆者も含めて12名の来賓の手により、2基の大きな花飾りが運ばれて観音像の基壇に供えられた。7時15分各来賓の紹介があり、いよいよ7時25分、神風特攻隊敷島隊の発進時刻に合わせて、「海行かば」が演奏された。色々の想いが交錯し、瞼が熱くなった。

その後、モラレス・マバラカット市長の挨拶があったが、それは、遠来の友を迎えるような、親愛の情の籠もった、そして世界平和宣言都市の市長らしい平和への強い意志の表れであると感じられたので、司会のヒルベロ観光局長にお願いして演説の草稿を頂くことができた。そこで帰国後、英語に堪能な菅原道熙副会長に頼んで訳していただき、その訳文を添えて後ろに掲載させていただいた。

今年は、この平和観音像の建立と世界平和祈念式典の開催に功労のあった鹿児島市最福寺の池口恵観（えかん）住職も、医療法人徳洲会の創設者で元国会議員の徳田虎雄氏も体調を崩されて参加されず、明楽副住職と平島浩二宇和島徳洲会事務局長が、それぞれの心の籠もったメッセージを代読された。また、今年は初めて日本から国会議員の参列があり、自民党の影の内閣経済産業大臣西村康稔（やすとし）衆議院議員が、来賓代表として、流暢な英語で、感謝と平和への決意を込めたスピーチをされた。次いで徳洲会からの医療品等の贈呈式、当協会を含む寄附者等の発表があった後、明楽副住職の読経の中、参列者一同順次平和観音像の前で焼香をして、約2時間の式典は滞りなく終了した。

終わって、アトラクションとして、先住民族アエタ族の子供達による民族ダンスが披露され、子供達と一緒に祈念撮影をするなどした後、10時15分、グループ毎に式場を後にして、マバラカット西飛行場跡（10月20日の敷島隊初発進基地記念・慰霊碑）を経由、東飛行場跡（10月25日、敷島隊発進基地

式典案内幕

平和観音像

西村康稔衆議院議員と

モラレス市長挨拶

明楽宜興副住職の読経

来賓席前列

子供達と記念撮影

歓迎の子供達と筆者

西飛行場跡慰霊碑

同上全景・右に旧壕跡

大西瀧治郎
平和記念碑

東飛行場跡
特攻勇士の像前
ヒルベロ局長と

大西司令官壕前で松崎１佐と

跡の第二次慰霊碑・特攻勇士の像・カミカゼ神社）を巡り、それぞれ懇ろに慰霊を行った。西飛行場跡慰霊碑の直ぐ近くの丘には旧日本軍の立て籠もった壕跡もあって、鬼気迫る感さえ覚えた。ピナツボ山の大噴火で埋もれた第一次碑の上に建てられたという第二次慰霊碑のある東飛行場跡には、雄々しい特攻勇士の像が大空を見つめて屹立し、その前に大きな生花が備えられ、跡地を囲む塀には由来記の銘板が掲げられていた。式典といい、慰霊碑といい、立派に管理・運営され、毎年慰霊祭を行って頂ける市当局の御好意には唯々感謝あるのみである。

次いで、第一航空艦隊司令部（二〇一空本部）のあった住宅（民有・塀にはカミカゼ特攻隊の生誕地として由来記の看板が掲げられていた）を外から見学し、大西瀧治郎軍司令部壕跡（壕には、旧日本軍の宝探しの人達が住み着いている）、記念・慰霊碑（大西神社）を参拝してアンヘレスのダニエル・H・ディソン氏宅へ向かう。

大きな緑の庭木に囲まれたディソン氏邸は、落ち着いた佇いの中にあった。ヒルベロ観光局長を始め、明楽副住職、徳洲会の代表者、在比マニラ会の方々等とも一緒であったが、玄関口で迎えられたディソン氏御夫妻は思いの外お元気そうに見えたし、健康的で明るいお嬢様が付き添っておられたので安堵した。ディソン氏はこのところ腎臓の透析治療のため、外出は出来るだけ控えておられ、慰霊祭にも残念ながら出席出来なかったとのことであった。他の一行が退出された後、我々二人と鈴木さんの三人だけでゆっくりお話しすることができた。初対面ながら予て氏の著書『カミカゼ』を拝読し、その公正・公平な史観と特攻隊勇士の精神をフィリピン人の範として残し、顕彰したいという氏の情熱と行動力に感動していた筆者とは、直ぐに心を通わせることができた。そして、持参した『特別攻撃隊全史』と会報『特攻』の3年分をファイルして贈呈し、説明を加えたところ、大変喜ばれるとともに、これ程多くの特攻隊戦没者があったことに驚きを示され、早速、自宅の「カミカゼミュージアム」に展示されて、後日じっくり勉強させていただくと仰っておられた。「カミカゼミュージアム」には、特攻隊に関する写真や絵、遺品、書籍のほか、氏が息子さんと一緒に収集された旧日本軍の武器類も展示されていた。名残は尽きないが又の再会を約し、御夫妻の御健康を祈念しつつ御自宅を後にした。早、夕刻も迫り、一路マニラを目指して夕焼けの高速を走り、18時頃ホテルに到着した。

〈三日目〉10月26日、月曜日であるが、統一地方選挙の開票日とあって休日のため、道路が渋滞することを考慮し、早めにホテルを出立することになった。まずマニラ南郊のモンテンルパ刑務所に向かう。戦後日本人戦犯が収容され、17名が処刑されたが、「あゝモンテンルパの夜は更けて」（代田銀太

ディソン邸応接間にて

カミカゼミュージアムにて

カミカゼミュージアム

ディソン邸庭でディソン氏・お嬢さんと

モンテンルパ平和観音堂

平和の鐘

平和の塔

郎作詞、伊藤正康陸士56期作曲）の歌とそれにまつわる秘話は余りにも有名である。今でも刑務所として使用されており、特に麻薬関係の受刑者が多く収監されているとのことである。その直ぐ近くに平和観音像を祀り、小さな白い墓石を寄せ集めた慰霊堂が建立されており、平和の鐘、平和記念塔などがある。線香を手向けて心から御冥福をお祈りした後、一路ラグナ州南部カリラヤにある日本政府建立の比島全戦没者慰霊公園に向かう。マニラから南東へおよそ１００キロ、比島最大の湖ラグナ湖を迂回し、その南の山の山麓にカリラヤ慰霊碑公園はある。

ラグナ湖はさすがに広大である。琵琶湖を思わせるような風光明媚の地である。この辺りまで来ると、南国の長閑な田園風景が広がっている。ラグナ湖の近くのラモン湾の望める辺りに人造湖もあり、多分水力発電用であろうか、これまた中々の眺望であった。

カリラヤ慰霊公園は、昭和31年5月大東亜戦争による日比賠償協定が調印され、その翌年2月首相となった岸信介氏の尽力により、約51万8千名の比島全戦没者慰霊のため、国立の慰霊碑公園を建設すべくフィリピン政府と交渉し、この地に土地を確保して、昭和48年3月28日に慰霊碑の建立と公園の造成、整備が完了したとのことである。正式の名称は、カリラヤ慰霊公園「比島戦没者の碑」ということであるが、広大な丘陵地を利用し、芝生庭園の中に立派な慰霊碑と休憩所が設けられ、周囲には池水を配した広い日本庭園も造成されている。日本政府が建設した国立慰霊公園であるから、日本政府の委託によって現地で管理されているものと思うが、原則有料（日本人は無料）であり、たまに遊びに来る現地の人はいるが、最近は、参拝に訪れる日本人は滅多にいないとのことで、誠に残念なことである。以前は遺族会や戦友会の人々が訪れ、周囲の丘に慰霊碑などを建てたりしたものもあったが、この土地は元々フィリピン電力会社の所有地であり、許可なく建てたものもあり、年数の経過とともに朽ち果てたものもあったりで、景観保全と管理上の理由により整理を求められ、厚生労働省援護局において公告の上、一昨年それらの民間慰霊碑を整理し、国立慰霊碑の脇に埋葬したとのことである。フィリピンには大東亜戦争全戦域の中でも最も多数の民間慰霊碑があり、確認されただけでも、その数１６４基に達しており、今後同様の問題が発生するであろうことは十分考えられる。

何分にもカリラヤ慰霊公園は、マニラから遠い所にあり、通常は車で片道約3時間であるが、ちょっと渋滞すると4時間以上掛かり、途中適当なパーキングエリアもないので、今回も弁当持参で往復したが、ハイキングを兼ねて行くには景色なども良い所である。帰路はひたすら走って夕刻マニラのホテルに着いた。

〈四日目〉 10月27日（火）、いよいよ最終日である。マニラ発14時25分（現地時間）のフィリピン航空ＰＲ－４３２便で帰国しなければならないので、駐在武官の松崎勇樹1等空佐のお取り計らいにより、指定時間の10時30分頃マニラの日本大使館に桂誠大使を表敬訪問してから空港へ向かうことになった。日本大使館は、マニラ湾寄りのロハス大通りの中程にあってロペス博物館に近い。落ち着いた重厚な感じのする2階建てであった。桂大使と松崎防衛駐在官には公務御多忙の時間を割いてお会いいただいた。持参した『特別攻撃隊全史』と会報『特攻』3年分を贈呈し、慰霊祭や慰霊碑、協会の活動等について概略の説明を申し上げたところ、興味深く聞いていただけた。マニラ発の航空便は定刻に離陸し、日本時間の19時55分無事成田に着陸、3泊4日のフィリピン慰霊巡拝旅行を無事終えることができた。戦没者の慰霊顕彰について、特に海外慰霊碑、慰霊祭等の現状について見聞を広め、色々と考えさせられた旅行であった。これも現地関係者の御支援、御協力のお陰である。取り分け、現地ガイドを務めていただいた鈴木道夫さんの御案内、御指導なくしては、旅行の目的を達することはできなかったであろう。鈴木さん始め、関係の皆さんに心からお礼を申し上げる。

マバラカット市長挨拶

マバラカット市並びにメトロ・クラーク地区の官民を代表して、由緒あるここクラークフィールド・リリーヒルで開催される、第13回世界平和祈念式典に御参列の皆様に御挨拶を申し上げます。

例年どおり、鹿児島市の最福寺の信徒の方々が参加されました。今年は池口恵観和尚に替わって、明楽宜興（賢治）副住職が代表として読経をしてくださいます。

さらに、特攻戦没者と同年代の御高齢にも拘わらず、特攻協会を代表して飯田様と羽渕様が御出席くださったことを大変名誉に思います。

世界平和運動に熱心な中村幸治様、但馬人グループの植田悟様が、それぞれお仲間と共に参列されたことも有り難く思います。また、式典開催に色々と御協力頂いている福田様、竹内ひとみ様、PPクラブの、のり子様、鬼頭重樹様（キトウコンピュータ株式会社代表取締役）のお顔を拝することができて、嬉しく存じます。

同じく、平島浩二様（宇和島徳洲会病院事務局長）が代表の徳洲会会員の方々が参列してくださっています。徳洲会は、日本の国外でも知られている徳田虎雄国会議員が設立された慈善団体であります。

若宮清様（医療法人徳洲会顧問）と御一緒に、今回初めて西村康稔国会議員（衆議院議員・自民党影の内閣経済産業大臣）が参加されましたことを歓迎申し上げます。御出席の皆様の中には、若宮清様が、1983年に、ニノイ・アキノ大統領が搭乗していた同じ飛行機で来比されたことを、覚えておられる方もおられることでしょう。

終わりに当たり、フィリピン第600空軍連隊と補給司令部の隊員並びにクラーク開発公社の社員の皆様方に対し、本式典が見事に挙行されるため、多大の御支援を賜ったことに深甚の謝意を表します。

会場の皆様方、私どもがこの平和祈念式典を始めてから13年が経過いたしました。私どもはこれからもこの事業を続けて参りますが、私どもの住む地域社会が、現在抱えている諸問題、即ち増大している失業者、ホームレス、飢え、無気力等は、最も経済的に安定していると思われている北米、欧州、アジアその他の地域においてさえも、社会を侵食しつつある脅威と考えられています。

数百万人が飢え、医療欠如のため多くの乳幼児を喪い、劣悪な住環境が存在する限り、平和な社会は訪れないでありましょう。したがって、私どもの平和への願いは、安定し、人類愛に充ちた、対立のない世界を創造していくことを目標としなければなりません。それはあらゆる人々に対して、友愛、自由、平等、そして公正という基準が共有されることで実現されるものであります。

しかしながら、私どもは現在、戦争や紛争のない世界に住んでいるとは言えません。現実は、東南ないし東アジアに住んでいる私どもは、不安定な社会に生きています。日本人の皆様も、恐らくこの考え方に同意されるでありましょう。たった2カ月前に、日本と中国との間に東シナ海の尖閣諸島に関して紛争がありました。二つの経済大国の間の外交関係は、両国の指導者が

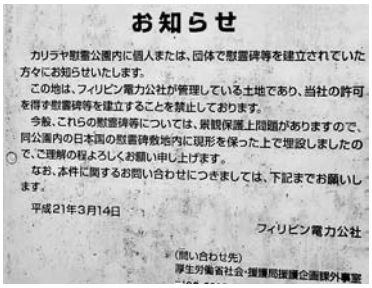
カリラヤ慰霊公園全景

カリラヤ国立慰霊碑と休憩所

国立「比島戦没者の碑」

慰霊公園内の日本庭園の一部

日本庭園内の朱色の鳥居


お知らせ

カリラヤ慰霊公園内に個人または、団体で慰霊碑等を建立されていた方々にお知らせいたします。

この地は、フィリピン電力公社が管理している土地であり、当社の許可を得ず慰霊碑等を建立することを禁止しております。

今般、これらの慰霊碑等については、景観保護上問題がありますので、同公園内の日本国の慰霊碑敷地内に現形を保った上で埋設しましたので、ご理解の程よろしくお願い申し上げます。

なお、本件に関するお問い合わせにつきましては、下記までお願いします。

平成21年3月14日

フィリピン電力公社

（問い合わせ先）
厚生労働省社会・援護局援護企画課外事室

民間慰霊碑整理の立札

WELCOME REMARKS

October 25, 2010
Lily Hill, Clark Field

On behalf of the officials and peoples of the Municipality of Mabalacat and the Metro Clark community, I welcome you all to the 13th Annual Pilgrimage Prayer for World Peace here at the historic Lily Hill, Clark Field. As always we are delighted to have in our midst our main celebrant and the members of his entourage, His Eminence Ekan Ikeguchi sensei of the Saifukuji Temple in Kagoshima City in Kagoshima Ken, but today's prayer and invocation will be lead by His assistant priest MEIRAKU KENJI. We are also greatly honored by the presence of some war veterans belonging to the Tokkotai Peace Memorial Association who, in spite of their age, travelled all the way here to be with us. Joining us this morning are Lida san and Habuchi san. We are just as glad to note the presence of valuable friends like Koji Nakamura san of the World Peace Campaign and Satoru Ueda san of the Tajima jin Project. We're equally delighted to see here Fukuda san, Hitomi san, Noriko san of Club PP and Kito san who, in more ways than one, have helped us institutionalize this annual gathering. We are likewise happy to see the faces, too, of our guests belonging to the Tokushu-kai Medicial Corporation led by Koji Hirashima san and whose philanthropy inspired by Congressman Torao Tokuda is known even outside of Japan. We would like to welcome for the first time Congressman Nishimura Yasutoshi who flew in together with Kiyoshi Wakamiya san, who as some of you probably remember, was on the same flight as Ninoy Aquino in 1983. Lastly, we welcome the men and women of the Philippine Air Force's 600th Air Base Wing and Air Reserve Command and the officials of the Clark Development Corporation whose support and encouragement has helped us turn this annual activity into a worthy undertaking.

Ladies and gentlemen, it's been 13 years since we began this *Annual Pilgrimage Prayer for World Peace*. We must not only sustain this advocacy, but we must, in our own little worlds and with greater passion, also address the more pressing and basic problems that beset our world today such as the growing joblessness, homelessness, hunger, and hopelessness that threaten to undermine even the most supposedly stable economies in North America, Europe, Asia and other parts of the world. There will never be lasting peace in our world for as long as there are millions of hungry mouths to feed, of children dying from lack of medical care, of families scampering for roofs above their heads. Thus, our quest for peace must be aimed at creating a ***stable, humane, uni-polar world*** which is guided by the norms of brotherhood, liberty, equality and justice for all.

This is not to say, however, that we are now living in a world without wars, a world without conflicts. In fact, we, Southeast- and East Asians, are living in a volatile world, too. Surely, our Japanese friends will agree with this assessment. Only two months ago there was tension between them and their Chinese neighbors over the disputed **Senkaku Islands** in the East China Sea. The diplomatic row between these two economic powerhouses could have escalated into a frightful armed conflict had their leaders not taken a more cautious approach to ease the tension. But the dust, so to speak, hasn't really settled yet. Just days ago there were reports of ultra-nationalist Chinese youth vandalizing a Japanese supermarket in China and pelting every Japanese car on sight with rocks and stones. In the case of our country, the Philippines, we, along with some of our Southeast Asian neighbors such as Vietnam, are also locked in a territorial dispute with China over the **Spratly Islands** in the South China Sea. There is not much tension there at the moment, but we need to remind ourselves that in the past there had been an exchange of gunfire between China and Vietnam over these islands. And then there is the nuclear threat from **North Korea** which can turn a wide swath of Asia into a fireball. Clearly, we can not commit the mistake of just sitting back and watching these potential flashpoints to turn into messy, bloody wars. As peace advocates, we must actively encourage our respective leaders and the whole world to resolve disputes through peaceful dialogues. As a group we must find a way to actively add our voice for calm and sobriety where it is needed, for only then can we really add substance to our commitment to promote world peace and harmony. In many ways, our world is in turmoil. But we must not give up. We must keep pressing our agenda for peace anywhere, anytime. Failure on our part to help still the waters in our corner of the globe, in the Israeli-Palestinian border, in Afghanistan and Pakistan, in Iran and other volatile regions could put the entire world on the brink of war. This may sound like a tall order for us, but are we just going to sit and watch? My dear friends the time has come to stretch our vow to the next level.

Thank you for joining us here today. I look forward to welcoming all of you again next year and in the years to come.

Good morning ,Domo arigato and may God bless us all!

より慎重な配慮で緊張緩和に努力を注がなかったからであります。しかし、この愚かな事態、敢えてこう表現しますが、未だに解決していません。つい数日前、中国の過激な愛国主義者（ウルトラ・ナショナリスト）の青年達が現地の日本のスーパーマーケットに狼藉を働き、附近の日本車に投石したということが報道されました。フィリピンでは、例えば、ベトナムのような東南アジアの隣国同様に、南シナ海の南沙諸島に関しての中国との国境紛争は凍結しています。現在は緊張関係にはありませんが、私どもは過去に、中国とベトナムとの間で、これら諸島に関して砲火が交わされたことを銘記する必要があります。そして今は、北朝鮮による核の脅威があります。これは、アジアの広い地域を壊滅させるものであります。私どもは昔に戻る過ちを犯してはなりません。大量流血の戦争に陥る可能性のある紛争所在地を、冷静に観察し続けなければなりません。

平和愛好者として私どもは、平和的対話を通じて紛争を解決することを、各国の指導者と全世界に対して積極的に発言していくべきであります。私どもは平和愛好者グループの一員として今、紛争解決の必要がある地域に対して、冷静かつ穏健に、しかも積極的に声を掛けていく方途を見出さなければなりません。そうしてのみ私どもは、世界平和と協調を促すことに介入するための基盤を実質的に強化することが可能となります。

現在、我々の世界は色々な混乱を抱えていますが、我々は諦めてはなりません。何時でも何処へでも世界中へ平和を訴えていく行動力を、常に保持していくべきであります。

イスラエルとパレスチナ、アフガニスタンとパキスタン、イラン、その他不安定な情勢下にある地域に、平和をもたらすための私どもの努力が失敗すれば、全世界を戦争の瀬戸際に追い込むでありましょう。

このことは、我々にとって高い要求であるように思えますが、現在私どもは、着実に腰を据えてこの問題に取り組んでいるでしょうか。会場の皆様、今や私どもは、その目的を達成しようとする私どもの誓いのレベルを、一段と高めるべき時が到来しています。

本日は、皆様方多数、御参加頂いたこと、誠に有り難うございました。皆様方と来年も、それ以後もお目に掛かれることを楽しみにしております。

お早うございます。ドウモアリガトウ。参加者全員に神の御加護がありますようにお祈りします。（菅原道熙訳）

年頭の決意「日々之新たなり」

会員　野村　利幸

終戦の時私は17歳でした。特攻隊の最年少者も17歳でした。したがって、私も飛行機の操縦コースを選んでいたならば、特攻隊員になって、愛機に爆弾を抱かせ、敵艦目がけて突っ込んで逝ったはずです。

ところがこうして生き延びているということは、全く付録の人生であり、「後に続くを信じて」散華された彼等の悲願を実現するために生かされている身であると、常々自分の心に言い聞かせております。

昭和20年5月11日、沖縄の海に群がるアメリカの艦艇目がけて体当たりを敢行した神風特攻隊第九銀河隊の吉田雄海軍一等飛行兵曹（乙飛18期）17歳（現在の高校2年生の年齢）は、

「大君の為に捧げし　我が命
　散りてぞ薫る　特攻の華」

という辞世の歌を残して逝きました。

彼等は果たして何を念願しながら散って逝ったのでしょうか。

それは「愛する家族よ日本国民よ、いつまでも幸せであれ！祖国日本よ、永遠に不滅であれ！世界から信頼され尊敬される、誇り高き国家・国民となれ！」ということであると信じています。

しからば、自分は何をなすべきか。それは我が人生の原点が「敗戦濃厚なるにも拘わらず、自分の前途洋々たる人生の全てを犠牲にして、潔く散華された特攻隊」であることを、常々自覚すること。そして「英霊が命を懸けて熱烈に求めて止まなかった、世界の模範となる誇り高き日本」を実現するために、「こうすれば日本は良くなると信じたことを訴え続ける」これをライフワークとして死ぬ瞬間まで、鉄の意志と強烈な実行力をもって徹底的にやり抜くこと、これ以外にありません。

因みに、沖縄戦における特攻戦死者は、海軍航空１９８１名、陸軍航空１０２１名、合計３００２名（76％）でありました。

米軍に与えた損害も大きかった。少なくとも35隻を撃沈、３００隻以上を撃破した。また、米海軍の戦死者５千人の損害を与えた（『ＫＡＭＩＫＡＺＥ』加瀬英明、アルバート・アクセル共著、ロングマン社）。

この戦果は、圧倒的な勢力で上陸を図ろうとする米軍部隊を、どれ程震撼させたか、また、航空体当たりの特攻が、沖縄戦において如何に重要な役割を果たしたかを証明しているのです。

「特攻隊を称える歌」

雲染む屍　つぎつぎて
　撃ちてしやまん　幾潮路
決死の翼征くところ
　雄叫び高し特攻隊

「さあやるぞ！今年もやりたいことが山程あるのだ！今年も心臓病（機能は健常者の3分の1、突然死を伴う心不全）、糖尿病（20年継続中）なんかに負けてなるものか！気合いを入れて吹き飛ばせ！これが83歳の心意気だ！と叫びながら」

「年頭所感」

日の本の　永久の栄えの為ならば
　テロの矢弾に　この身裂くとも
この我に　艱難辛苦来るとも
　進まん道は　神のみぞ知る
己が身を　祖国に捧げし靖國の
　御霊に応えん　命果つるとも
我もまた　墓穴に入らず大空の
　魂魄となりて　祖国守らん
導きは　愛する祖国に己が身を
　捧げまつりし　靖國の御霊
我が魂は　護国の神に導かれ
　靖國参り　叶うぞ嬉しき

公　告

戦後66年を飛び越えて
『Motherマザー～特攻の母島浜トメ物語～』
【公演概要2】

【公演日程】
東京公演
2011年3月17日(木)～21日(月)
(全9回公演)
栃木公演
2011年3月26日(土)
(1回公演(2回になる場合が御座います))

【劇場】
東京
新国立劇場
(小劇場　1st 394)
栃木
矢板市文化会館
(大ホール　1st 1000)

【チケット】
東京公演
前売り¥5500/当日¥5800
(税込み/全席指定)
栃木公演
前売り・当日共に¥3000
(税込み/全席自由)

【大林素子/島濱トメ役】
ソウルアトランタ・バルセロナオリンピック
バレーボール日本代表

Birth : 1967.6.15
Native Place : 東京都小平市
Blood Type : O
Eyes Color : Black
趣味/特技 : 舞台鑑賞(特に宝塚)、
タップダンス
レース観戦(車・バイク)
資格 : 国内A級ライセンス
MFJ PIT CREW LICENCE
小型船舶4級免許
華道池坊奥伝免許
けんだま8級

宇宙大航海時代の幕開け
―「はやぶさ」の地球帰還―

会員　早川　雅彦

「編注・昨年の小惑星探査機「はやぶさ」による小惑星イトカワの探査とその表面物質採取成功のニュースは、科学技術立国を目指す我が国にとって一大朗報であると共に、多くの日本人、取り分け未来を背負う少年達に大きな感動と夢を与えてくれた快挙であった。その「はやぶさ」の探査飛行に直接関わった科学者であり、当会会員でもある早川雅彦氏から、「はやぶさ」にまつわる次のような感動的な記事をお寄せ頂いた。早川氏は、宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所に勤務されている固体惑星科学研究系担当の理学博士であられる。なお、編者も「はやぶさ」の快挙に感動の余り早速、偕行社の月刊機関誌『偕行』1月号「花だより」欄に、「宇宙への夢」と題する拙文を寄稿しているので、ご参考までに、後ろに掲載させていただいた。併せてご一読いただければ幸いである。」

◇　◇　◇

平成22年（2010年）6月13日22時51分、日本の宇宙科学研究所が平成15年（2003年）5月に打ち上げた小惑星探査機「はやぶさ」が大気圏に突入、23時にはビーコン信号により地球への帰還が確認された。いや、正確には小惑星のかけらの入っている可能性のあるカプセルを地表（オーストラリアのウーメラ砂漠）に送り届け、「はやぶさ」自身は地球の大気圏内で燃え尽きてしまった。ビーコン信号はカプセルが自分の位置を知らせるために放ったものである。私事であるが、この帰還によって7年にわたる「はやぶさ」運用（データを受信し、何らかの判断を行い、指令を送る）のスーパーバイザーとして日々の運用の指揮を執ってきた私の任務は終了した（スーパーバイザーは常時十数名で構成され、1週間単位で交代する。7年間で延べ26人がその任に当たった）。

この「はやぶさ」は、地球から3億キロメートル離れた、大きさがわずか500メートル程の小惑星イトカワを目指して惑星間空間を、世界初となるイオンエンジンで飛行して到達し、ランデブー（並走）しながら科学観測を行い、その姿を明らかにした。3億キロメートルとは地球と太陽の距離の2倍で、光の早さでも往復30分以上かかる。何かにぶつかりそうだと分かってから「避けろ」という命令を送っても届くのが30分以上後なのだから間に合う訳がない。そこである程度は「はやぶさ」自身が判断して緊急回避できるように教えてある。「はやぶさ」は、言わば自律型ロボットでもある。

さらに、その表面のサンプル＝小惑星イトカワのかけらを採取しようと試みて2度のタッチ・ダウン（着陸してすぐ離陸）を行った。タッチ・ダウンの最終行程は「はやぶさ」の自律機能に任せることになる。残念ながらサンプル採取機構が思惑通り動作したという確認はできなかったが、タッチ・ダウンの際に舞い上がった小惑星イトカワの砂埃がカプセル内に捕獲されている可能性はかなり高いという判断の下、地球への帰還運用が続行された。

「はやぶさ」は、往路・観測中においても様々なトラブルに見舞われ、その度に設計段階では想定していなかった方法で、それらのピンチを切り抜けた。最大のピンチは、2度のタッチ・ダウンの後姿勢を崩し、地球との通信が途絶えた時だ。通信ができなければ地球から指示も出せないし、一体「はやぶさ」に何が起こっているかも分からない。致命的である。過去に消息を絶った惑星探査機が見付かった例はない。誰もがもうこのミッションは終わりだと思うのが当然の状態だった。上層部では運用打ち切りの話も出ていたという。ところが「はやぶさ」チームのメンバーは諦めず、毎日受信アンテナを「はやぶさ」の飛行しているであろう方向に向けて電波を送り、通信の再開を根気よく待ち続けた。これは、川口プロジェクトマネージャーにより「1年粘れば60～70パーセントの確率で救出できる」という具体的な可能性の数値が示されたことが大きい。メンバーにとって「はやぶさ」のゴールは地球に帰ることであるという、揺るぎない高い目標を共有していたからでもある。

実は「はやぶさ」にはそんな場合でも時間をかけて姿勢が安定するように設計されていた。非常に受動的ではあるが、オイラーの法則に従って「はやぶさ」はやがてZ軸（お椀型のハイ・ゲインアンテナが＋Zの方向、**図1**）周りに緩やかに自転するようになるのだ。つまり、太陽電池パドルを風車のように回転させる姿勢だ。この状態になっていれば、今はアンテナが地球の方に向いていないとしても、太陽周りの軌道運動をするうちに、いずれ（それは来週か1年後か分からないが）太陽電池パドルに太陽光が当たり、かつアンテナが地球の方向を向くタイミングが来るはずである。川口プロジェク

トマネージャーは、それを具体的数値として示すことでチームの士気を鼓舞し、上層部に運用続行を承諾させたのだ。予想通り、約7週間後（これはかなり運がいい場合であった）に長野県臼田の64メートル深宇宙アンテナが「はやぶさ」のかすかな電波をキャッチした。捕まえてしまえば、時間さえかければ通信復旧は大したことではない。

トラブル時のデータを解析するうちに、通信途絶の原因が判明した。姿勢制御用の液体燃料のバルブが2度のタッチ・ダウンでダメージを受け、そこから液体燃料が勢いよく漏れたため姿勢を崩したのだ。姿勢制御に使う燃料も漏れてゼロになってしまった。更に悪いことは重なるものだ。太陽電池パドルが太陽の方を向いていない時に電力を供給する二次電池（充電したり放電したりすることのできる電池）が完全放電してしまい、使用不能になっていたのだ。つまり、以降は、必ず太陽電池パドルに幾ばくかの太陽の光が当たるような姿勢（太陽光発電のできる姿勢）しか取れないという事態になった。

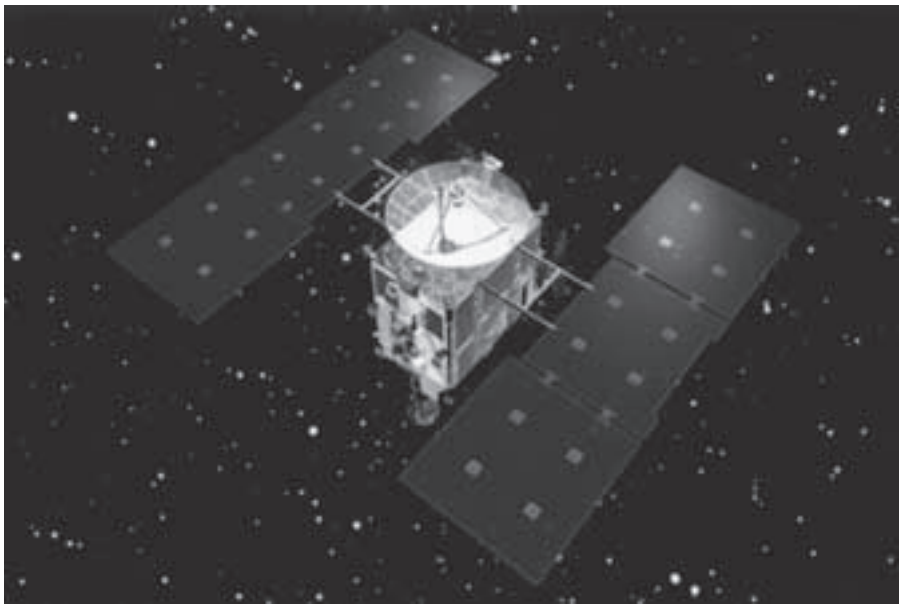


図１　小惑星探査機「はやぶさ」

しかし、不幸はそれだけではなかった。見失ってから再捕捉までの7週間の間に、地球へと旅立つタイミングを逃してしまったのだ。地球は太陽の周りを1年で回っているが、イトカワ（「はやぶさ」もその時はイトカワと同じ軌道）は太陽の周りを約1年半で回っている。効率よく地球に帰ってくるには、地球と「はやぶさ」はある位置関係を満たさなければならず、その機会は3年に1度しかない。タイミングを逃がしたら、次の好機は3年後ということである。図らずも「はやぶさ」の地球帰還は平成17年（２００７年）から平成20年（２０１０年）に変更された。機体の耐用年数は、ミッション期間の4年ということでギリギリの設計しかしていない。3年間のミッション延長に耐えられるかどうかは賭けである。

姿勢制御用ガスは吹き出して無くなってしまったので、チームは「はやぶさ」の主推進を担うイオンエンジンの燃料であるキセノンガスを生ガスのまま噴出することで、姿勢制御をする方法を考え出した。そして、新しい姿勢制御方法のプログラムを組んで送信し、「はやぶさ」に教え込んだ。幸いなことにキセノンはかなり余分に搭載していた。それでもキセノン消費を抑えるために、太陽光の輻射熱を利用して姿勢を制御する方法も編み出した。太陽から遠いところを飛行する時は発電量が少ないので、極力省エネに努めた。そして平成19年（２００７年）4月、3年の長い復路についた。

復路でも苦難は襲いかかった。地球帰還を目前にした平成21年（２００９年）11月、耐用年数を過ぎたイオンエンジンは、4基とも十分な推進力が出せなくなってしまった。エンジンの中和器と呼ばれる部分が長い時間電子に叩かれ続けてヘタってしまったのだ。川口プロジェクトマネージャーも「もはやこれまで」と思ったその時、イオンエンジン開発運用責任者の國中均教授から提案があった。「ミッションの初期に不調となったため、ほとんど使用していないAエンジンの中和器と、中和器はヘタっているが十分動くBエンジンを組み合わせたら必要な推力が出せるかもしれない」と。

二つのエンジンの生きている部分を組み合わせて使う二コイチ運転である。國中教授は、万が一のために二つのエンジンを繋いでクロス運転できるような回路を仕込んでおいたのだ（い

わゆる國中マジック)。クロス運転について思い付いたのは設計が進んでしまった後だったので、衛星重量に影響を与えない程度の変更(ダイオード1個)で済ます対処を施した。余りにも小さな部品の追加だったので、川口プロジェクト・マネージャーにも特に報告をしていなかったという。軌道上での試験運転で地球帰還に必要な推進力が得られることが分かり、満身創痍の機体ながら地球に向けて再び飛行を開始し、6月の地球帰還に至る。

月以外の天体に行って着陸離陸して地球に戻ってきた、すなわち惑星間空間を往復したのは、この「はやぶさ」が世界初である。米露欧州もなし得なかった快挙である。その道のりは、60億キロメートルにもなった。「はやぶさ」がこれからの宇宙大航海時代の道を拓いたと言える。

この「はやぶさ」の地球帰還開始からインターネットを通して多くの関心が寄せられ、また、励ましのメッセージが運用チームに届けられた。チームメンバーと同様に一喜一憂するファンと呼ばれる人々だ。中には打ち上げからずっと応援してくれている人も少なからずいる。神社仏閣にお参りに行ってくれる方もいた。そのような下地があって、「はやぶさ」カプセルのオーストラリア帰還の際には大きな社会現象になった。普段、宇宙には何の関心もないお母さんが子供と一緒に「はやぶさ」のニュースを見て涙し、TVのバラエティ番組では、タレントが俄か「はやぶさ」ファンとして熱く語ったりもした。何よりも科学技術立国を謳いながら、事業仕分けで基礎科学研究を「二番ではだめなのですか?」と軽視した政治家の言を翻させた。世界で一番になるというのはどういうことか、いかに日本人にその資質と誇りが受け継がれているか、そのためにいかに諦めずに努力をし続けるか、その一つの答えを「はやぶさ」とその運用チームは絶好のタイミングで示したと思う。

帰還から約5カ月後の11月16日に、「はやぶさ」カプセルの内部を慎重に精査していたキュレーション・チームからプレスリリースが発表された。回収された微粒子のほとんどがイトカワ由来のものと結論されたのだ。その数1500個。川口プロジェクト・マネージャーからは喜びの余り、「1500個は多過ぎる」とジョークが飛び出したほどだ。「はやぶさ」は舟以外の天体に着陸して試料を採取して地球に持ち帰ってきた初めての探査機となった。もう一度言う、人類初の快挙である。

最後に掲載した**写真2**の説明をしておく。これは「はやぶさ」が撮影した最後の写真(ラストショットとして有名になった)で、写っているのは彼の故郷の地球である。下の4分の1ほどが欠けて灰色になっているのは、上部からそこまでデータを送信して通信が途絶えたからである。ちなみに、最後にデータを受信したのは、鹿児島県内之浦の34メートルアンテナである。当初、このような写真を撮る予定は計画にはなかったが、いつの間にかチームの中に「はやぶさ」に最後の地球を見せてやりたいという気持ちが湧き上がってきた。撮像カメラは、タッチ・ダウンの平成17年(2005年)11月以降、電源オフのまま5年が過ぎている。その間は保存温度以下の低温にさらされていて、電源を入れたからといって、正常に作動する保証はない。

運用最終日、カプセル分離が最重要項目なので、トラブルを起こす可能性があるカメラの電源を入れるのは、分離後でなければならない。カプセル分離から通信が途絶えるまで3時間足らずである。その間に分離の反動でぐらついた姿勢を安定させ、カメラを地球に向けて撮像するのはかなり難しいことである。写真を撮って姿勢を確認するなんてことをやっている暇はない。

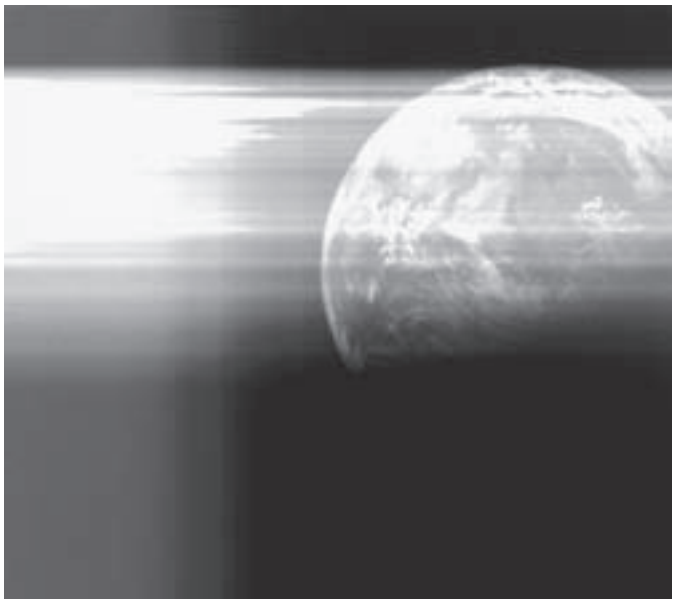


写真2　「はやぶさ」が撮影した最後の写真「地球」

姿勢の揺らぎを予想してシャッターを切るだけである。写真は実際、七、八枚撮ったらしいが、ほとんど地球は視野に入らず真っ暗だったそうだ。最後の最後、交信終了間際に送ってきたのが、掲載した1枚である。奇跡的な執念の1枚である。

この写真を送信した後「はやぶさ」は日陰に入ったため、電力確保ができず、仮死状態になり、その約30分後にオーストラリア上空で燃え尽きたのだ。現地で撮影されたカプセルを守って燃え尽きる「はやぶさ」とその少し先を真っ直ぐ突き進むカプセルの姿は涙なしでは見られなかった。

「はやぶさ」に、祖国のために散華された特攻隊の御英霊の姿が重なったことをここで白状しておく。

※図及び写真はＪＡＸＡ提供。

【補足】「はやぶさ」という名前は、小惑星の破片を採る際のタッチ・アンド・ゴーの動作が、猛禽類のハヤブサが獲物を獲る様に似ていること、その昔、ロケット打ち上げ場のある鹿児島に行く時に乗る寝台特急が「はやぶさ」だったこと、そして日本の宇宙開発の父が糸川英夫博士であり、糸川先生が先の大戦で活躍した陸軍の一式戦闘機「隼」の設計に関わったことに由来している。

◇　◇　◇

○宇宙への夢（その２）

飯田　正能

☆昨年1月のこの欄に「宇宙への夢」と題する小論を掲載した。一昨年の平成21年が「世界天文年二〇〇九」であり、しかも今世紀最長、日本では46年振りという皆既日食が7月22日、インド、中国から日本南方近海で観測されたが、国立天文台の観測班は、1年前から防衛省の協力の下、硫黄島の予備調査を行い、現地自衛隊の支援とその経験を参考として、観測地に、島の西海岸の物資揚陸場を最適地と決め、海上自衛隊による大型観測機材等の物資輸送を始め、慎重に準備を進め、観測本隊の輸送にも一次、二次と分けて1～2週間前から航空自衛隊のＣ―１３０輸送機を使用して万全を期し、しかも観測前には、自衛隊員の案内で天山慰霊碑を始め島内の慰霊碑を巡拝して戦没者の慰霊を行ったとのことである。そのような心掛けが天に通じたか、悪天候により観測が危ぶまれる中、一時的な晴れ間を縫って奇跡的な観測に成功し、多くの貴重な資料を得ることができた。

★昨年はまた、宇宙観測、宇宙科学の分野で、画期的とも言える、小惑星探査機「はやぶさ」による小惑星イトカワの探査と表面物質の採取に成功した。「はやぶさ」は、宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所（以下「宇宙研」と略称）が開発し、２００３年５月９日、大型ロケットＭ―Ｖ５号機により打ち上げられ、深宇宙に投入された。「はやぶさ」の打ち上げは、将来の本格的な惑星サンプルリターン探査に必要な基本的技術習得を目的とする工学実験である。近地球型小惑星の一つイトカワに接近、着陸して表面から採取した試料を地球に持ち帰るという往復ミッションを行う中で、主要な工学技術①イオンエンジン、②自律航法、③試料採取、④惑星間空間からの直接地球帰還等の宇宙実証を行った。

☆「はやぶさ」のイオンエンジンによる動力航行は、当初非常に順調で、04年5月19日に地球に再接近した際、増速して小惑星への遷移軌道に乗り換え、05年9月12日に小惑星イトカワとのランデブーに成功し、イトカワの遠隔観測の後、2回の着陸を敢行した。しかし、姿勢制御用のリアクションホイール（ＲＷ）3台のうち2台の機能を喪失し、更に05年12月8日に化学推進用燃料が漏洩して姿勢制御を失い、行方不明となった。幸運にも06年1月23日に通信が回復し、四つのイオンエンジンから電力を用いずキセノンガスをそのまま噴射することにより、スピン姿勢安定の状態で探査機の復旧に成功した。その後復路の運用においても様々な困難が伴い、部分故障も発生したが、それを克服して、地球～小惑星間の往復宇宙航行を達成した。全航行距離は約60億㎞、この間イオンエンジンは延べ４万時間の宇宙作動を行った。

★２０１０年6月13日10時54分（世界時間）、カプセルは探査機より分離され、13時51分に地球大気圏に突入した。現地時間23時23分、豪州ウーメラ砂漠の上空に2条の大火球が現れ、地上観測班及び航空観測班がこれを捉えた。その一つは探査機本体であり、砕け散って消滅したが、もう一つのカプセルは安定飛行を続けて減速し、高度5㎞でヒートシールド分離・パラシュート展開・ビーコン電波放射が正常に行われた。この電波をウーメラ砂漠域に事前展開した四つの電波方向探査班が捕捉した。着地点から２００㎞離れた実験場中央管制室に情報が集約され、三角測量の要領で位置特定に成功した。すぐさまヘリコプターが離陸し、夜間のうちに着陸したカプセルが目視確認された。実際の着地点は、軌道決定誤差・分離速度誤差・大気密度ゆら

ぎ・風予測を加味した事前予測と僅か７００ｍしか離れていなかった。翌14日午後にカプセルを回収。更に15日午前には分離された二つのヒートシールドも無事確保された。

☆「はやぶさ」の宇宙往復ミッションによって実証された技術革新は目覚ましいものがある。「はやぶさ」以前では、望遠鏡やレーダーしか小惑星の観測手段はなく、その空間分解可能は１００ｍがせいぜいであったが、「はやぶさ」がランデブーや着陸を果たした時、それは１㎜に改善された。試料採取が果たせれば、それはミクロン、更にオングストロームの精度を得る。隔世の技術差である。そして、周辺環境も大きく変貌した。国内においては、技術論を超えた人間ドラマとしてメディアに取り上げられ、多くの共感を生んだ。回収したカプセルの一般公開には実に10万人を超える見学者を得た。「理系離れ」「技術の空洞化」「事業仕分け」の社会風潮の中に、一石を投じたと言えよう。一方、世界的にも幾つかの意味を見出すことができる。恐竜絶滅をもたらしたとされる小惑星の地球衝突への潜在的驚異を詳らかにし、宇宙活動の分野に新たに「宇宙探査」が加えられ、深宇宙への「知」の地平の拡大が公認を得た。米国の宇宙活動方針として、月ではなく小惑星を経由して技術習得しながら火星有人探査を目指すという「フレキシブルパス」が提案されるに至ったという。小惑星探査に関しては、日本は一歩先んじた知見・経験を有しており、ここに大いなる発言権を得たと言えるだろう。（以上『學士會会報』第８８５号・國中均宇宙研教授「「はやぶさ」小惑星探査機の地球帰還」を参照した。）

★更に11月16日、宇宙研の川口淳一郎教授ら小惑星探査機「はやぶさ」のプロジェクトに関わってきた科学者達は、文部科学省での記者会見で、６月に地球に帰還した「はやぶさ」の試料容器から、小惑星イトカワの微粒子約１５００個が見付かったと発表した。粒子は大きさが０・００１～０・０１㎜前後で、電子顕微鏡で調べたところ、大半がかんらん石や輝石などの鉱物で、鉄の含有量が非常に多い、「はやぶさ」はイトカワに接近して周囲から詳しく観測しており、その時のデータと比較したところ、イトカワの岩石と同じような成分で出来ていることが判明した。また、一部の粒子からは地球にない結晶構造の物質も見付かった。月より遠い天体（イトカワは地球より約３億Km離れている）の表面から試料を持ち帰ることに成功したのは、人類史上初の快挙となる。小惑星の物質は、隕石として地球に降ってくることもあるが、大気圏に入る時の熱で変化したりする。小惑星から直接採取できた今回の物質は、そうした変化や汚染を受けていないので、太陽系の成り立ちをひもとく重要な成果として世界中から注目されていると、メディアは一斉に報じた。

☆この快挙は、日本の宇宙技術の高さを世界に印象付ける効果も大きい。世界に向けて「はやぶさ」ブランドの惑星探査技術をアピールできれば、海外への衛星売り込みなどの足掛かりになるとの期待も掛けられているというが、そのような経済効果はもとよりながら、未来を支える子供達にも、未知の事象や夢に挑戦することの素晴らしさが伝わったであろうし、これを機に科学の世界に飛び込みたいと考える子供が増えることを期待したい。「はやぶさ」の成功は、宇宙探査技術だけでなく、情報・通信や精密機器の製造技術など、幅広い分野の総合力を示したものと言える。国も科学技術政策の面で、科学技術全般をバランス良く拡充していくために、有意義な科学技術予算の在り方を考えるべきであろう。

（次の図及び写真は、いずれも前記『學士會会報』より）

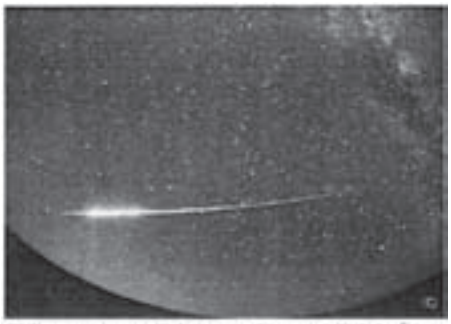


写真１　はやぶさ探査機とカプセルの大気突入［左から右へ軌跡移動］

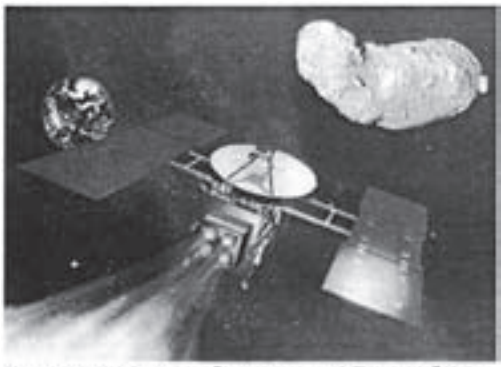


図１　宇宙動力航行する「はやぶさ」小惑星探査機［想像図、但し地球と小惑星は探査機による実写］

平成22年度 旧海軍航空隊串良基地出撃戦没者追悼式

評議員　小倉　利之

平成22年10月15日（金）午後から、鹿屋市串良の串良平和公園慰霊塔前広場において、旧海軍航空隊串良基地出撃戦没者追悼式が鹿屋市嶋田芳博市長主催で実施されました。

この時期は、鹿児島では年間で最も晴れの日が多いと聞いていますが、昨日の夕刻には雨が降っていました。ところが当日は式典に相応しい快晴の良い天気となりました。

串良基地出撃戦没者慰霊塔

慰霊塔前追悼式会場

串良平和公園は、旧海軍航空隊の基地があった所です。その串良基地は、大東亜戦争の末期、教育航空隊として開隊され、約5千名の飛行豫科練習生が、航空機の整備、通信等の猛訓練を受けた所です。そして、昭和19年4月には、実戦部隊に編入され、更に昭和20年3月1日からは特別攻撃隊の基地となり、終戦までの半年間に、祖国の安泰を祈りつつ、身を捨てて南の空へと勇躍飛び立って散って行った若い精鋭達、特別攻撃隊員363名、一般攻撃隊員202名、合計565名の最後の地となった所です。

昭和44年10月1日、串良町及び旧串良海軍航空隊基地出撃戦没者慰霊塔建設期成会が中心となって、平和の礎となられた英霊の慰霊塔を建立し、戦争の悲惨さを後世に伝えるとともに、人類の恒久平和を願って「平和公園」と命名され、以来毎年10月15日には、全国各地から御遺族や生存者が集まって町民と共に追悼式を行ってきました。

平成22年度の追悼式は、式次第のとおり、開式の言葉、一同拝礼、国旗・市旗・旧軍艦旗掲揚、国歌斉唱、追悼飛行、戦没者に黙祷、市長式辞、追悼の言葉、献花、儀仗隊弔銃、遺書朗読、生存者合唱、式電披露、遺族代表謝辞、国旗・市旗・旧軍艦旗降納、一同拝礼、閉式の言葉の順に整斉と行われました。

海上自衛隊第1航空群の基地隊隊員で編成された儀仗隊による国旗等の掲揚、弔銃発射の各種動作は、厳粛な中に素晴らしく、立派でした。

国歌斉唱の伴奏は、肝付消防団音楽隊の演奏によるものでした。

追悼飛行は、鹿屋航空基地に所在する第22航空群第72航空隊のUH－60J及び第1航空群第1航空隊のP3－Cの編隊飛行でした。

戦没者に対する黙祷の後、主催者の市長式辞がありましたが、その中で、「市民を代表して、英霊に対し、心から哀悼の言葉を捧げます。戦後65年が経過しましたが、565名の戦没者に対し、深い悲しみを感じますとともに感謝の念を捧げます。現在は平和と繁栄の世の中でありますが、今後とも努力を傾注して平和の世の中にしてまいります。」と述べられました。

鹿児島県雄飛会会長の追悼の言葉は、心を打つものがありました。

献花及び儀仗隊弔銃の後、遺書朗読がありましたが、豫科練甲飛会の中藤光雄氏による遺書朗読は、和気部隊第1護皇白鷺隊の海田茂雄海軍大尉と俵一夢海軍大尉の遺書で、懐かしい家族と別れ、南の大空に散って行った両名の、家族に対する綿々たる思いの遺書の一部が朗読され、多くの参列者の心を打ちました。

生存者合唱の皆さんの歌「同期の桜」は、晴天の空にこだまし、御霊と共に歌っているように感じました。

国旗等を降納し、一同拝礼をして、閉会の言葉を聞き、式典は無事終了しました。

次いで、場所を変えて直会が実施されましたが、御遺族の皆さんと御来賓の一部の方及び生存者の皆さん並びに主催者側関係者が集まって楽しく語り合い、今後の慰霊祭の実施についての

話もありました。特に、生存者の方からは、年々参加者が少なくなるのが残念でならないが、いつまでも続けて頂きたいとの申し出がありました。主催者側からも可能な限り実施したい旨の発言があり、皆さん安心しておられました。

御霊のことを考えると、何時までも続けることが、是非とも必要であると感じました。特にこの国の平和と繁栄を考えるときに、このことは必要であると感じました。

慰霊塔の下に、平和公園慰霊塔銘として次の言葉がありました。涙が出てきました。

儀仗隊の弔銃発射

「今出撃せんとす
　何も思い残すことはなし
父母兄弟よ幸福であれ
　心すこやかにして大空の如し
こうしているのもあとしばらくです
　さようなら」

「太平洋戦争末期　斯くして串良
航空基地より飛立ち　肉弾となりて
帰らざりし　三百有余の御霊よ
　安らかなれ
必ずや平和のいしずえとならん

串良町長　佐枝　潔」

生存戦友達の「同期の桜」の合唱

特集
特攻インタビュー（第３回）
海軍航空特攻　江名武彦 氏

（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会
特攻ライブラリー取材スタッフ

「編注・当会では、特攻に関連する史実とその精神を後世に伝承するため、特攻関係者の体験談等を取材し、記録することを企画し、有志会員により「特攻ライブラリー」を立ち上げ、先ず、関係者のインタビュー記事を記録することにいたしました。特攻出撃の如何を問わず、特攻体験をされて九死に一生を得た方、特攻出撃を待機された経験のある方等で、映像と写真を含めたインタビュー取材を引き受けて頂ける方がおられましたら、自薦他薦を問わず、当会事務局（担当大澤）までご連絡下さい。」

◇　◇　◇

江名武彦氏軍歴（略歴）

飛行科予備学生第14期　海軍少尉
百里原航空隊　九七式艦上攻撃機偵察士
神風特別攻撃隊第三正気隊　鹿児島県黒島付近海上に不時着

◇　◇　◇

○特攻ライブラリー取材スタッフ
（五十音順）

及川　昌彦　世話人
神崎　夢現　進行・構成
倉形　桃代　記録
提橋　律子　世話人
須貝　智行　写真撮影
高橋　暢　映像撮影
長尾　栄治　インタビュアー

◇　◇　◇

◆学徒出陣

――江名さんの軍歴は、大学生に対する徴兵猶予停止による学徒出陣から始まると思うのですが、徴兵猶予の解除・停止令は突然の出来事でしたか？

江名：昭和18年10月21日に、明治神宮外苑競技場で文部省主催の出陣学徒壮行会が行われました。その時に出陣学徒を代表して東大文学部の江橋慎四郎さんが答辞を読みました。全文は覚え

ていませんけど「時なる哉、学徒出陣の勅命、公布される」「我等、もとより生還を期せず」。徴兵猶予停止で出陣した学徒は、やはり自分は生きて帰れるかどうか……そういう問題については真剣に悩んで軍隊に入りました。私も生きて帰れるかどうか厳しい戦局で、学徒としての覚悟を持って入隊しました。「我等、もとより生還を期せず」というのは、学徒の強い覚悟を述べた言葉です。

――当時、正確な情報は国民に伝わっていなかったと言われますが、戦局が良くないということは認識されていたのでしょうか？

江名：そうですね。各戦場における負け戦の報道というものはありませんでしたが、実際は昭和17年６月のミッドウェイ作戦以降、連戦連敗なんです。それまでに進出した南太平洋の島々が次から次へとアメリカに奪還されて、だんだんと日本本土に攻め上がってくるという状況の中で、戦局の厳しさというものを、やっぱり国民はみんな感じていたと思います。私も日本の危急存亡だと感じました。

――学徒出陣はニュース映画で有名ですが、その後、入隊するまでのことはあまり知られていません。壮行会から入隊までのことを教えて頂けますでしょうか？

江名：これは個人的な話になりますけど、私は両親の許しを得まして京都・奈良・伊勢とまわり、日本文化を肌で感じて自分の気持ちを整理いたしました。

――最初に徴兵検査を受けて、陸軍か海軍かを選ぶのでしょうか？

江名：昭和18年10月の……３日でしたでしょうか、学徒出陣の正式な公報が出ましたのは。それから10月下旬に、各本籍地で徴兵検査があり、学徒兵がだいたい10万名出陣しました。海軍がそのうち１万５０００名くらいじゃないかと思います。陸軍が８万５０００名くらい。それを各地徴兵検査で徴兵官が振り分けるわけですね。

私は岐阜県出身ですから、美濃太田で兵隊検査を受け、その時に陸軍か海軍かと聞かれたので、私は海軍志望と答えて志望通りになりました。他の地方の兵隊検査では、それぞれ志望を言っても必ずしも志望通りにはいかなかったようです。８・５人を陸軍、１・５人を海軍に振り分けるわけですから。私は中学生から必須の「教練」という科目にあった三八式歩兵銃を担ぐ陸軍式の訓練が苦手でして、それで海軍を志望しましたら志望どおり海軍に行けたということです。

◆海軍飛行科予備学生

――志望通り海軍に入られた印象はどうでしたでしょうか？　予想していた通りか、それとも予想と全然違った感じでしたか？

江名：我々の一期先輩の第13期飛行専修予備学生というのは、昭和18年10月１日に海軍に入っているんです。だいたい５０００名です。その人たちは、すぐに予備士官になりました。我々は12月10日に海軍へ入っております。第13期と第14期は２カ月くらいの違いしかないんです。片っ方（13期）は志願兵で、我々（14期）は徴兵です。我々徴兵組は、陸軍とのバランスもあったと思いますが、水兵教育をする海兵団へ最初入ったわけです。私は本籍が岐阜県ですから、呉鎮守府の大竹海兵団に入りまして、一番下の位の二等水兵を２カ月間やりました。兵隊の教育を受けたわけですね。ですので、初めはどうして前期の者がいきなり士官待遇で、我々が水兵なのかと不平を言いましたけどね。その水兵の生活を２カ月間やったことは、後々、私はいい経験だったと思いました。

――水兵から、すぐに予備士官になられたのですか？

江名：ええ。陸軍も海軍もそうですけども、非常にパイロットが不足していたんですね。もう昭和18年になりましたら、開戦以来のパイロットはほとんど戦死して、早急にパイロットの養成が必要だということで。海兵団ですぐに予備学生の試験がありましたが、大半は飛行科に持っていくという海軍の方針があり、目の悪い者以外は、ほとんどが飛行科に選ばれました。もっとも予備士官の試験に受からなかった人も一部おりましたが。そこで先ほどの第13期が５０００名、私たち第14期３０００名がパイロットとして飛行科予備学生になったわけです。

――飛行科予備学生になられて、海兵団から航空隊へ移動されたのでしょうか？

江名：昭和19年１月31日に海兵団卒業。２月１日に茨城県の土浦海軍航空隊へ入隊。予科練で有名な航空隊です。そこで今度は厳しい士官教育を受けたわけです。

――土浦航空隊では、具体的にどんな教育を受けられたのでしょうか？

江名：まず士官としての「躾」ですね。本職の海兵は３年がかりで士官教育をするわけですが、私たちは２月から５月までの、わずか４カ月で士官に叩き上げられました。非常に厳しい士官教育でした。と同時に飛行科としての

ベーシックな勉強、発動機、通信、飛行機に関する諸々の座学をそこでみっちり叩き込まれました。

――まだ、操縦や偵察などに振り分けられていなかったのですね。

江名：そうです。振り分けは卒業のときでした。飛行科予備学生で、操縦と偵察ともう一つ要務という地上勤務がありました。従来は飛行科の士官が要務の仕事をしていましたけど、それが対応しきれなくなり、海軍で新しく専門職として飛行要務という部門を作って、我々、飛行科予備学生の中の約１０００名の者が地上勤務の飛行要務に回りました。飛行要務は鹿児島海軍航空隊で訓練を受けていました。また、土浦を昭和19年５月に卒業するときに少数が要務へ行きました。後は操縦と偵察に分かれて６月からそれぞれ次の任地に行きました。

――自分の希望の専門職は叶えられるのでしょうか？

江名：一応、希望も出しますけれど操縦技術に適するか、あるいは通信・航法・偵察に適するか、適性を卒業段階で振り分けられます。非常に面白いことに、土浦では易者による鑑定がありました。易者が操縦か偵察か、その判別にかなり関与していました。山本五十六元帥が始めたらしいんですが、実際に我々も易者のところで面接受けましたからね（笑）。何か動物的な勘で判るらしいんですね、どちらが適するかと（笑）。

――江名さんは、希望はどちらでしたか？

江名：操縦でした。はい、やはり憧れですね、パイロットは。

◆実施部隊への配属

――昭和20年３月、いよいよ実施部隊に配属されます。そのときのお話を聞かせて頂きたいと思います。

江名：結局、フィリピンを失い、いよいよこの次は台湾か沖縄か、いずれ本土決戦ということになるということです。もうマリアナ沖海戦から台湾沖航空戦で、新鋭機ならびにベテラン・パイロットのほとんどが消耗してしまいました。昭和19年６月、アメリカがサイパンに進攻してきまして占領すると、日本本土まで３０００㎞くらいです。Ｂ―29が一度で楽に往復して日本本土まで爆撃できる圏内です。

　このままでは日本が危機的な状況に陥るということで、それを防ぐべくマリアナ沖海戦という大きな海軍の作戦があり、そこで日本側が壊滅的な打撃を受けてしまいました。もう記憶は正確じゃないんですが、日本の海軍航空隊が３７３機ほど敵機動部隊へ出撃、そのうち３５０機くらいが撃墜されました。一方、アメリカ軍の飛行機は19機しか撃墜されていません。日本の航空隊はほとんど全滅ですね。日本軍側は航空母艦３隻を沈められました。それを当時、アメリカの兵隊は「マリアナ沖海戦の七面鳥狩り」と言ったそうです。七面鳥は非常に鈍重な鳥ですから、もう下手な鉄砲でも当たるという状態でして、それほど日本軍機が撃ち落されてしまったわけですね。

　アメリカは非常に優れた最先端の電探（レーダー）技術を持っていまして、砲弾にもＶＴ信管という電探が入ったものがありました。飛行機に命中しなくても機体に接近しただけで砲弾が炸裂します。日本軍機はその新兵器によって七面鳥のように撃ち落とされたのです。日本はアメリカにそんな強力な兵器があることを終戦まで知りませんでした。それ以後、アメリカ軍に押しまくられて、私たちの大井海軍航空隊でも、そこから新たに赴任した百里原海軍航空隊でもそうでしたが、老朽機ばかりで稼働可能な実用機が少なくなってしまいました。

　私の行った百里原海軍航空隊は練習航空隊なんですが、急遽、昭和20年３月に実戦部隊に入れられました。それが十航艦です。内地にあったのは、西日本には宇垣纏中将で有名な五航艦、東日本には三航艦がありました。それに十航艦が加わり、沖縄航空戦を戦うことになったのです。

――百里原に到着してからは、九七艦攻（九七式艦上攻撃機）での訓練でしょうか？

江名：はい。百里原空は艦攻隊と艦爆隊の２部隊がありまして、艦爆は２人乗り、艦攻は３人乗りです。それぞれ、艦爆、艦攻の隊に配属されたわけです。

――それまで艦爆か艦攻か分からないのでしょうか？

江名：全然わかりません。

――百里原で初めて実用機に乗られたわけですけれども、初飛行のときの話をお聞かせ下さい。何回か飛行訓練はされたのでしょうか？

江名：私が特攻指名を受けたのが、昭和20年４月10日です。実際の特攻出撃まで約１カ月ありましたが猛訓練をしました。九七艦攻は老朽機とはいえ実戦機ですから、練習機に比べると速力が速く、勝手が違っていて慣れるのに苦労しました。

――３人乗りということで他に２人の搭乗員、当時「ペア」と称していた方達も百里原赴任直後に決まったのでしょうか？

江名：ペアは4月10日、特攻編成になった際に決まりました。

――それまでは日替わり交替みたいな感じでしょうか？

江名：そうです。主に下士官が操縦席に着きまして、私が偵察席でいろいろ訓練をしました。当時、偵察員を訓練するための操縦員を「馬車引き」と呼んでいました（笑）。

――希望していた操縦ではなく、偵察に回されたのですね？

江名：はい。私が行った偵察の航空隊が静岡県の大井ですね、大井海軍航空隊。静岡県牧之原市にありました。今また新しい飛行場ができていますね。偵察の航空隊は徳島にもありました。その2つの練習航空隊が、我々、第14期生が偵察教育を受けた航空隊です。私は大井海軍航空隊で、昭和19年6月から昭和20年3月まで教育を受けたわけです。

――偵察の訓練というと、具体的にはどのような内容なのでしょうか？

昭和19年　大井海軍航空隊の頃

江名：機上での偵察員の必修課目は、まずナヴィゲーターとしての航法、次に爆撃・射撃、それから通信。通信は非常に大きなウェイトを占めていました。次に電探、それに気象・天測。そういったものを機上作業練習機「白菊」に乗りまして訓練を受けるわけです。

――航法にしろ、天測にしろ、一つ一つがものすごく難しいと思うのですが、簡単に習得できるものなのですか？

江名：いや、私もなかなかね、苦労しました（笑）。操縦員もそうだと思うんですけど、地上で自分がやれると思った能力がですね、空中では半分くらいの力しか発揮できないんですね。文字通り「上がっちゃう」んです（笑）。地上で操縦作業ができましても、空中ではその能力をなかなか発揮できないんですね。非常に失敗ばっかりで、なかなか大変でございました。

――昭和19年となると、燃料事情も相当悪くなっていたと思うのですが、そういう飛行訓練は頻繁に出来たのですか？

江名：まさに、その問題でございますけどね。致命的だったのは昭和19年10月の台湾沖航空戦からフィリピンにアメリカ軍が上陸してからですね。南方からの重要軍事物資が途絶えてしまいました。そこでもうね、本土の陸海軍の航空隊の燃料、それから海軍の艦艇の燃料が非常に不足して参りましてね。実戦部隊に優先的にガソリンを供給しまして、練習航空隊はかなり量的に制限を受けまして十分な訓練は受けることができませんでした。

操縦員も偵察員もそうですけど、まず一人前の搭乗員になるには３００時間程度の訓練を受けないと不十分だと言われていたんです。けれど、私共が実戦部隊に行く昭和20年の３月で１００時間も乗ってないんですよ。ですから、本当に何て言いますか、新米の未熟なパイロットですね。もちろん、機材も不足していました。一番の問題は燃料ですけど、十分な訓練を受けることができませんでした。

――やはり、そういうのはご自分としても悔しいですか？

江名：そうですね。教育部隊に入ったのに飛行作業をしないで、その時は座学か何かするわけですけどね。座学だけでは連度が上がりませんから、やはり、もどかしく思いましたね。

――特別攻撃隊、特攻のことは練習航空隊にいる間に、既にご存じだったのですか？

江名：特攻の話はですね、私が大井航空隊で訓練を受けている時に、我々の一期先輩の13期生が実施部隊に転出しておりますから。その人達は台湾沖航空戦やフィリピンの作戦にも参加しております。で、私達はまだ訓練中でございましたので、大井航空隊で不足した燃料の中で、訓練を続けていたということでございますね。

――大井航空隊にいらっしゃった時は、特攻というのはまだ、それ程身近なものではなかったということですか？

江名：身近なものではありませんでしたけど、昭和19年の10月25日でございますか、関大尉が予科練の甲10期生を列機として引き連れて、神風特別攻撃隊の第一号として出撃しました。それが大々的に報道された時には、我々もその覚悟を要請されましたですね。

◆余暇にアメリカ映画を観る

――ちょっと話は変わるんですが、厳しい教育を受けていた頃でも休日とかがあったと思うのですが、何か楽しみというものはありましたか？

江名：海軍では英国式のネービー教育を受けました。敵国と言いながら、海軍が持っている外国の映画、横須賀にあったものを担当の者が持って来て、それを大井空で上映するということで、敵国アメリカの映画を我々は余暇

に鑑賞して楽しみました。

――どんな映画だったか覚えていますか？タイトルとか。

江名：タイトルはですね「コンドル」とかですね、あと何でしたかな……「歴史は夜作られる」はやりましたかね……ちょっとその辺の記憶が定かでありませんが。「風と共に去りぬ」を見せろってだいぶ言いました（笑）。それは実現されませんでしたけどね。フィルムが横須賀にあったことは間違いなかったようですよ。確か、昭和14年位のアメリカ映画ですね。

――かたや「鬼畜米英」と言いながら、アメリカ映画を観て楽しむというのは、ちょっと不思議な感じがします。

江名：いや、我々は「鬼畜米英」というような憎しみの感覚はあまり持っていませんでした。どちらかというと、その頃の学生の多くは西洋文化に憧れて勉強しておりましたでしょ。ですから、そういう文化面ではアメリカとかヨーロッパに対してね、非常に親近感を持っていました。まぁ一般の市民は、ニミッツ、マッカーサーの写真を踏みつけたということがあったようですけど、そういう憎しみは、我々は持っていませんでした。日本人として、戦争の相手国であるアメリカには勝たなくてはならないという認識でした。クレイジーな憎しみは持っておりませんでした。

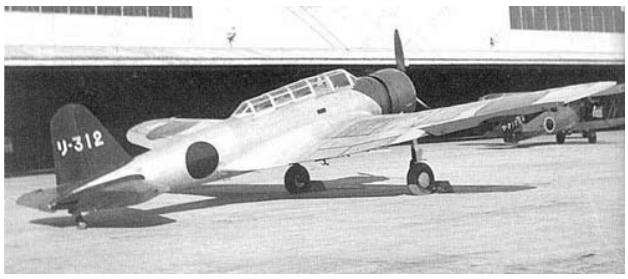
――九七艦攻の場合、３人搭乗されますが、特攻で出撃するのなら全員ではなく、２人か１人が乗って出撃してもいいのではないかと思うことがあるのですが、江名さんは、どうお考えですか？

江名：昭和20年４月10日に、私たちの「正気隊」が編成されました。全部で６機18名ですけど、その中に同期生が６名いたんですよ。それに13期が１人、これは隊長ですけどね。同期生が６名もいたので心強かったし、私の場合はそれで救われましたね。その時、仲間同士の会話でね、後席に乗る電信員のことを話しました。彼らは17歳、18歳なんですよ。予科練の甲の13期、乙の18期ですね。いちばん若いんです。飛行時間は我々と同じ位です。本当に可愛らしい少年なんですよ。どうして海軍は、この子達を殺さなきゃいけないのか。電信員を連れて行かなくてもいいじゃないかと語り合いました。

でも、艦攻の電信員の役割というのはとても重要なんです。九九艦爆でも後席の電信員が乗ってない機があるんですけど、九七艦攻は出撃の時、３人乗るんです。それはね、自分の機の最期を電信で基地に知らせるためなんです。自分の戦果は自分の機が打電するんです。もう、護衛戦闘機がつかないんですよ。それ程、日本軍は追い詰められてもう負け戦なんですね。だから、電信員が乗ってる飛行機だけは、自分の飛行機の、自分の戦果を送れるわけです。だけど、九九艦爆の特攻機になりますとね、大半が隊長機だけに電信員が乗って、列機の２機は操縦員だけで電信員が乗っていないんです。その方を評価する人もいるんですね。もう必要ないんじゃないかと。

ただね、電信員っていうのは、九九艦爆の場合、ナヴィゲーターも兼ねているんですね。だから、隊長機が落とされると目的地に行けなくなる。九九艦爆の場合、後席の搭乗員はナヴィゲーターと通信、両方やる訳ですよ。艦攻の場合は、真ん中の者がナヴィゲーター、後席が電信です。だから、自分の飛行機が敵機に襲撃されたら襲撃されたという電報を打ちますし、突入する時は、何の艦に突入すると電信を打ちます。実際に、そのとおりの戦果が上がったかどうかは別として、最期の電信が基地に入るわけですね。だから、３人乗せるということは、それだけの戦果を伝えることができるというメリットがあるわけですね。戦闘機には最初から電信員なんかいないでしょ。だから、その飛行機の戦果が判りませんし、九九艦爆の場合でも、隊長機が落とされちゃいますと、もう、隊長機以外は電信を打てないわけです。だから、可哀想と思いましたけど、やっぱり電信員が乗るということは、それだけのメリットがあるということです。それに機銃も電信員が撃ちますからね。七・七㎜の機銃で応戦しますから。

――操縦員、偵察員、電信員の中でいちばん偉いというか、機長はどなたがなるのですか？



百里原空所属の九七式一号艦上攻撃機

江名：それはね、ペア編成の時に最先任の者が機長になるんです。ですから、私より先任の者が操縦すれば、操縦が指揮官になります。ただ、ナヴィゲーターは私ですからね。その場合でも私が色々指示する訳ですけども、機長というのは最先任の者がなります。

それで、面白いんですよ。我々、２０００名いますでしょ、14期予備学生が。全員ナンバーが付いているんです。成績のナンバーですね。どうやって付けたか知りませんけどね。１番でも上の者は機長なんです。海兵でもその先任順がありますから、先任の者がやはり海軍省とか軍令部に行きまして、そうでない者が実戦部隊に行くという傾向がありました。成績の良い者が必ずしも優秀だったかどうかは、戦後、軍令部とか海軍省がいろいろ批判されていますけどね。海兵のハンモック・ナンバーが海軍を滅ぼしたと極論する者もいます。でも実際、成績の優秀なのが、みんな大本営に行っていますからね。海軍は、そういう先任を決めるルールがありました。

――部下になったのは予科練出身の方たちですが、江名さんは予備学生出身ということで、その違いを感じられたことはありますか？

江名：潔いですよ、予科練の人達は！中学３、４年生で海軍に入ってきます。あるいは昔の高等小学校から入ってきてますでしょ。酷いしごきに耐えて軍人精神が入っておりました。私達はね、こんな若いみそらで可哀想だと思っていましたけど、逆に私の方が気を緩めてると「分隊士、頑張りましょう！」と、背中を押される位でした。勇ましいんです。潔いです。我々は「娑婆っ気」がありますからね。やっぱり未練は沢山ありました。彼らは青春を味わっていないんですよ。青春を味わった人間と味わわない人間は潔さが違うと思いました。

――そういう純粋さに押されて、勇気づけられたことも？

江名：そうです、そうなんですよ（笑）。私なんかやっぱり特攻を指名された時、顔が引き攣っておりました。

――江名さんの階級なんですが、航空隊では士官として扱われたのですか？

江名：そうですね。予備士官っていうのは海兵の候補生の下なんです。それで兵隊から上がってきた兵曹長の上。そういうステイタスです。まあ、士官としての待遇は受けている訳です。

――当時の戦記に、兵隊から叩き上げの下士官や士官達に虐められたというか、厳しく当たられたと書かれたものがありますが？

江名：そういう方は「特務士官」と言います。特務士官にひがまれた、ということですか？

――そうです。

江名：それよりもね、やはり海兵の人達に虐められたですね。江田島で３年かかって猛訓練を受けた本職から見て、たった３カ月ですぐに士官になるわけでしょ。ですからね、海軍精神が入ってないと、かなり徹底的に痛め付けられましたね。私はあまりね、そういう恨み辛みはないんですけど、13期、14期予備学生の中には今でも海兵を「嫌だ！」っていう男がおります。

――出撃して敵艦を発見したら、空母なら空母と見定める必要があると思うのですが、敵艦を発見する訓練は、特別にされたのですか？

江名：それはね、今だったらちょっとお笑いでございますけどね。艦の模型を作りまして、それで遠くから見させましてね、戦艦だとかね、空母とか駆逐艦とかを当てるわけですよ。その点は粗末な訓練です（笑）。私は敵艦まで行き着かなかったから分かりませんけど、ピケットラインってあるんです。沖縄周辺に駆逐艦がピケットラインを張ってですね、戦艦や空母がいる所に寄せ付けないように、そこで食い止めるために駆逐艦を配置しているんです。それを見て「戦艦発見」というような電信が打たれることもあったようです。初めて実際の艦を見て、駆逐艦が戦艦に見えたり、巡洋艦に見えるっていうのは、私は当然だと思います。

◆神風特別攻撃隊「正気隊」編成

――大井から百里原に移る時は、もう特攻は決まっていたわけですか？

江名：ええ。もう特攻作戦でしか戦果を上げる事が難しいという判断が大本営にもありました。大井から我々50名が百里原海軍航空隊に昭和20年３月17日に赴任したんですけど、百里原を出る時にはもう特攻要員だということを

百里原基地にて神風特別攻撃隊「正気隊」
最後列右端が江名少尉

我々も告げられておりましたし、百里原に赴任しましたら、百里空の司令から「お前達は特攻要員で来たんだぞ」と宣告されましたんでね。それなりの覚悟をさせられましたですね。

――赴任されるまで、特に悩んだとか動揺したということはなかったですか？

江名：そうですね……。

――同期の方と一緒に、そのことについて話したとか？

江名：選ばれた者はね、誇りっていうものがあるんですね。それで、選ばれたくないという気持ちもある訳ですよね。しかし、もう選ばれたということで、やはりそれは自分で割り切ると、内心の苦悩を選ばれた誇りで克服しました。選ばれなかった者は我々は後から行きますと。

――全員が特攻基地に送られた訳でなくて、まだ残った方もいらっしゃったのですね。

江名：ええ。第一陣は3割くらい出た訳ですかね。

――江名さんは、第一陣。

江名：はい。それで、二陣・三陣とどんどん出て行きました。第1次特攻要員に洩れた14期生も、1カ月後にはほとんどの者が各地の特攻基地に転出していきました。

――江名さんが特攻基地に行ったのは昭和20年の何月でしたか？

江名：私は4月20日に百里原から串良へ参りました。

――自分が出撃する番になると、気持ちも変わったりするものですか？

江名：気持ちが変わるっていいますかね。もちろん、個人で色々違うでしょうが。4月10日に飛行作業から飛行場へ戻ってくると、指揮所っていう所がありまして、そこへ必ず指揮官がいますから、行く時も戻ってきた時も報告するわけです。そこにボード、黒板があるんです。その日の飛行作業の順番なんかが書いてありまして、飛行作業が終わりますと、そこへ行って自分で消すんです、飛行作業が終わった後に。

　そのボードに第3次の特攻隊の編成表が書いてあったんですよ。それで私の戦友に「君の名前が載っているぞ、おめでとう」って言われました。私は、血の気の引く思いがしましたね。やはり本能的なものがね、その瞬間に出てくるんですね。生に対する本能を抑えるのが……人によって色々あると思いますけど、私は苦労しました。

――特攻隊への指名というのは、突然のような形で発表されるんですか？

江名：ええ、私たち九七艦攻「正気隊」の場合はそうでした。

――そのボードに一緒に出撃するペアの名前もあるわけですね？

江名：そうです。それでペアが初めて組まれました。翌日から特攻訓練を始めるわけです。

――特攻隊で出撃するペアというのは特別と言ったら変ですけども、顔合わせした時にはやはり、どんな人なんだろうと。

江名：そうですね（笑）。普通の実施部隊でしたらそういうペアは、かなり長期間一緒に乗ってるわけですね。だから人間関係ができるわけです。我々は短時間で人間関係を作らなければいけませんから、意思疎通を急ぎました。

――指名されてから出撃するまでは、1週間とか訓練期間が決められていたのですか？

江名：いや、それは、鹿児島にある宇垣長官の五航艦に進出するまでです。宇垣さんのところで、いつ出せって命令が出るんですね。そんなに期間は長くないです。私の場合は、4月10日に指名されて、百里原から串良に行く4月20日までの10日間でした。

――特攻の訓練というと、具体的にどんなことをするのですか？

江名：それまでの通常訓練とさほど違わないんですけどね。航法は海上に出ましてね、自分でコースを決めてそのコースの中を飛んで、自分の航法の腕前を磨きます。例えば私の場合、水戸の大洗を基点にして、三角形に太平洋に出て帰ってくるわけですけれどね。なかなかドンピシャと大洗に着けないんです、チャート通りには。そうすると、操縦員がニヤッと笑って「だいぶ外れましたな」なんて言われちゃいましてね（笑）。

　また、爆弾を抱えて体当たりするわけですから、突っ込む訓練です。それから夜間出撃もありますから夜間の訓練です。これは非常に危険な飛行訓練です。全くやったことのない訓練でした。とにかく、その間は優先的に特攻機にガソリンをくれますからね。激しい猛訓練をさせられました。

――爆弾を積んで突っ込むのですか。

江名：ええ、艦攻特攻の場合、８００kgの爆弾を積みます。爆弾を積んで訓練はしませんでした。８００kgの爆弾は出撃する時、初めて積みました。

――それまでは、錘みたいなダミーを？

江名：何もつけません。つけないでやりました。

――百里原空では特攻指令が続いて、戦友が次々と特攻基地に出撃したのですか？

江名：私は4月10日に指名されたんで

すが、九七艦攻の第3次特攻なんです。それまでに1次、2次があったわけです。私達が百里原空に赴任して、1週間足らずで1次、それから4月の始めに2次、それで10日に3次ですね。3次で九七艦攻の五航艦作戦というか、沖縄作戦は終わりました。だから私達の3次が最後なんです、百里原空では。私の同期生2名が赴任して1週間足らずで1次に指名されました。その2人は4月12日に特攻戦死しました。

――見送るものも辛いものでしたか？

江名：そうですね。第1次の酒巻一夫君、川野博章君……。大井で私と同じ班だった川野君は明大のマンドリン部で音楽が好きでした。またアメリカ映画も詳しい男でした。彼は4月12日に串良から出撃して特攻戦死したんですけど。百里原から進発の日、彼は非常に朗らかな陽気な男で、自分の悲壮感っていうものを全然外に表さないで機上の人になりました。

昭和7年のアメリカ映画に「ラ・モーナ」という歌があるんです。「ラ・モーナ～」って始まる曲なんですけどね。その時、彼はその歌を口ずさみながら機上の人になりました。内心はやはり悩んでたはずなんですけどね。そういった心の中の葛藤を全然見せないで飛び立った彼のことが、今までも心に残っています。

◆特攻基地・串良へ

――4月20日にいよいよ串良に移動されますね。当然、飛行機で移動されたわけですが、特にトラブルもなく無事に串良に着かれたのですか？

江名：ええ、そうです。朝、百里原を離陸しましてね。6機でまず編隊を組んで。まあ、100時間も乗ってないような操縦員、偵察員が乗っている訳でしょ。6機編隊を組んでそこでバンクを振って百里原基地を出ませんと、我々の練度が笑われますんでね。編隊だけはとにかく組もうということで編隊訓練もだいぶしましたので、うまく編隊を組めました。見送りの人の帽振れの中、バンクを振って串良基地に向かったわけです。

昭和20年４月　串良基地へ出撃前

昭和20年４月　串良基地へ出撃前

――串良までは、飛行機でどれくらい時間がかかったんですか？

江名：途中、名古屋航空隊に寄りまして、そこで四国・九州に空襲があるかどうか状況を確かめ、燃料を補給して、それから串良基地へたどり着きました。着いた時は夕方になっておりました。途中、東京の上空を通ったら、上から焼け野原が見えました。これは大変な事だと思いましたね。そうしましたら、今度は横浜でしょ。それから名古屋、大阪、神戸と、みんなその上空から見ますと焼け野原なんですね。いよいよ日本は追い詰められたなという思いに駆られましたよね。

それで伊豆の山を越え、駿河湾の所に出たわけですけど、その日は雲が垂れ込めておりました。飛行機がガブるっていうんですか、揺れるんですね。伊豆半島を越えて雲上を飛んでいたら右手に富士山が見えたんです。富士山は大井海軍航空隊の時、訓練で毎日眺めておりました。その富士山を見て、厳かな気持ちで国のために殉ずる覚悟をしました。私の戦友で特攻隊で亡くなった、百里原から出た戦友が作った歌があるんです。当時、我々、学生は万葉集とか古今集とかいろいろ読んでいましたから、和歌を詠む者が多かったです。

亡くなった戦友は、〝伊豆の群山（むらやま）越え往けば、神かも山かも富士が迫れり〟と詠みました。霊峰・富士山は、この国を守るには自分が犠牲になる事も止むを得ないという気持ちにさせました。名古屋へ着きまして、四国・九州の方面に今、空襲がないから大丈夫だということを確認して、それから串良に飛びましたけど、私はそれまで2時間以上飛んだことないんですよ。ほとんどの人もそうなんですよね。それが丸一日飛んだわけでしょ。それも編隊を組んでますからね。私は疲労困憊しましたね。串良基地は毎日の空襲で穴だらけで、第一線の殺気立った飛行場に降り立ったわけです。だから、いよいよ戦場に来たという思いがしましたね。

◆第1回目の出撃

――1回目の出撃となった4月28日のことを教えてください。

江名：艦攻特攻というのは宇佐空と姫路空、それから百里原空の3隊で九七艦攻特攻隊が編成されたんですね。宇佐空と姫路空は五航艦で地元なんです。地元ですから、特攻隊員は串良に

たむろしてたんです。その中から出撃の前日に指名されます。特攻隊員として指名されて串良に来て、串良で明日の特攻を指名されるわけですね。外様の百里原空の６機は次の作戦になると、全機出撃で必ず出される覚悟はしてるんですけど、宇佐空と姫路空の人達は前夜に決まるわけです。

前夜、翌日の作戦会議があります。翌28日は薄暮攻撃で昼間に発進することになりました。宇佐空、姫路空、百里原空の順で、我々、百里原空はいちばん最後でした。それで、いよいよ宇佐空と姫路空が発進して、百里原空の番になったわけです。一蓮托生を誓った６機でしたが、飛び立とうとしたところ、１番機・故障、２番機・故障、３番機が飛び立ち、４番機・故障、５番機、６番機と。だから３番機と５番機、６番機だけが離陸できたんです。

なぜ、そういうことになったかと言いますとね、初めて８００kgの爆弾を着けたんですね。それで、エンジンをふかしましたが、百里原から長距離、串良まで飛んだ私達の老朽機は、飛行機の点火栓の汚れ、ピストンの磨耗、ガソリンタンク・油圧タンクの漏洩などがあったり、また電気系統が故障するとか、百里原空の九七艦攻の老朽化がそこで露呈されました。爆弾を積んで飛び立てないんです。

私は６番機だったんです。３番機と５番機と６番機だけが28日に離陸できたわけです。３番機、５番機は先に行き、ほとんど単機飛行になりました。単機で開聞岳を過ぎましたら、エンジントラブルが起きました。油漏れ。パッキングがちょっと悪かったんでしょう。油漏れで操縦席が真っ黒になりましてね。８００kg爆弾は８００m以上ないと落とせないんですね。高度が低いと自爆します。やむを得ず爆弾を抱いたまま、最寄りの知覧の基地に不時着しました。知覧の飛行隊長から、だいぶ叱られましたけどね（笑）。爆弾積んで降りたもんですからね。だから28日は、百里原空は６機列線にいて３機しか飛び立てず、そのうち私１機が知覧に不時着して、２機しか突入できませんでした。私の機の操縦員は特乙一期の梅本満二飛曹、電信は甲13期の前田長明二飛曹でした。

――特攻隊の名前は？

江名：「正気隊」です。その28日に突入した２機は「第一正気隊」という名前がつきました。

――エンジントラブルは操縦員から報告があったのですか？

江名：操縦席が見えますからね。伝声管で報告がありましたし、エンジン故障は後席でもわかります。

――江名さんの命令で知覧に行くと。

江名：ええ。とっさの判断ですが、基地まで帰れないと思い、知覧へ緊急着陸したわけです。

――エンジントラブルの九七艦攻は、その後、どうなったんですか？

江名：翌日、整備員が機上作業練習機「白菊」に乗って知覧に来ました。そこで整備をして後日、串良へ持って帰ったと思います。その飛行機は特攻攻撃には使用できないということで、私は飛行機がなくなったわけです。で、おそらく、その飛行機は持って帰って、良い部品だけを他の飛行機に使ったんじゃないかと思いますけどね。

――知覧から「白菊」に乗って串良基地に戻られたのですか？

江名：ええ、「白菊」で串良に戻りました。

――報告した後は、また特攻待機に？

江名：海軍は陸軍と違って……陸軍には「振武寮」というようなものがありましたでしょ。なぜ、ああいう問題が起きましたかと言いますとね、菅原道大中将の六航軍は福岡にあって、知覧とか万世の特攻機の実情を把握できなかったのではないかと思いますね。

海軍は宇垣中将が鹿屋におりまして、串良、第一国分、第二国分、指宿、出水、笠之原など特攻基地がたくさんありますけど、実情を把握しておりました。優秀な整備関係の士官もおりまして、飛行機の故障は整備が全部チェックします。だから、原因がすぐ判る訳ですね。ですから、次の機会を待てという事で。

多くの飛行機が不時着して帰って来ましても次の出撃まで待機という事で、陸軍のようなトラブルはありませんでした。私の場合も、知覧で飛行機を点検され、隊長から次の機会を待てと言われただけです。ただ、一度特攻になりますと、特攻から逃れることはできません。次の出撃までは待機ということですね。

――では、他の２人のペアも同じ状況で？

江名：替わらないです。

――その時出撃しなかった他の人達も一緒に待機するのですか？

江名：そうです。飛行機を失った私を除いた戦友は、次の菊水五号作戦で５月４日に全員、出撃してるんです。ただ５月４日の時も、結局２機しか突入しませんでした。後の２機はエンジン故障で戻って来たり、飛び立てませんでした。だんだん稼働率が悪くなってきているんですね。

――そうすると、２回３回と戻って来

る方も多かったということですか？

江名：九七艦攻の場合、多いですね。私達の百里原だけでなく、その頃になりますと、姫路空も宇佐空も戻ってきたり、出撃できませんでした。それだけ特攻使用に耐える飛行機が少なくなってきたという事でしょうね。

◆第２回目の出撃

――新しい機材をもらって再び出撃されるのは、いつ頃になるんですか？

江名：５月11日の菊水六号作戦。串良基地の私達は九三一空の指揮下にありました。本来は海上護衛の部隊ですが、そこに雷撃隊がおりまして、当時は夜間雷撃が主任務でした。機種は「天山」とか九七艦攻三号機でした。その部隊から九七艦攻一号機をもらい、５月11日に私が出撃したわけです。

――その５月11日の出撃の時も、やはり前日に発表されたのですか？

江名：前日です。５月11日は、百里原空の残存機は３機なんです。姫路空が３機で、宇佐空が１機。可動機は最後の７機なんです。

――また「正気隊」の名前が付けられて？

江名：５月４日が「第二正気隊」です。次の11日は３回目でしょ。だから「第三正気隊」です。残った３機と姫路空３機、宇佐空１機、計７機が11日の朝５時黎明に出撃しました。

――最初の出撃と２回目の出撃では、心境的に何か違ったことはなかったですか？

江名：やはり、再出撃が長引けば長引くほど辛いですね。心の苦悩が深まります。私の場合、２回目の方が苦しいですね。もう一度、気持ちの整理をしなきゃいけませんしね。前の晩は、ほとんど寝られませんでしたものね。

――ペアだったお２人の方は？

江名：２人の下士官は宿舎が違いましたので分かりません。残った一緒の士官は３名でしたけどね。寝返りばかり打ってました。まんじりともしないで寝られなかったと思います。

――では、５月11日の出撃の様子を、お聞かせ願えればと思います。

江名：５月11日は九七艦攻特攻の最悪の日でした。後で知りましたが、７機飛び立ちましたが、百里原空の１機、私の戦友で操縦の小田切君が乗った飛行機１機だけが突っ込みました。後の６機は不時着。私は黒島の海上ですけど、種子島に２機不時着、他は離陸してすぐエンジン不調で戻ったということで、７機のうち１機しか戦果が上がらなかったんです。

これも後で知りましたけど、その日をもって、九七艦攻特攻が解隊しました。もう九七艦攻特攻は作戦に使えないという判断を九三一空がしたんですね。４月の６日、12日あたりまでは稼働率も良かったんですけど、それ以後、非常に故障機が多発しまして、老朽機は特攻機に使えないという判断を五航艦もしたのだと思います。

――江名さんの飛行機がトラブルにみまわれたのは、しばらく飛行した後ですか？

江名：ええ。ちょうど半ば近くまでいったところでエンジンが息をつき始め、操縦員が「エンジン不調、どうするか」と叫んだので、私は「もうしばらく飛ぼう」と言いました。後席の電信員が記録をとっていましたが、八十番（８００kg爆弾）を抱いた機はどんどん高度が落ちてきました。このまま行ったら海没するので、８００kg爆弾を投下しました。安全高度は１００kg・１００mなんです。８００kgですから８００mの高度が必要でしたが、エンジン不調で高度がとれないんで、やむなく７００mで落としました。爆風で持ち上げられましたけど、機体の損傷は幸いありませんでした。それで１８０度変針しましてね、帰投するため北へ向かったわけです。そしてようやく黒島まで辿り着くことができたわけです。

――最初から黒島を目指したんですか？

江名：ちょうど飛行ルートでしたからね。１８０度変針すれば黒島へたどり着くことは判っていました。黒島の上空を飛んでますからね。東の方に振れば、トカラ列島があるんですけど、目で確認してませんでしょう。だから、黒島、硫黄島、竹島とありますから、どこまで飛べるかということで北へ向かったわけですけど、機は黒島の上空で力尽き海上に不時着しました。

――不時着と言っても、そう簡単に上手くいくものではないのでしょうね。

江名：私の操縦員が特乙一期生で、あまり飛行時間はないんですけど操縦は上手でした。４月28日、８００kgの爆弾を抱えたまま知覧にスムーズに着陸しましたからね。今回も、黒島の沖合い１千mのところに尻から着水しました。機体は１分くらい浮いていて、その間に３人は脱出しました。時化の海上に上手く不時着したんです。彼の腕は凄いなと思いましたね。

――３人とも無事に救助されたんですね？

江名：ええ、そうです。その時はですね、不時着する時には脱出のため、風防を留めて開けとくんです。それを私

が指示しましてね。固く風防をロックしとけということで着水したんですけど、やはり操縦員の方はですね、操縦に専念したから、それを甘くしてたんでしょうね。ペタッと風防が閉まっちゃったんです、着水のショックで。

電信員の方は電信機に顔をぶつけ、鼻血が出てるんですよね。顔が血だらけなんですよ。電信員は最後に電信を打たなきゃなりませんし、暗号書を始末しなければいけませんでしょ。錘を付けて浮き上がらないようにする作業もありましたので、着水の時にまだ作業中だったんですね。電信機にぶつけまして血だらけなんです。

それで、操縦席が閉まっているので、私はすぐ操縦席の上に跨りまして、操縦員は中から一所懸命、風防を開けようとしてました。幸いちょっとした隙間が開き、上と下からこじ開けて15センチくらい開いたんですよね。かなり大きな男なんですけど、そこから出てきましたからね（笑）上手く脱出できまして、浮いている時間は1分足らずなんですよ。それで3人は飛行機の翼の上に立って、イチ・ニ・サンで飛び込みました。1分間でそれができましたんでね。まだ私達、若かったんでしょうねぇ（笑）。

◆特攻用機材の実態

――ある陸軍パイロットの方が、特攻隊にまわされる機材というのは老朽機か壊れてもいいような飛行機ばかりまわされたから途中で不時着したり、落ちたりした人が相当いたんじゃないかと仰っていましたが、やはり、そういうことはありましたか？

江名：海軍の場合、特攻の主力の十航艦はもともと練習航空隊で、飛行機そのものが老朽化した訓練用の飛行機でした。私達が乗った一号機は支那事変で使っていた飛行機ですからね。ハワイの時に使った九七艦攻は三号機なんです。三号機は馬力が1千馬力以上ありますが、一号機は７５０馬力しかないんです。その一号機に８００kgの爆弾では加荷重なんですね。

だけど百里原の場合、第1次の「常盤忠華隊」は6機全部突入しました。2次の「皇花隊」は6機のうち4機突入しました。飛行機の老朽化っていうものは、あれです。優秀な飛行機ほど、最初に持ってってるわけですよね。だから我々の正気隊は、第1回の出撃の時は2機しか突入できませんでした。宇佐とか姫路の航空隊も同じ状況で、機体の劣化から離陸ができなかったり、不時着が多くなるようになりました。

――もう10年くらい前になるんですけど、私、串良基地に行ったことがあります。

江名：ああ！そうですか！

――長い一直線の道路があって、そこが昔の滑走路跡だと教えてもらいましたけど、今も当時とあまり変わらないという感じですか？

江名：そうですね。鹿屋は今、海上自衛隊の基地で滑走路はもちろん拡張しましたが、昔の基地の跡が残っています。第二国分は今の鹿児島空港ですけど面影は全くありません。串良の場合は、東西と南北の自動車道路が昔の滑走路です。私は毎年10月15日に串良の慰霊祭に行きますが、桜並木の道路に立ちますと当時のことを思い出します。

――近くにある地下通信室も入らせてもらいましたし、洞窟というか壕というか、そこにパイロットの人達が泊まっていたと聞いて、こんな所に寝泊りしていたんだなあと思って。

江名：結局、毎日のように空襲がありますでしょ。宿舎は危険で横穴に寝泊りするようになったんですね。私の時はまだね、夜間はあまり空襲なかったから、士官宿舎、ほんとバラックみたいな士官宿舎ですけど、そこに泊まっておりましたけどね。そこも、私が出撃した後、焼けてしまったようですけどね。爆撃で。

◆黒島での生活

――黒島に不時着して、原隊に連絡しなければならないと思うのですが、そういう手段はあったのですか？

江名：軍隊もいませんし、警察もいません。ラジオもありません。何にもないんですよ。そういう島でしたからね。島民は５００名で食料も窮乏していました。

――とりあえずそこに、じっとしているしかないと。

江名：毎朝10時頃になりますと、米軍機の大編隊が何百機と黒島の上空を掠めましてね、九州地区を爆撃に行くんです。それで、4、5時間たちますと、その大編隊がまた返ってきて、黒島上空で編隊を組み直していくんです。

日本の特攻のルートも三つほどあり、トカラ列島の列島線を通っていく、これは一番デンジャラスなんですね。敵の邀撃機が待ち構えておりました。そこで東か西へコースを振るんですよね。陸軍の知覧・万世は、みんな黒島の上を通っているんです。海軍でも、串良と指宿海軍航空隊が黒島経由で沖縄に向かいました。

やっぱりナヴィゲーターがいないと、海上を通って行きますでしょ。陸軍の場合、だから誘導機がいましてね。それで連れて行くわけですけど。そうしますと比較的、敵の邀撃機にぶつかることが少ないであろうということで、そのコースを選んでるんですけど。まあ、向こうは電探が優れていますからね、どっちに飛んでも見つけられたと思うんですけどね。

――そうすると、B―29が飛んできたり、特攻隊が通過したりと。

江名：B―29は飛んできませんけど、グラマンとかシコルスキーの戦闘機ですね。それに艦爆、艦攻、それから重爆の大編隊が毎日のように来るわけです。その時、イタズラして黒島に機銃掃射していく戦闘機がありました。黒島の住民は、昼間は何もできませんでした。黒島も戦場だったんですよ。

――黒島ではどんな生活だったんですか？

江名：私達の前に、陸軍の柴田少尉という方が不時着していました。柴田さんは4月13日に不時着して火傷で瀕死の重傷を負っていたんです。柴田さんは先任ですからね。打ち合わせをして、とにかく島の防衛をしろと。俺は動けないから島の防衛は頼むと言われました。敵の飛行機が見えたら、必ず身を隠すとかですね。敵が上陸してきたらどうするかという問題を部落の長老を交えて打ち合わせしました。山にとにかく住民は隠れるということで。その場合に、先任の柴田少尉は、軍人と一般人と一緒にいた方が良いか、それを君、考えろと。一緒にいると、迷惑かけるんじゃないかということもあるわけなんです。だから、軍人と一般人は一緒にいない方が良いのではないかということになりました。

――江名さんのペア、部下にはどんな指示を出していたのですか？

江名：敵機が来た場合はね、とにかく避難するとか、身を隠せとか。部落が2つあるんです。そっちの部落に桜井兵曹と前田兵曹を行かせて防衛に当たらせました。空襲のない時は、2人は農作業を手伝いました。食料がないでしょ。だから芋を植えたり、それから山へ行ってカズラの根をとって、それを天ぷらにして食べてましたけどね。そういう食料増産のために手伝ったり、海に行って夜釣りして魚を釣ってきたり。昼間は釣れないんです。危ないから。そういった事を、部下達はやっていました。私はやらなかったです。柴田さんの看護もありましたしね。側にいると、彼も非常に気強いんでしょうね。それでまた彼は、いろいろ私に指示をしましてね、だから非常にそういう点では上手くいきましたし、島民の方にも喜ばれたと思います。

◆陸軍小型潜航輸送艇現る

――そうしている内に陸軍の小型輸送艇というか、いわゆる陸軍の潜水艦が浮き上がってきたのですか？

江名：6月12日に陸軍の特攻機が一機、特操二期の、柴田さんの一つ後輩の中村憲太郎さんという方ですけどね。その方が九七戦で黒島の片泊に不時着しました。これで黒島には私と陸軍の柴田、安倍、中村の4機落ちたんですね。また、黒島付近の海に海没した特攻隊員も落ちていたと思います。

7月17日の早朝、いつも朝ね、私は海岸が見える断崖のような切り立ったとこから海を眺めましてね。船が通らないか見るわけですけど、通らないんですよ。というのは、海中にはアメリカの潜水艦がいるわけです。通れば沈められちゃうでしょ。だから、日本の船は全然通らないんですよ。そうしましたらね、17日の朝5時ごろですかね、北の方からウェーキ（航跡）を立てて、私の住んでる黒島の大里めがけて船が近づいてきました。それでもう、いよいよ敵船が上陸かと村中大騒ぎとなりました。島民はみんな山へ逃げました。

柴田さんに避難を勧めたところ「俺は動かない」と。彼はそこで自決するつもりだったんですね。柴田さんがそう言いますから、私も柴田さんの家の側でずっと見張ってたんですけどね。船は小型艦で砲身を島に向けていました。しばらく睨みあっていましたらね、小型艦から日章旗をパッと出したんです。艦から手旗で艀を出せっていう信号がありました。

陸軍小型潜航輸送艇（マルユ）

私は区長と一緒に艀で艦に行きましたらね、マルユの10号艇という陸軍の暁部隊の輸送潜航艇なんです。松岡中尉という艇長がいましてね、お聞きしましたら、これから沖縄作戦に行くので夜まで半舷上陸したいという要望でした。区長は「是非、上がって下さい。食料は乏しいので持参をお願いします」と言われ、それで松岡艇長と10数人が上がってきました。そこで洗濯したり、風呂へ入ったりしてました。

その時に、沖縄が陥ちたことを知らされました。いよいよ本土決戦になると。この島も戦場になる日が近いと覚悟しました。その時、艇長に、帰りに寄れたら柴田さんだけでも内地の病院に入れて上げてくださいと頼みました。艇長は、これから沖縄へ行くので約束はできないという返事でしたが、帰れたら寄りましょうと、船にあった医薬品とか食料を柴田さんに少し置いていきましてね。その夜、出航して行きました。8月の半ば過ぎにならないと帰れないとも言われました。

そうしましたら7月30日早朝、同じ船が黒島に向かって来ました。ああ、これはこの前の艇だという事で安心して、すぐ伝馬船を出して行きましたら、作戦が終わって無事に帰って来れた、ついては船のスペースがあるから、ここにいる搭乗員全員を救出すると。片泊にいた中村憲太郎さんにすぐ連絡しました。柴田さんは担架に乗せて5人艇に乗って、暁部隊の基地である長崎県の口之津へ上陸しました。その時は複雑な思いだったですね、島民に対して。これから戦場になるというその島に、島民を残して逃げて行くようで、それまで受けた恩がありますでしょ。非常に辛かったですけどね。

帰ったら本土決戦があることは分かっていても、内地に帰れるという嬉しさが出ちゃうんですよね。7月30日に島を離れましたけど、後で聞きましたら、島民はその日から、みんな山ごもりしたといいますね。黒島が終戦を知ったのは昭和20年11月なんです。というのは終戦になっても内地から船は来ないでしょ。11月に初めて復員兵を乗せた船が黒島に帰ってきて知ったんですね。艀でみんな迎えに行ったんですけど、復員兵がたくさん乗って帰ってきたので日本が勝ったと思って、みんな万歳したそうですよ。そしたら、敗戦を告げられたということでね。だから、黒島の住民が敗戦を告げられたのは11月なんです。

――陸軍の「マルユ」という潜水艦に乗られたという事なんですけど、「マルユ」自体が珍しいもので、それに乗った経験のある方は多くないと思います。乗員は全員、陸軍の軍人さんばかりなんですか？

江名：そうですよ。

――海軍軍人だった江名さんとしては、不思議な感じではなかったですか？

江名：マルユ10号艇の方が歌う軍歌は海軍の歌でした。船乗りですから、そうでしょうね。

――どんな歌を？

江名：何だったかなぁ（笑）。ちょっと今、思い出せませんけどね。海軍の軍歌を歌っていたのは確かです。

――操艦も全く問題ありませんでした？

江名：小さい艇でしたからね。私も潜水艦なんて初めて乗りました。飛行機がガブるのは、ある程度慣れていましたが……「ガブる」とは風でもって揺れるやつですね。マルユ艇は夜間、水上を走ります。昼間は敵の空襲に遭いますから潜るんですね。時化た海上を小さい船が走るもんですからね、艇のローリング、ピッチングで七転八倒しました。

潜水艦に乗り込みましたらね、黒島よりはるかに美味しいものを出してくれたんです。缶詰ですけどね、ムシャムシャって食べたんですけど。まあ、汚い話ですけど、全部戻しちゃいました。もう苦しいんです。海軍に入って、潜水艦だけは乗らなくて良かったと思いましたけどね（笑）。狭い艇の蚕棚部屋みたいなところに寝かされました。本当に辛い思いをしました。

――何日くらい、マルユに乗っていたんですか？

江名：7月30日に艇に乗り、8月1日に口之津に入ったので2日間ですかね。甑島に寄りましたけど、それまでは船内を出られませんでした。

――部下の方も含めて、みんな船酔い状態だったんですね。

江名：みんなそうでした。あれですね、海軍もだらしなかったです（笑）。陸軍の中村さんも七転八倒してました。もうね「こんなんなら帰ってこなくてもいい」なんて言ってましたけど（笑）。時化のすごさを思い知らされました。

――そして、島原半島の口之津へ。

江名：長崎県の口之津に暁部隊の基地がありまして、そこへ入港しました。着きましたら暁部隊が歓迎してくれまして、寮が雲仙にあるから船酔いを治しなさいと1泊させてもらいました。柴田さんは、そのまま大分の陸軍病院へ直行しました。中村少尉は福岡に行くので、雲仙で翌朝別れました。久しぶりにご馳走を頂きました。

――その後は３人一緒で行動されたのですか？

江名：３人でずっと百里原まで一緒の行動です。もうとにかくね、どこに行って良いか判りませんでしょ。だから翌日は佐世保鎮守府に行きまして報告したんです。そしたら、五航艦の司令部が今、大分に移っているので大分に行けと言われました。空襲の最中、列車に乗りましてね、大分まで行ったんです。そしたら、大分市は１週間くらい前に大空襲に遭いましてね、ほとんど壊滅状態でしたね。それで基地に行って五航艦の司令部に行きまして、特攻の顛末を報告しました。

――その後は百里原に戻れということに？

江名：ええ。そこで「お前の九七艦攻特攻は５月11日をもって解隊した。それぞれ皆、原隊に帰っている。だから、お前もすぐ原隊へ帰れ」と。それで「あ！お前達は二階級特進になってるぞ」って言われましてね（笑）。すぐこの世に戻りまして、江名「大尉」から江名「少尉」に落ちまして（笑）。それから原隊の百里原に向かったわけですけれども、８月７日に広島の街を歩きました。一発の爆弾で10万人の都市が消えたのをこの目で見て、戦争は人類に対する最大の罪悪と思い知らされました。

◆終戦から復員

――百里原に戻られた後、すぐ終戦ということになりますね。

江名：８月10日に戻りました。それで、海軍航空隊のいい所なんでしょうかね、茨城県の袋田温泉に百里原の保養所がありました。戦地から帰ってきた者は、そこで５日ばかり休暇をくれました。広島を通りましたので、司令から原爆の被害について説明を求められました。原爆対応をどうしたらいいかとか。私はただ見てきただけですが、まあ、白いものを着てる者は放射線を反射して比較的、被害が少ないようだから、白い物を何か着るようにと聞きました、ということを報告しました。

一応参考になったと、それでとにかく、袋田温泉に５日ばかり休養して来い。それから本土決戦だから働いてもらう、という事で３人で袋田温泉に行きました。そこで終戦のラジオを聞きましたよ。慌てて隊へ戻ったら、もうテンヤワンヤなんです。それで、17日に搭乗員は復員しました。とにかくアメリカが上陸する前に身を隠せとも言われ、取るものもとりあえず、私もそこで退隊しました。

――そこで、ペアの皆さんともお別れを？

江名：ええ、別れました。

――その後、江名さんは東京に戻られたのですか？

江名：父親だけが東京に残って頑張っていました。母親と兄弟姉妹は飛騨の高山に疎開していましたので、まず飛騨の高山に参りました。

――特攻出撃から数カ月経っていますから、ご実家には戦死公報が入ってたのですか？

江名：ええ、弔慰金も来てました。それを見て、ちょっと考えたんですけど、父親からも「生きて還ったんだから、その金すぐに返して来い！」って言われましてね（笑）。海軍省に返しに行きました。

――江名さんが戻られて、ご家族は喜びました？

江名：ビックリしてましたですね。戦友から特攻出撃したって事を知らされていますから。それで弔慰金まで来ましたからね。だからビックリしてましたよ。

◆鎮魂と慰霊

――戦争が終わった後、江名さんは大学に復学されたのですか？

江名：大学１年の者は大部分、大学に戻りました。私も大学に復員届けに行きましたら、「もし卒業の免状が欲しければやるよ」と言われましたけどね。１年で学徒出陣ですからね、勉強らしい勉強はしておりませんでした。だから基礎的な勉強もしてみたいという事で、親の許しを得て大学に戻りました。

だけど、その時は食糧難でしょ。私は東京に自宅がありましたから、弁当にサツマイモあたり持って行きましたけれど。ビール瓶に重湯を詰めて飲んでる学生もいましたよ。そういう時代でしたけれども、私は復学して良かったと思います。そのまま社会に出たら、学術書を読む時間もなかったと思います。

――ペアの方とは戦後、お会いになりましたか？

江名：会いました。２人とも80歳を過ぎて、今は体調が悪く、黒島とか串良の慰霊祭には残念ながら出ることは難しいですね。大方の戦友は亡くなっております。黒島の柴田さん、中村憲太郎さんも大分前に亡くなりました。だから、マッカーサーの言葉じゃないですけど、私どもは「ｆａｄｅ　ａｗａｙ」する世代なんですけど（笑）。まあ、かろうじて残り時間を大事にしておりますけど（笑）。

――戦友とお会いした時には、戦争の時の話とかされるんですか？

江名：そうですね、やはり戦友っていうのは学生時代の友人とは違い、どうしても青春に営めた戦場体験の話が中心になります。今でも同期生の会合があちこちでありますが、そういう当時の話が中心です。懐かしく、いつも同じ話をしています。またか！と思いますけど、また聞いちゃうんですね。しゃべることがまたね、その人にとってのガス抜きなのかもしれませんけどね。みんな、よく同じ話をしますよ。それは変わりばえはないです。だって、引き出しが一つしかないんですから。そんな話を、やはり会うとするんですねえ。

――特攻の話も出るんですか？

江名：特攻隊については仲間ではします。ただ、部外者とはいたしません。特攻の話は、あまり私はしたくないし、しない人の方が多いかもしれませんね。

――ご自分の正直な気持ちとしては、あの時死ななくて良かったと思われます？やはり、複雑な気持ちですか？

江名：亡くなった戦友は20歳前後でした。それから私は65年生きてるわけですよ。この違い、不公平な配剤はちょっと言葉に表せませんね。こんなに不公平なことはないと思うんですよ。個人的には生き残って良かったと思いますが、亡くなった戦友に対して申し訳なく思います。ですから私どもは、特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会の春の慰霊祭、それから9月23日の世田谷特攻観音の秋季慰霊祭に、ひたすら亡き友の鎮魂、慰霊をしにお参りしています。

◆特攻とは何であったか

――江名さんが戦場に出られた頃は、特攻が当たり前のようになっていて、それが終戦まで続いたわけですけど、特攻作戦が行われた背景というものについて、江名さんは何かお考えがありますか？

江名：非常に難しいご質問ですけど。先程ちょっと申しましたように、ミッドウェイから、昭和17年6月から連戦連敗ですよね。それで当時のベテランの搭乗員が昭和18年になると、ほとんどゼロになりました。

そこで、海軍は慌てて予科練の大量募集。予科練の甲13期は2万人採ってるんですよ。予備学生は13期で5千名、14期で3千名でした。それだけの機材や燃料をどうしようと思って集めたのか分かりませんけどね。必要だったでしょうけど、残念ながら機材もないし燃料もないから、戦場に出るだけの技量も備えぬまま特攻戦死しました。

先程申しましたように、昭和19年6月ですか、マリアナ沖海戦では３７３機のうち３５０機以上が落とされて、しかも戦果ゼロなんですね。一応なけなしのパイロット、３００時間以上の訓練を受けたパイロット達を集めて新鋭機で攻撃に行って壊滅なんですよ。その前に「回天」とか「桜花」は計画されていましたから、別の次元で、特攻作戦を海軍は研究した訳ですけども。その頃、現地部隊では攻撃に行きましても、特に艦攻、艦爆なんていうのは全機落とされましたので、現地でも特攻作戦の考え方が起きましたし、大本営も〝外道の作戦〟をやらざるを得ないところまで追い込まれたと私は思います。通常攻撃で撃ち落されてしまうなら、爆弾を抱えての特攻の方が、まだ戦果があるんじゃないかという発想だったと思います。特攻は人員、機材がいずれトータル・ロスとなり、作戦とは言えませんが。

――江名さんは、特攻作戦の第一線に立たされた、まさにそういう世代にめぐり合ったわけですが、江名さんにとって特攻とは何か。例えば今振り返って、ご自分の特攻体験がその後の人生に影響を与えたことはありますか？

江名：そうですね、それは人さまざまだと思います。戦後、特攻に対する考え方はいろいろで、相当、幅がありますね。私の場合は、やはり日本という共同体（ゲマインシャフト）の中に住んでて、学徒として徴兵猶予の恩典まで与えられて戦争の最中、学業を続けられた。それで、私達の小学生の幼なじみはもう戦場に行き、戦死してるんです。そこにね、「ノーブレス・オブリージェ」ですか。与えられた特権に対しては義務と責任があると。この国がまさに滅びようとする時に、やはりその特権を与えられた我々は、まぁ悔しいけれども、自己犠牲……自己犠牲する事を苦しいけど自分自身に納得させて、柩となる自分の飛行機に乗るという考え方を私ども14期予備学生は共有しました。

外道の作戦とはいえ、危急存亡の時に若者がそういう気持ちになっておりました。特攻戦死した戦友のことを思うと辛くて、彼らの鎮魂・慰霊に一生尽さなきゃいけないという気持ちが強いんですよね。非道な、やってはいけない作戦でしたが、予科練の若い人達も含めまして、特攻の命令に対して自己犠牲で応じたことに、ただただ、もう頭が下がるばかりです。だから、特攻隊員っていうのは、基地を飛び立って、それで還ってこない人が真の特攻隊員だと思います。私のように還って

きた者が〝特攻隊員〟と名乗るのは、ちょっと僭越だと思いますね。私は特攻隊員じゃないんです。特攻隊員って言うのは、やはり基地を飛び立って還ってこない戦友のことを、私は言うべきだと思うんですね。

◆日本人のマジョリティ

江名：まあ、言えることはですね。当時の学徒は、非常に価値観が多様だったということです。私なんかはまだ大学一年ですからね。マルクスなどの禁書は、ほとんど読んでおりませんでした。手に入りませんでしたしね。禁書を手に持ちますと特高に捕まる時代でした。我々の仲間、学徒出陣組でも、そういったマルクスを勉強している男がいました。また、一方ではですね、国粋主義的な男もいました。思想は右から左まで非常に価値観が多様でした。

価値観は多様でしたが、日本人のマジョリティはですね、昭和16年12月８日、開戦の時に、みんな声を上げて「万歳！」を叫んだんですね。12月８日に詩人の高村光太郎は、こんなこと書いております。「記憶せよ。12月８日。この日、世界の歴史改まる。アングロサクソンの主権、この日、東亜の陸と海とに否定さる。否定するものは彼等の『ジャパン』。渺渺たる国にして、また神の国たる日本なり。これを知らしめたもう秋津御神なり」

それほどね、当時の日本人のマジョリティは、あの太平洋戦争を、12月８日を万歳でもって迎えました。もう１人、作家の伊藤整。彼がやっぱり、その日こういう事を書いています。「私はこの戦争を戦い抜くことを、日本の知識階級は大和民族として絶対に必要と感じている。私達は彼等のいわゆる黄色民族である。この区別された民族の優秀性を決定する為に戦うのだ。ドイツの戦いとも違う。彼等の戦いは同類の間の利害の争いの趣があるが、我々の戦いは、もっと宿命的な革新の為の戦いと思われる」と。こういう事を伊藤整が言ってるんです。

当時は、帝国主義の白人社会だったんですよ。その中に黄色（イエロー）の日本が、後発の帝国主義国家として台頭してきました。この「イエロー」を叩き潰すことが白人社会の最大命題だったんですね。「ジャップを叩け！」ということがヒトラーの「Ｍｅｉｎ Ｋａｍｐｆ（我が闘争）」にも書いてあります。黄色人種に対する侮蔑が。唯一、帝国主義の仲間に入った日本を叩き潰せということを、当時の日本人も感じていたんですね。だから、こういう伊藤整の文章になったんで。当時の日本人はいろいろ戦争に対する個人的な見解がありましたけど、あの戦争に突入したことによって、自分の持っている思想よりも、立ち上がった黄色人種の先頭に立つ日本が、何としてもこの戦争で勝利を遂げたいという思いがあったと思います。

◆アメリカ人学生との質疑応答

江名：私は外国の人とあまり戦争の話をしたことはありませんけども、昨年の３月に、その前の年の映画「特攻」に私も関係したもんですからね。アメリカで「特攻」を封切する時、来てくれないかということで、同期生と２人でアメリカに行きました。スタンフォード大学、カリフォルニアですね。ワシントンのジョージ・タウン大学と２カ所に行きました。映画が終わった後、学生と質疑応答をしました。

やはり一番ね、彼らはね、２００１年９月11日のことを言うんです。そのテロと特攻は同じじゃないかということを質問されました。もちろん、いろいろ説明したわけですけども……テロは無差別の殺戮だが、特攻はあくまでも対象は戦争で相手の軍隊だと。一般市民に対して我々は攻撃をしていないと。テロの宗教的な自己陶酔ですか、そういうテロと、国のために「愛する共同体（ゲマインシャフト）」のために自己犠牲になった特攻とは違いがあるんじゃないか。特攻というのは８月15日限りで、もう「リベンジ」はないが、テロは未だに、お互いリベンジ、リベンジを繰り返して絶える事ないと。そこに大きな違いがあるという話をしましたら、一応は納得してくれました。

それで国のために殉ずるということにつきましては、我々アメリカ人も星条旗のために戦ったんだと、それは全く同じだと。だから、特攻隊員の自己犠牲というものは、ある程度理解できるという事を言ってくれました。

◆次世代へ伝えたいこと

――私たちは戦争のことを何も知りませんが、特攻で犠牲になられた方々のことを理解したい、知りたいということもあって、こうしてお話を聞かせて

いただいているんですけど、特攻も含めて、ご自分の戦争体験を振り返られて、江名さんが次の世代に「これだけは伝えておきたい」ということがありましたら、是非お聞かせ下さい。

江名：アメリカの学生と話していて非常に印象深く受け取ったんですけど、現代史を勉強してるんです。しかもアメリカは今日も戦争していますよね。太平洋戦争についても勉強しています。

だから今、仰った若い人達には、世界史・日本史・特に現代史ですね。これを、やはり複眼的な目でもって勉強して頂ければと思いますね。結論としては戦争はやってはいけないということですが、現代史を勉強することによって日本がなぜ、あの戦争、太平洋戦争をしたかということを、自分自身で勉強して頂きたいと思います。特に帝国主義について、どういうものだったかと。日本も、かつて後発の帝国主義国家でした。その帝国主義が21世紀になっても、アメリカ・ロシア・中国などに見られます。

それと、日本の平和憲法です。戦争・武力というものを永久に日本はしない。陸海空軍兵力は持たない。そういう憲法があります。その憲法を日本だけでは守れませんからね。憲法を守るために、我々はどうしたらいいかということです。特に、唯一の被爆国である日本が先頭に立って核廃絶に努めること。そういうことを若い人達に、しっかりと身に付けてもらって、世界平和のために尽くして頂きたいと思いますね。

ただ、人類が理性を持ったのは、まだ五千年しかないんですよね。チグリス・ユーフラテスの時代からでしょ、初めてロゴス・知恵を人間が持ったのは。しかし、人間の中には２５０万年の間の動物の血が流れています。この動物の血というのは残虐です。弱肉強食ですからね。この動物の血を、とにかく21世紀に何としても静めなければなりません。私は今、世界史的には大変危険な状態にあると思います。これを如何にして日本人が先頭に立って、この危険な環境を平和に持っていけるかどうか、それが最大の問題だと思いますね。そういうことを、若い人達に真剣に考えて頂きたいということです。

――今日は貴重なお話をありがとうございました。

（……了……）

江名　武彦（第三正気隊・海軍少尉）軍歴

1943年（昭和18年）10月21日	早稲田大学在学中、東京神宮外苑で行われた出陣学徒壮行会に参加。
1943年（昭和18年）12月10日	大竹海兵団入団。
1944年（昭和19年）２月１日	飛行科予備学生第14期として土浦海軍航空隊入隊。
1944年（昭和19年）６月	偵察士として大井海軍航空隊に赴任。
1945年（昭和20年）３月17日	特攻要員として百里原海軍航空隊に転属。
1945年（昭和20年）４月10日	神風特別攻撃隊「正気隊」編成。特攻隊員に指名される。
1945年（昭和20年）４月20日	鹿児島県串良基地に移動。
1945年（昭和20年）４月28日	「第１正気隊」の一員として串良を離陸するが、エンジントラブルのため知覧基地に緊急着陸。
1945年（昭和20年）５月11日	「第３正気隊」の一員として串良を出撃。途中、エンジントラブルのため黒島近海に不時着水。 その後、島民に救助され黒島での生活が始まる。
1945年（昭和20年）７月30日	陸軍潜航輸送艇（マルユ）に便乗して黒島を離れる。
1945年（昭和20年）８月１日	長崎県口之津に入港。佐世保、大分、広島を経て茨城県百里原に向かう。
1945年（昭和20年）８月10日	百里原に到着。原隊復帰。
1945年（昭和20年）８月17日	復員。

私の好きな「言葉」

理事　廣嶋　文武

会員の皆々様、新年明けましてお目出とうございます。お陰様で「一白水星・丁卯」の84歳と馬齢を重ね、７回目の卯年を迎えます。毎日を昔からよく言われる過去・現在・未来の中で、過去のみが駆け巡る毎日です。ただ未来については・・・。

私はこの頃二つの言葉が脳裏から離れません。その一つが「国家があなたに何をできるかではなく、あなたが国家のために何ができるかを問おう」— ask not／what your country can do for you／-ask what you can do for your country.—

有名なケネディ米大統領の就任演説であります。

二つ目は、「大きなナラの木は、小さなドングリから育つ」— tall oaks grow from little acorns.—

昨年栄えあるノーベル化学賞を受賞した鈴木章、根岸栄一両博士の恩師であるバデュー大学教授で、先にノーベル化学賞を受賞したブラウン博士の言葉であります。

今からでは遅きに失しますが、これらの言葉を座右の銘とし、残り少ない人生を過ごして行きたいと思います。

昨年は、私が学んだ宮崎の地に、口蹄疫が発生し、約27万頭の牛、豚が犠牲になりました。そこに全国の獣医師の、専門職としての大きな尊い大活躍がなかったら、それは計り知れない国家の大損失になったと思われます。

心から感謝するとともに、敬服の至りです。これから限りない獣医師としての誇りが、褒め讃えられますよう、祈念して止みません。

平成22年度第２回評議員会・理事会等報告

事務局長　羽渕　徹也

一　評議員会、理事会の開催

昨平成22年12月10日（金）、（財）偕行社・会議室において、平成22年度第２回の評議員会（午前）及び理事会（午後）が開催され、別掲の平成23年度事業計画及び同収支予算（案）を審議し、いずれも全員一致で議決、承認された。

更に平成22年12月で、２年の任期を迎える理事及び評議員の選任審議が行われ、理事及び監事は全員再任ということで、次の方々が選任された。

理事—山本卓眞、菅原道熙、杉山蕃、深山明敏、藤田幸生、大久保隆、栗原宏、廣嶋文武、臼田智子、笹幸恵の10名。

監事—伊集院雅英、志賀昭夫の２名。

また、評議員は、７名が退任され、新しく５名を加えて、次の方々が選任された。

再任—穴山正司、飯田正能、石井光政、大穂孝子、小倉利之、衣笠陽雄、倉形桃代、田村力、中江仁、中村家久、水町博勝の11名、

新任—秋山政隆、石井千春、及川昌彦、新垣敬輝、根木東洋の５名、

合計16名。

また、定例の理事会及び評議員会とは別に、藤田理事長から提案された、協会の「今後の活動方針等」について、理事及び評議員等全員による活発な検討会が行われた。

なお、予算案等、これらの決議には、次に述べる新公益法人移行認定に関連する付帯決議も了承された。

二　新公益法人への移行について

①　公益法人認定法等の施行

平成20年12月に施行された新公益法人制度により、５年の間に新公益法人への移行申請を行わなければならないこととなった。

②　協会の移行準備

理事会等の役員会において、協会としても公益法人への移行を進めることが決議され、平成22年９月末の理事会等で、移行申請に関して決議されるまでの間、２年を掛けて種々の準備等が進められた。

③　公益法人への移行申請

９月の理事会決議を受けて、10月中旬、内閣府公益等認定委員会に正式な公益法人への移行認定申請書を提出した。

④　移行認定の決定

認定申請書の提出後約２カ月で公益法人移行認定の内定を受け、次いで平成22年12月22日、認定書の交付を受けて新公益法人への移行登記と旧財団法人の解散登記が可能となり、年明け早々の本平成23年１月４日、右の両登記を完了して、正式に新公益財団法人として発足した。

三　新公益法人について

①　法人の名称

役員会等の決議により決定した次の法人名称で申請を行い、認定を受けた。

『公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会』

②　役員等の構成

代表理事　山本　卓眞

専務理事　藤田　幸生
業務執行理事　栗原　宏
理事　菅原　道熙　杉山　蕃
深山　明敏　大久保　隆
廣嶋　文武　臼田　智子
笹　幸恵
監事　伊集院雅英　志賀　昭夫

評議員は、前記平成22年12月10日の理事会で決議された16名が、新法人の評議員に移行される。

なお、従前と異なり、理事、監事を含め評議員も法人の登記簿に氏名が登載される。

③　新法人の事業年度等

新法人の事業計画及び収支予算計画は、1月4日を事業開始日とし、平成22年12月10日に決議された各計画が移行され、旧法人の平成22年度会計は、同22年1月1日から同23年1月3日までの変則的期間となる。

また、新法人の定款、事業計画等は、法律等に基づきホームページに掲載される。

四　第32回陸海軍特攻隊合同慰霊祭の開催について

本会報に別紙「慰霊祭御案内」を同封しておりますが、会員の皆様方のみならず、御家族、お知り合いの方などお誘い合わせの上、多数御出席くださいますようお願い申し上げます。

出席される方は、同封の払込み用紙に記載の上、お申し込みください。

①　慰霊祭、総会、懇親会の日時
平成23年3月26日（土）
11時～14時

②　場所
慰霊祭　靖國神社拝殿・本殿
総会・懇親会　靖國会館2階

③　会費
慰霊祭、懇親会出席者
一　般　七〇〇〇円
御遺族　六〇〇〇円
慰霊祭のみの出席者　二〇〇〇円
以　上

平成23年度事業計画

一　方　針

当協会は、特攻隊戦没者の慰霊顕彰を主たる事業として各種公益目的事業を推進するとともに、協会活動の充実を図るため、会勢拡充事業を強化する。また、新公益法人への移行後の新しい執行態勢を検討し、新定款に伴う内部規定の改廃及び新執行態勢の充実に努める。

二　各種実施事業

1　公益目的事業

（1）慰霊事業

ア　春に靖國神社において合同慰霊祭を、及び9月23日に世田谷山観音寺において年次法要を実施する。

イ　国内外において他の慰霊団体等が実施する特攻隊戦没者に関連する慰霊祭等に参加又は協力する。

（2）広報事業

ア　貴重な歴史的資料として機関誌・会報『特攻』を発行する。これには、特攻隊戦没者等の関連記事及び特攻関係生存者の伝承記事等を掲載し、会員及び会員以外の希望者に頒布する。

イ　ホームページ上で、会報『特攻』の内容、特攻隊戦没者等の関連情報及び当協会の運営状況等を情報公開するとともに、会勢の拡充に活用する。

（3）出版事業

ア　特攻隊戦没者等に関する史実の調査及び研究資料等の収集を実施し、さらにまた、可能な特攻隊関係者から体験談等を直接聴取し、記録を残す。

イ　従前に刊行、作成した特攻隊戦没者等に関する図書、資料等を会員及び会員以外の希望者に頒布又は紹介する。本年度における具体的な出版事業計画はないが、急を要する場合は出版物等を刊行する。

（4）特攻勇士の像建立事業

各地の護国神社等へ「特攻勇士の像」を奉納する事業を継続する。

2　協会課題事業

（1）会勢拡充事業

会員の高齢化及び世代交代等による会員数減少防止のため、新たに会勢拡充事業担当者等を組織し、継続的な会員加入促進のための具体策を検討し、具体的な方策を推進する。

（2）事業内容の検討

ア　慰霊事業等
主催する慰霊祭及び他団体の慰霊祭等への参加態様、「特攻勇士の像」建立推進策等

イ　広報事業
会報『特攻』編集態勢の強化策等及びホームページの構成内容の充実等

三　その他の事項

新公益法人への移行認定を予期して、新定款に伴う必要な措置等を確認し、所要に応じ内部規定の改廃を行うとともに、協会課題事業の推進に伴う必要な執行態勢等を構築する。

平成２３年度収支予算書

平成２３年１月１日から平成２３年１２月３１日まで　（単位：円）

科　目	予算額	前年度予算額	増　減	備　考
Ⅰ　事業活動収支の部				
１　事業活動収入				
①基本財産運用収入	6,180,000	5,730,000	450,000	運用実績等
②特定資産運用収入	70,000	70,000	0	
③会費収入				
年会費	6,200,000	6,600,000	△ 400,000	会員数減少
④　事業収入				
慰霊事業収入	3,800,000	3,800,000	0	
出版事業収入	300,000	600,000	△ 300,000	出版物減少
⑤　寄付金	1,200,000	1,200,000	0	
⑥　雑収入	50,000	50,000	0	
事業活動収入計	17,800,000	18,050,000	△ 250,000	
２　事業活動支出				
①事業費				
慰霊祭懇親会費	1,000,000	1,000,000	0	
像制作委託費	600,000	1,200,000	△ 600,000	建立数１体減
発送等委託費	1,630,000	1,600,000	30,000	
他団体寄付金	2,850,000	2,850,000	0	
給料手当	2,050,000	2,100,000	△ 50,000	
福利厚生費	260,000	250,000	10,000	
旅費交通費	1,260,000	1,200,000	60,000	
通信運搬費	270,000	260,000	10,000	
消耗品費	240,000	330,000	△ 90,000	
印刷製本費	2,670,000	2,900,000	△ 230,000	出版計画関連
光熱水料費	50,000	50,000	0	
賃借料	720,000	720,000	0	
諸謝金	150,000	150,000	0	
雑支出	100,000	200,000	△ 100,000	
事業費計	13,850,000	14,810,000	△ 960,000	
②管理費				
役員報酬	280,000	0	280,000	規程より新規
給料手当	2,050,000	2,100,000	△ 50,000	
福利厚生費	260,000	260,000	0	
旅費交通費	620,000	330,000	290,000	交通費増加
通信運搬費	250,000	250,000	0	
消耗品費	100,000	130,000	△ 30,000	
会議費	300,000	300,000	0	
光熱水料費	50,000	50,000	0	
賃借料	720,000	720,000	0	
諸謝金	30,000	30,000	0	
租税公課	70,000	70,000	0	
雑支出	100,000	200,000	△ 100,000	
管理費計	4,830,000	4,440,000	390,000	
事業活動支出計	18,680,000	19,250,000	△ 570,000	
事業活動収支差額	△ 880,000	△ 1,200,000	320,000	
Ⅱ　投資活動収支の部				
１　投資活動収入				
①特攻像建立基金取崩収入	0	1,200,000	△ 1,200,000	本年から取崩せず
投資活動収入計	0	1,200,000	△ 1,200,000	
２　投資活動支出				
①減価償却引当資産取得支出	129,800	0	129,800	昨年未計上
②退職給付引当資産取得支出	164,000	263,750	△ 99,750	
③什器備品費購入支出	0	50,000	△ 50,000	
投資活動支出計	293,800	313,750	△ 149,750	
投資活動収支差額	△ 293,800	886,250	△ 1,180,050	
Ⅲ　予備費支出	0	0	0	
当期収支差額	△ 1,173,800	△ 313,750	△ 860,050	
前期繰越収支差額	2,572,580	2,886,330	△ 313,750	
次期繰越収支差額	1,398,780	2,572,580	△ 1,173,800	

事務局からの報告等

寄附者御芳名（敬称略）

（平成22年10月1日～12月31日）

（単位千円）

二〇　千　玄室
七　滝澤　昭二　七　丹羽　等
四　松本　憲二　三　鵜飼　爵優
三　尼子　和世　二　北谷　正晴
二　宇井　忠一　二　福田　保光
二　日比野臣三郎　二　冨澤　康之
二　土田　八也　二　梶原　次男
二　山本　精一　二　下出　忍

御芳志誠に有り難うございました。

◇　◇　◇

新入会員名簿（敬称略）

（平成22年10月1日～12月31日）

茨城県　中村光太郎
埼玉県　村田　春樹　長島　治
　　野山騎由貴
東京都　矢野　情二　丸谷　護
　　小林ちえみ　日高　裕明
　　姉崎　裕治
神奈川県　青木　秀樹
愛知県　青木　和子
大阪府　濱野　晃吉
奈良県　山道　哲也
愛媛県　岡　誠
熊本県　一　多喜雄
宮崎県　石川　武則

◆　◆　◆

会員訃報（敬称略）

謹んで哀悼の意を捧げます。

東京都　秋山　明（22・6・6）
　　馬越　久男
　　金子　裕（22・4）
　　古賀　昭典（22・3・4）
　　島崎　政彦（21・7・29）
　　藤本　靖矩（22・6・9）
埼玉県　切通　博明（22・11・23）
大阪府　川崎　敏夫（22・3・4）
兵庫県　岸本　正義（22・8・26）
　　野上　憲助（22・10・8）
広島県　大神　茂（22・10・5）
福岡県　時松喜志男（22・12・11）
　　山口　芳丸（22・2・11）
鹿児島県　黒木　範男（22・12・1）

会報「特攻」第85号正誤表

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

（訂正箇所）

43頁　上段前から4行目
誤「振部隊」正「振武隊」
43頁　上段2（ハ）誤（海流・・）
正（海竜・・）
43頁　上段2（ニ）
誤（準特攻戦没者）は、15名が
正（準特攻戦没者）15名が・・

当会会員ご入会のご案内

当会は、先の大戦において、祖国の安泰を願い、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊をお祀りして慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私たちは、彼らからその精神を学び、現在の日本の現況や自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の方のご入会をお願い申し上げます。

○会の沿革

昭和27年5月設立
平成5年11月財団法人認可
平成22年12月公益財団法人認定
初代会長　竹田　恒徳　元宮様
二代会長　瀬島　龍三　氏
現代表理事　山本　卓眞　氏

○会の主な事業

・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
・講演会等の開催
・機関誌等の発刊その他

○年会費

・一般会員3000円
・学生会員1000円

〒105-0014　東京都港区
芝2-5-19TAビル4階
公益財団法人特攻隊戦没者慰
霊顕彰会事務局
電　話03-5730-1016
FAX03-5730-1017

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1　原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めでお願いします。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当会事務局にお任せ願います。

3　慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4　原稿、写真等は、原則としてお返しいたしませんが、必要の場合は、その旨お書き添えください。

5　会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当会事務局宛としてください。

記

〒105-0014　東京都港区
芝2-5-19TAビル4階
（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会
事務局
電　話03-5730-1016
FAX03-5730-1017